総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅰ　―遠見山古墳の調査―

前橋市教育委員会2020

総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅰ

― 遠見山古墳の調査 ―

前橋市教育委員会
2020

総社古墳群
範囲内容確認調査報告書Ⅰ
―遠見山古墳の調査―

２０２０.３

前橋市教育委員会

遠見山古墳全景（榛名山を望む。手前が後円部）

墳丘盛土土層断面（第 3 トレンチ）

巻頭図版2

北側くびれ部葺石（第５トレンチ　西より）

第５トレンチオルソ画像（左側が北）

第 5 トレンチ埴輪列（西から）

第 2 トレンチ祭祀跡遺物出土状況

第 2 トレンチ葺石検出状況（北から）

周堀完掘状況（第 7 トレンチ　南から）

巻頭図版4

第 5 トレンチ埴輪列出土埴輪

第 2 トレンチ祭祀跡出土土器

はじめに

前橋市の総社地区から元総社地区にかけては、総社古墳群や山王廃寺、上野国府、上野国分二寺など歴史資産の豊富なエリアで、本市の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。

総社古墳群は、古墳時代中期から後期にかけてこの地域を治めた豪族の墓と考えられます。精緻に組み上げられた巧みな石室づくりや見事な石棺などは畿内の有力者の古墳にも引けを取らず、東日本を代表する古墳群の一つに数えられます。しかし、これまで部分的な調査にとどまっているため、古墳がどのような形をしているのか、古墳の範囲はどこまでなのかといった詳細な様子は分かっていません。

総社古墳群という重要な歴史資産を、適切に保存して未来に引き継ぐためには、各古墳の保存・活用の方策を立てる必要があります。このための基礎的な情報収集を目的として、平成29年度より総社古墳群の範囲内容確認調査に着手しました。今回上梓する報告書は、２か年にわたり調査を行った前橋市指定史跡遠見山古墳の調査内容をまとめたものです。今回の調査では見事な葺石や祭祀跡が見つかるなど、大きな成果を上げることができました。

最後に、本事業の推進にあたってご理解とご協力をいただきました国・県・市の関係各位や、地元総社町各自治会、土地所有者の皆さんに対し、厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

前橋市教育委員会

教育長　**塩　﨑　政　江**

例　　言

1　本報告書は、総社古墳群範囲内容確認調査計画に基づき、７ヵ年の調査計画（平成29～令和５年度）の１・２年次調査として、平成29～30年度に実施した前橋市指定史跡遠見山古墳の発掘調査報告書である。

2　遺跡は群馬県前橋市総社町総社字給人城川1410番地１ほかに所在する。

3　発掘調査は、総社古墳群調査検討委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。

①発　掘　調　査　期　間　　平成29年10月２日～平成30年１月６日
　　平成30年10月２日～平成31年１月25日

②整理・報告書作成期間　　平成31年４月１日～令和２年３月16日

③調査組織（平成29～令和元年度）

総社古墳群調査検討委員会

⑴　委 員 会

委 員 長　右島和夫（群馬県立歴史博物館館長）

委　　員　林部　均（国立歴史民俗博物館副館長）

山本孝文（日本大学文理学部教授）

指　　導　文化庁文化財第二課文化財調査官、群馬県教育委員会文化財保護課

⑵　事 務 局（担当課　前橋市教育委員会事務局文化財保護課）

教 育 長　塩﨑政江

教育次長　橋本誠次（平成29年度）

根岸隆夫（平成30年度）

堀越規子（令和元年度）

課　　長　田中隆夫

係　　長　登山伸一（平成29・30年度）、大野裕史（令和元年度）

係　　員　小川卓也、前原　豊

④発掘・整理担当者　　小川卓也

4　本書の編集は小川が行った。

5　本書の執筆は以下のとおりである。

第３章　㈱火山灰考古学研究所　第４章第４節　前原　左記以外　小川

6　発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

大石隆夫、斉藤　香、齋藤正道、代田綾子、田村哲雄、中村正信、光安泰子、峰岸あや子、萩原悠策、吉井結香

7　発掘調査にあたり、吉沢四郎氏、神谷三代子氏の土地を借用した。

8　調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力があった（五十音順・敬称略）。

群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市役所建設部公園管理事務所、総社町城川自治会

今城未知、梅澤重昭、神谷三代子、川口　亮、川畑　純、小林　正、永井智教、能登　健、深澤敦仁、三浦茂三郎、山下歳信、吉沢四郎、若狭　徹

9　発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1　挿図中に使用した北は、座標北である。

2　挿図に建設省国土地理院発行の１：50,000地形図（前橋）を使用した。

3　本遺跡の略称は、29Ａ234および30Ａ240である。

4　遺構・遺物の実測図の基本的な縮尺は次のとおりである。ただし、図の配置上、他の縮尺を使用したほうが適切な場合は、その他の縮尺を適宜使用した。

遺構　　遺構平面図・断面図…１：80　遺物出土状況図…１：50

　　葺石平面図・断面図…１：40　祭祀跡…１：20

遺物　　円筒埴輪…1/5　形象埴輪…1/3　土器・陶磁器1/4

5　スクリーントーンの使用は、次のとおりである。特別な場合は図版ごとに凡例を設けた。

遺構断面図　　地山層…　　墳丘盛土…　　Hr-FA 堆積層…

遺物実測図　　形象埴輪赤彩…

6　主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-Kk（浅間粕川テフラ：供給火山・浅間山、1128年）

As-B　（浅間Ｂ軽石：供給火山・浅間山、1108年）

Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、６世紀中葉）

Hr-FA（榛名二ッ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、６世紀初頭）

As-C　（浅間Ｃ軽石：供給火山・浅間山、３世紀後半～４世紀初頭）

目　　次

第１章　事業の概要 …… 1

第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　遺跡の立地と環境…… 1
第３節　歴史的環境…… 2
第４節　基本層序…… 5

第２章　遠見山古墳の調査 …… 6

第１節　調査の概要…… 6
第２節　平成29・30年度の調査…… 7
第３節　平成３年度の調査……28
第４節　平成６年度の調査……28
第５節　出土遺物……32

第３章　自然科学分析 ……72

平成29年度総社古墳群範囲内容確認調査テフラ分析業務報告書……72

第４章　成果と課題 ……76

第１節　墳丘形状および兆域の推定……76
第２節　遠見山古墳の葺石の石材組成について……80
第３節　出土遺物について……83
第４節　蛇穴山古墳・宝塔山古墳の墳丘・周濠範囲について……88
　第１項　蛇穴山古墳の墳丘・周濠範囲について……88
　第２項　宝塔山古墳の墳丘・周濠範囲について……90

図版目次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　周辺の遺跡…… 4
第３図　周辺の代表的な層序…… 5
第４図　遠見山古墳トレンチ設定図…… 6
第５図　第１トレンチ平面図・断面図…… 8
第６図　第２トレンチ平面図・断面図…… 9・10
第７図　第２トレンチ葺石・祭祀跡……11
第８図　第２トレンチ遺物出土状況図……12
第９図　第３トレンチ平面図・断面図……13・14
第10図　第４トレンチ平面図・断面図……16
第11図　第５トレンチ平面図・断面図……17・18
第12図　第５トレンチ葺石……19・20
第13図　第５トレンチ遺物出土状況図……21・22
第14図　第６トレンチ平面図・断面図……24
第15図　第７トレンチ平面図・断面図……26
第16図　第８トレンチ平面図・断面図……27
第17図　平成３年度調査平面図……29
第18図　平成３年度調査土層断面図……30
第19図　平成６年度調査平面図・断面図……31
第20図　円筒埴輪（１）……33
第21図　円筒埴輪（２）……34
第22図　円筒埴輪（３）……35
第23図　円筒埴輪（４）……36
第24図　円筒埴輪（５）……37
第25図　円筒埴輪（６）……38
第26図　円筒埴輪（７）……39
第27図　円筒埴輪（８）……40
第28図　円筒埴輪（９）……41
第29図　円筒埴輪(10)……42
第30図　円筒埴輪(11)……43
第31図　円筒埴輪(12)……44
第32図　円筒埴輪(13)……45
第33図　円筒埴輪(14)……46
第34図　円筒埴輪(15)……47
第35図　円筒埴輪(16)……48
第36図　円筒埴輪(17)……49
第37図　円筒埴輪(18)……50
第38図　円筒埴輪(19)……51
第39図　円筒埴輪(20)……52
第40図　形象埴輪……69
第41図　土器・陶磁器……70
第42図　遠見山古墳範囲推定図……79
第43図　石材組成の棒グラフ……81
第44図　河川礫調査地点……82
第45図　遠見山古墳の葺石……82
第46図　主な円筒埴輪……85
第47図　保渡田古墳群出土埴輪との比較……85
第48図　遠見山古墳祭祀跡の遺物出土状況と出土土器…87
第49図　保渡田八幡塚古墳東中島の遺物出土状況と
　　群馬県立歴史博物館所蔵資料……87
第50図　蛇穴山古墳と宝塔山古墳の墳丘・
　　周濠の範囲図……92・93

写真図版目次

PL. 1　第１トレンチ完掘状況（北西より）
　　周堀墳丘側立ち上がり（Ｔ１）
　　周堀外側立ち上がり（Ｔ１）
　　墳丘土層堆積状況（Ｔ１）
　　周堀内遺物出土状況（Ｔ１）
PL. 2　周堀外側立ち上がり完掘状況（Ｔ２）
　　第１段葺石検出状況（Ｔ２）
　　基壇テラス遺物出土状況（Ｔ２）
　　祭祀跡遺物出土状況（Ｔ２）
　　第２・３段葺石検出状況（Ｔ２）
　　第２段葺石検出状況（Ｔ２）
　　第３段葺石検出状況（Ｔ２）
　　墳頂部白色粘土堆積状況（Ｔ２）
PL. 3　第３トレンチ完掘状況
　　周堀完掘状況（Ｔ３　東から）
　　周堀土層確認状況（Ｔ３）
　　墳丘断ち割り土層確認状況①（Ｔ３）
　　墳丘断ち割り土層確認状況②（Ｔ３）
　　墳丘断ち割り土層確認状況③（Ｔ３）
PL. 4　遺構確認状況（Ｔ４）
　　周堀掘り下げ状況①（Ｔ４）
　　周堀掘り下げ状況②（Ｔ４）
　　土層確認状況（Ｔ４）
　　くびれ部葺石検出状況（Ｔ５）
PL. 5　東壁土層確認状況（Ｔ５）
　　中央ベルト土層確認状況（Ｔ５）

西壁土層確認状況①（Ｔ５）
西壁土層確認状況②（Ｔ５）
くびれ部サブトレ土層確認状況（Ｔ５）
埴輪列検出状況①（Ｔ５）
埴輪列検出状況②（Ｔ５）
PL. 6　くびれ部遺物出土状況①（Ｔ５）
くびれ部遺物出土状況②（Ｔ５）
周堀完掘状況①（Ｔ６　南から）
周堀完掘状況②（Ｔ６　北から）
基壇斜面葺石（Ｔ６）
PL. 7　井戸跡検出状況（Ｔ６）
周堀内土層堆積状況（Ｔ６）
周堀完掘状況（Ｔ７）
基壇立ち上がり確認状況（Ｔ７）
周堀土層確認状況①（Ｔ７）
周堀土層確認状況②（Ｔ７）
PL. 8　第８トレンチ完掘状況
土層確認状況①（Ｔ８）
土層確認状況②（Ｔ８）
第１号土坑完掘状況（Ｔ８）
総社古墳群調査検討委員会議（H30）
委員による現地指導の様子（H30）
遠見山古墳出土形象埴輪
PL. 9　第１トレンチ出土埴輪
第２トレンチ祭祀跡出土土器
PL. 10　第２トレンチ出土埴輪
第３トレンチ出土埴輪
PL. 11　第４トレンチ出土埴輪
第５トレンチ出土埴輪①
PL. 12　第５トレンチ出土埴輪②
第５トレンチ出土埴輪③
PL. 13　第６トレンチ出土埴輪
第７トレンチ出土埴輪

表　目　次

円筒埴輪観察表……53
土器陶磁器観察表……71
第１表　遠見山古墳の葺石の石材組成……81
第２表　河川礫との石材組成の比較……81
第３表　蛇穴山古墳と宝塔山古墳の調査経過……89

自然科学分析

図１　第１トレンチ東壁の土層柱状図……75
表１　遠見山古墳におけるテフラ検出分析結果……75
表２　屈折率測定結果……75
写真１　第１トレンチ東壁・試料５（落射光下）……75

第１章　事業の概要

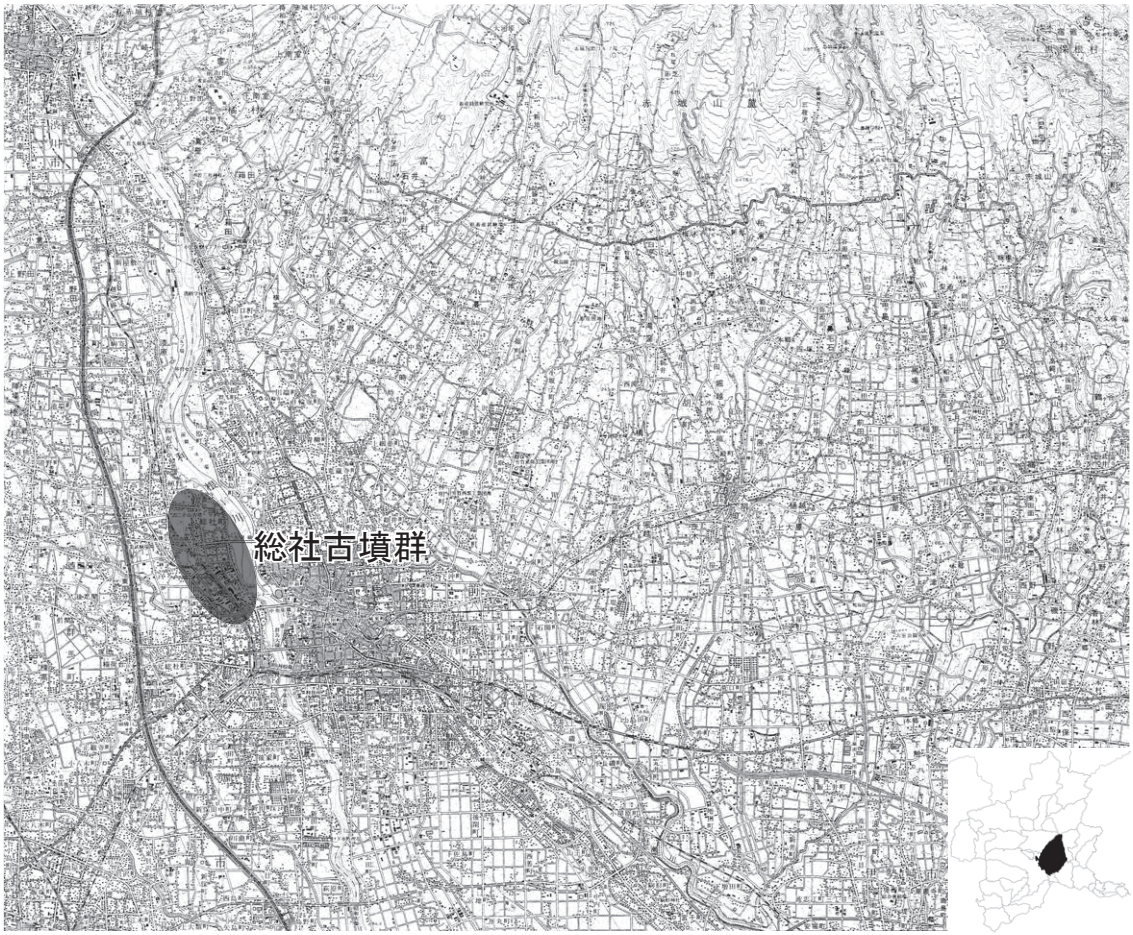
第１節　調査に至る経緯

総社古墳群は、前橋市西部の総社町総社を中心とした地域に、５世紀後半から７世紀にかけて築かれた古墳群である。総社二子山古墳出土と伝えられる頭椎大刀をはじめとする優美な出土品や、宝塔山古墳・蛇穴山古墳などに見られる巧みな石室づくりなどから古くより著名で、東日本を代表する古墳群の一つに数えられる。現在首長墓とみられる６基の大型古墳が残されるが、うち３基が国史跡に、２基が市史跡に指定されている。しかし、指定を受けているのは墳丘部を中心としたゾーンであり、各古墳に対する調査はこれまで断片的なものにとどまるため、兆域など詳細な実態は判然としていない。また、当地域でも開発の波が押し寄せており、史跡の適切な保存にも支障を生じかねない状況が続いている。総社古墳群の歴史的な重要性を鑑み、前橋市教育委員会では、古墳群の保存･活用の方策を立てるための基礎的なデータ収集を目的として、平成29年度より古墳群の範囲内容確認調査に着手することとなった。調査に当たっては、学識経験者による「総社古墳群調査検討委員会」を設置し、文化庁および群馬県教育委員会の指導の下、合計７か年計画の調査を予定している。

調査に当たっては、周辺の開発影響が大きい市指定史跡遠見山古墳の調査から手掛けることとした。古墳の兆域や墳丘形状の確認のため、委員会・文化庁・群馬県教育委員会の指導を受けて、平成29年度および平成30年度に古墳周囲および墳丘部に８か所のトレンチを設定して調査を行った。

第２節　遺跡の立地と環境

総社古墳群は、前橋市西部の総社地区を中



第１図　遺跡位置図

心とした利根川西岸に、南北約４㎞の範囲に分布する古墳群である。榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端が前橋台地に移行する付近に当たる。北西から南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、午王頭川や、八幡川、染谷川、牛池川といった榛名山麓を水源とする多くの中小河川も同方向に並走して、台地を細長く画している。また、前橋台地は、約２～2.4万年前の浅間山の噴火により、利根川が赤城山と榛名山の間から関東平野に流れ出して形成された緩傾斜の台地であり、その中央を現利根川が貫流している。現利根川の流路は中世後期以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域に広がる広瀬川低地帯を流下していたと考えられる。

第３節　歴史的環境

古墳群が所在する総社地区から元総社地区にかけては、古代上野国の政治・経済・文化の中心地として歴史上重要な役割を果たした地域であり、本市の歴史を語る上で欠くことのできない遺跡が多数所在する。本事業の主体となる古墳時代を中心として、各時代の様相を概観する。

縄文時代：高崎市国分町～北原町の上野国分僧寺・尼寺中間地域（⑨）では、前期～晩期の遺物が出土し、加曾利Ｅ式期の集落が検出されている。また元総社蒼海遺跡群（⑩）でも諸磯ｂ式期および加曾利Ｅ式期の集落が調査されており、前期および中期をピークとした集落展開がなされたものと考えられる。また、本市では類例の少ない大洞 BC ～Ｃ２式期の住居跡も牛池川沿いの場所で確認されており、該期の集落の様子を知る上で重要な資料である。

弥生時代：調査事例は少なく、上野国分僧寺・尼寺中間地域で後期の集落や方形周溝墓が確認されているほか、下東西遺跡（⑪）で後期の集落を検出している。また、元総社明神遺跡（⑫）では流路内から中期に遡る土器が出土している。

古墳時代：当地域が地理・歴史的に重要な位置を占めるに至った時期であり、大きな画期といえる。前期の様相は不明瞭ながら、５世紀後半以降相次いで大型墳を築いた総社古墳群は地域の首長墓と考えられる。その端緒を開くのは遠見山古墳（①）である。遠見山古墳は前橋市総社町総社字給人城川に所在し、古墳群中北東の現利根川寄りの場所に位置する。東西方向に主軸を持ち、現況での墳丘長70mほどの前方後円墳である。周囲は南～西側を畑で囲まれるものの、後円部のある東側は住宅地となっている。宅地開発等に伴って過去２回発掘調査が行われ、周堀下層に Hr-FA の堆積が確認されている。既往の調査内容については後述する。平成22年に市史跡に指定されている。

遠見山古墳に続くのは、古墳群の最南部である前橋市大渡町に所在する王山古墳（②）である。６世紀初頭の築造と考えられ、昭和47・49年に区画整理事業に伴う全面調査が行われた。南北方向に主軸を持ち、前方部を北に向ける。墳丘全体に施した葺石の遺存状態も良好で、墳丘上からは盾形・大刀形埴輪が出土している。また、主体部は南東方向に開口する横穴式石室をいち早く採用しており、細長い石室には赤彩が施されている。現在は公園として整備され、昭和59年に市史跡に指定されている。後続するのは総社二子山古墳となるが、王山古墳との時間的なヒアタスから、その間に王山古墳の北方に所在した前方後円墳の王河原山古墳を充てる考えが提示されている（右島1985）。

総社二子山古墳（③）は古墳群でも北部に位置し、前橋市総社町植野に所在する。明治８年には陵墓参考地に治定され（翌年解除）、昭和２年に国史跡に指定されている。古墳群中最大規模の前方後円墳であり、東西方向に主軸を持ち、南側に開口した石室は後円部と前方部の２か所に築かれる。角閃石安山岩を用いた加工石材による後円部石室は県内の該期古墳でも最大級である。また、前方部石室は、規模は後円部石室に劣るが、輝石安山岩の自然石を使用している。石室内から出土し

たとされる頭椎大刀の絵図が残されており、同時期の築造とみられる綿貫観音山古墳出土の大刀との類似性が注目される。前方部石室からは、頭椎大刀のほかには、耳管や勾玉、刀子、六鈴釧、脚付須恵器壺などが出土したとされ、現在東京国立博物館に所蔵されている。古墳の築造は６世紀後半と考えられる。本古墳をもって前方後円墳の築造は終わり、以降は大型方墳へと移行する。

愛宕山古墳（④）は、総社二子山古墳南東の至近の場所に築かれる。墳丘規模は一辺約56mの方墳で県内該期の古墳では最大規模である。墳丘東側を江戸時代初期に開削された天狗岩堰用水に削られるものの墳丘の遺存状態は良好で、現況測量成果から２段築成と考えられる。墳丘南側に開口した自然石積みの巨大な石室を持ち、石室奥には凝灰岩製の刳抜式家形石棺を置く。７世紀前半の築造と考えられる。

続く７世紀中葉には、愛宕山古墳の南方に宝塔山古墳（⑤）が築かれる。墳丘規模は60mを超える巨大な方墳である。総社町屋敷南遺跡（⑦）の調査で周堀が確認されており、周堀を含めた兆域は一辺100m以上と推定される。墳頂部には、江戸時代初期に総社藩を治めた秋元氏の歴代墓地が安置されている。南向きに開口した石室は截石切組積の巧みな石室で、石室内には漆喰が塗布される。玄室には刳抜式家形石棺が置かれ、石棺の脚部には格狭間が施されるなど仏教の影響が看取される。墳丘規模も含めて県内の他の古墳と比較しても隔絶したつくりを誇り、昭和19年に国史跡に指定されている。

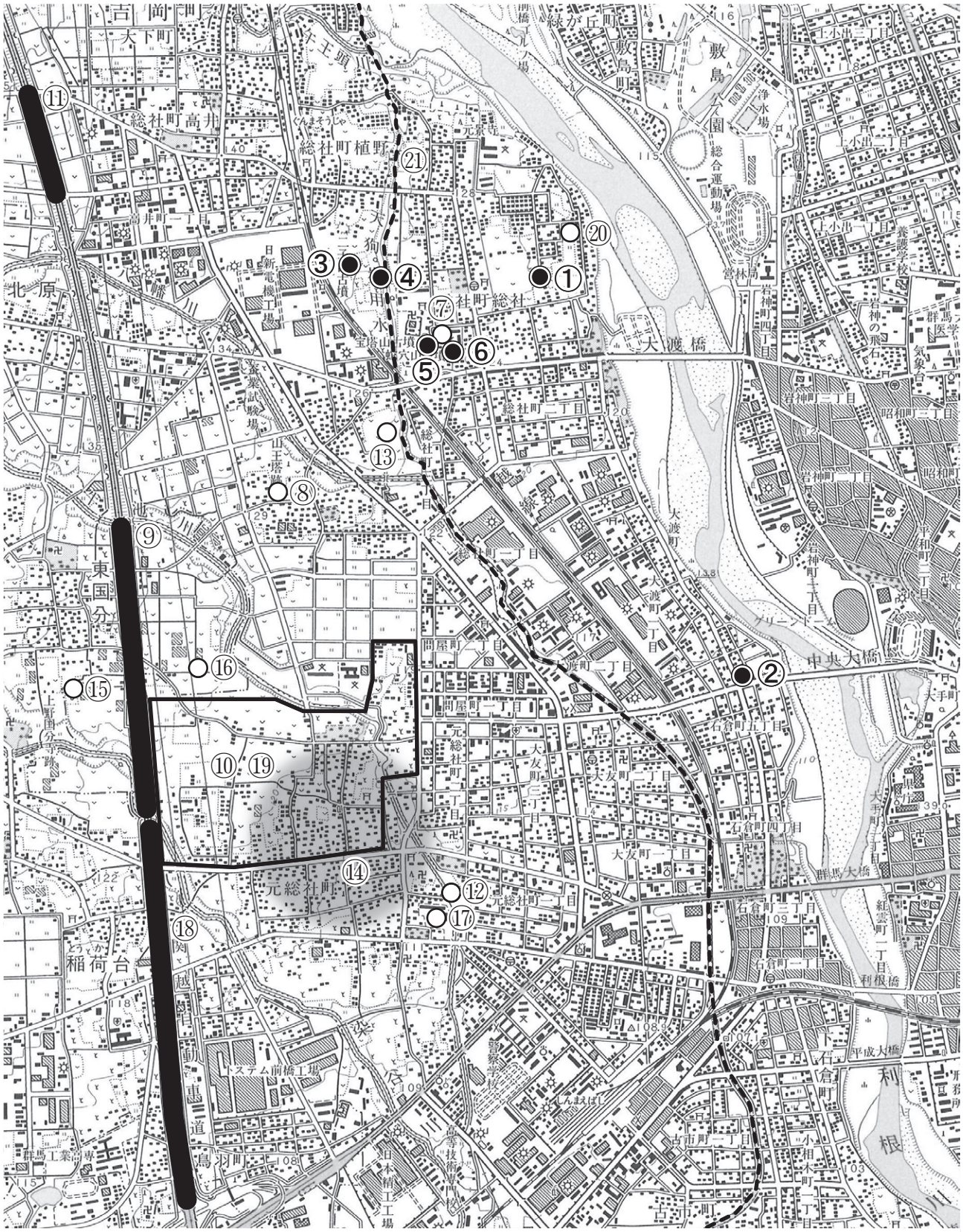
総社古墳群最後の大型墳は宝塔山古墳に隣接する蛇穴山古墳（⑥）である。墳丘規模は一辺約40mとやや縮小するものの、周堀外側に葺石を施した中堤を巡らせ、その外側に外周溝を巡らせており、兆域としては一辺が80mを超える。南に開口した石室も、玄室奥壁、側壁、天井石を巨大な一石で石材を巧みに組み合わせ、石室壁面には宝塔山古墳同様漆喰を塗布する。昭和49年に国史跡に指定されている。

これらの方墳は、大型な墳丘規模および形状、家形石棺の安置、漆喰の塗布など、県内の該期古墳とは一線を画したつくりを持っている。また、石材の加工技術としては古墳群南西に所在する山王廃寺との共通性が指摘されており、山王廃寺の創建年代と併せ、被葬者と中央政権との強いつながりが想定されている（尾崎1966、右島1985、津金沢1983）。

宝塔山古墳、蛇穴山古墳と併行して造営事業が進められた山王廃寺（⑧）は、古墳群の南西約１㎞の至近に位置している。山王廃寺は、大正年間に塔心礎が発見され、周囲に石製鴟尾や根巻石などが存在するなど、昭和３年には国史跡に指定されている。昭和～平成の調査から、７世紀後半創建と推定され、一辺80mほどの回廊に囲まれた法起寺式の伽藍配置を持つ白鳳寺院であったことが明らかになっている。また、昭和の調査で出土した「放光寺銘瓦」から、山上碑や上野国交替実録帳に見られる「放光寺」と推定される。平成９～11年の調査では塑像が大量に出土するなど、その歴史的価値が広く認識され、平成19年には名称変更および指定範囲の拡大が行われている。

集落遺跡や生産遺跡としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域や元総社明神遺跡、元総社蒼海遺跡群、大屋敷遺跡（⑬）などで集落や水田跡が検出されている。

奈良・平安時代：古墳時代終末期の盛況から引き続き、当地域は古代上野国の中心地として繁栄した。上野国府（⑭）や上野国分僧寺（⑮）、国分尼寺（⑯）が置かれ、政治や経済、文化の中心地として賑わった。国分僧寺は昭和15年に国史跡に指定されて、群馬県教育委員会による昭和および平成の調査から、その威容が明らかになっている。また、国分尼寺は近年高崎市教育委員会による発掘調査が行われ、その規模や伽藍配置が判明しつつある。上野国府跡は、前橋市教育委員会による調査が行われており、元総社小学校校庭遺跡（⑰）や元総社蒼海遺跡群で、大型掘立柱



①遠見山古墳　②王山古墳　③総社二子山古墳　④愛宕山古墳　⑤宝塔山古墳　⑥蛇穴山古墳
⑦総社町屋敷南遺跡　⑧山王廃寺　⑨上野国分僧寺・尼寺中間地域　⑩元総社蒼海遺跡群
⑪下東西遺跡　⑫元総社明神遺跡　⑬大屋敷遺跡　⑭上野国府　⑮上野国分僧寺　⑯上野国分尼寺
⑰元総社小学校校庭遺跡　⑱鳥羽遺跡　⑲蒼海城　⑳総社城　㉑天狗岩堰用水

第２図　周辺の遺跡

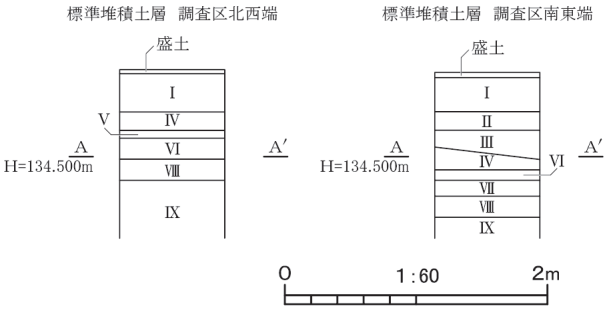
建物跡や倉庫跡の検出などが相次いでおり、近く様相が明らかになると考えられる。集落跡は元総社蒼海遺跡群や上野国分僧寺・尼寺中間地域、鳥羽遺跡（⑱）などで確認されており、多数の集落跡が調査されている。

中世：永享元年（1429）に、上野国守護代の長尾氏が上野国府跡に築いた蒼海城（⑲）は、県内でも最古級の城郭跡と位置づけられ、堀跡などが確認されている。

近世：近世初頭に入封されて総社藩を治めた秋元長朝は、総社城（⑳）を築くとともに城下町の整備に着手した。また、地域の生産力向上を目的として、現利根川から直接取水した天狗岩堰用水（㉑）を開削した。この用水路は、伊奈忠次による「代官堀」へと引き継がれ、五千石用水とともに周辺地域を潤すことに成功し、現在までその恩恵を受けている。なお、遠見山古墳は、総社城の物見台として利用されたことからその名が付けられたとされ、総社城絵図（前橋市立図書館所蔵）にも描かれている。

第４節　基本層序

総社古墳群は南北約４㎞と幅広く、古墳が所在する地域毎に基本層序の相違が見られることが想定される。また、遠見山古墳の調査では、調査個所が周堀内や墳丘上であり、周辺も土層上面が削平され、土層の遺存状態や遺跡保護の観点から基本層序の確認には至らなかった。このため、基本層序として、総社古墳群北方約１㎞ほどの位置に所在する総社向畑遺跡（前橋市教育委員会2015）の層序を提示することとした。



標準堆積土層説明

Ⅰ	灰黄褐色土	10YR6/2	白色軽石φ２～10㎜多量、橙色軽石φ２㎜少量、焼土粒微量含む。しまりあり、粘性弱い。
Ⅱ	黒褐色土	10YR3/1	黄褐色φ２㎜多量、焼土粒・灰黄色軽石φ２㎜少量含む。しまりあり、粘性やや弱い。
Ⅲ	黒褐色土	10YR3/2	白色軽石φ２㎜多量、橙色軽石２～５㎜・Ⅳ層ブロックφ２～20㎜少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
Ⅳ	黄褐色土	10YR5/6	白色軽石φ２～５㎜中量、橙色軽石・黄色軽石２㎜・Ⅵ層ブロックφ２～30㎜少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
Ⅴ	にぶい黄褐色土	10YR5/4	Ⅳ層とⅥ層との漸移層。Ⅵ層ブロックφ２～20㎜中量含む。しまりあり、粘性ややあり。
Ⅵ	黒褐色土	10YR3/1	白色軽石φ２㎜中量、橙色軽石φ２㎜少量含む。しまりあり、粘性強い。
Ⅶ	暗褐色土	10YR3/3	鉄斑中量含む。しまり・粘性強い。
Ⅷ	にぶい黄橙色土	10YR6/3	灰白色シルトブロック・褐灰色粘質土ブロックφ２～20㎜中量、灰白色軽石φ２㎜少量含む。しまり・粘性あり。
Ⅸ	浅黄橙色砂	10YR8/4	細砂・シルトを主体とし、灰白色軽石・黄橙色軽石φ２～５㎜中量含む。しまりあり、粘性なし。ラミナ状の堆積層。

第３図　周辺の代表的な層序

第２章　遠見山古墳の調査

第１節　調査の概要

遠見山古墳は、現況の墳丘長約70mの前方後円墳で、総社古墳群の端緒を知るうえで欠かすことのできない古墳であり、平成22年には本市の史跡に指定されている。本古墳は、平成３年（１次)、平成６年（２次)、今回（３次）と複数回の調査が行われている。

平成３年度

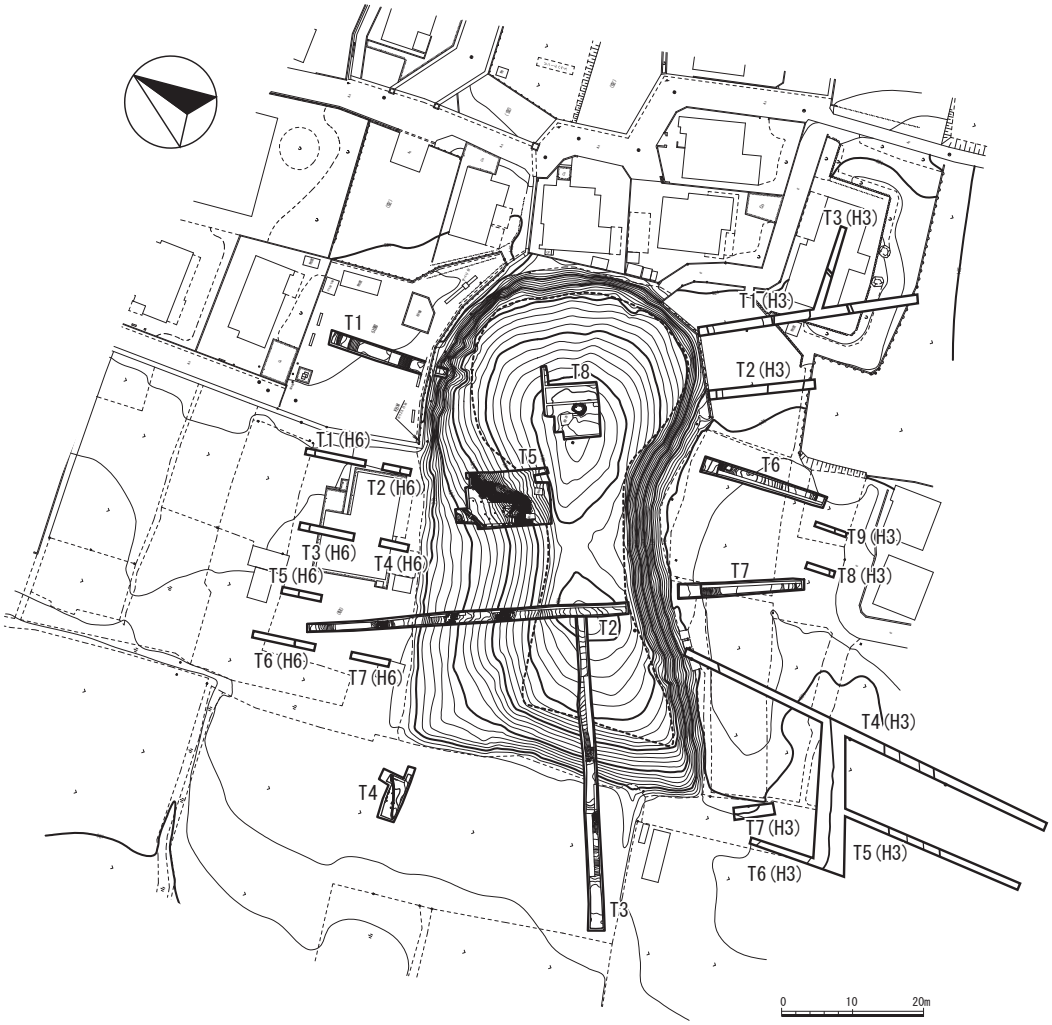
民間の宅地開発に伴って行われた確認調査で、墳丘南側にて城川Ⅰ・Ⅱ遺跡として調査されている（前橋市教委1992)。後円部から前方部にかけての墳丘南側に９本の調査区を設定し（以下「Ｔ○（Ｈ３)」)、近世の溝２条のほか遠見山古墳の周堀や墳丘の裾が確認された。前方部南側のＴ４（Ｈ３）では、周堀の下層で Hr-FA が検出されている。

平成６年度

地区の公民館建設に伴って行われた確認調査で、前方部北側にて調査を行った。７本の調査区を設定し、本報告にてＴ１～７（Ｈ６）と呼称する。前方部北側の周堀外側立ち上がりや、基壇の立ち上がりを確認している。

平成29・30年度

平成29年度より、総社古墳群範囲内容確認調査を始め、周辺の状況から開発のおそれの大きい遠見山古墳の調査に着手した。墳丘形状や兆域の確認を目的として８本の調査区を



第４図　遠見山古墳トレンチ設定図

設定して調査を行った。第１トレンチ・第６トレンチは後円部の墳丘南北に、第２トレンチは前方部北側から墳丘にかけて、第３トレンチは前方部西側から墳丘にかけて、第７トレンチは前方部南側に設定した。また、第４トレンチは前方部北西の墳丘コーナーに、第５トレンチは墳丘の北側くびれ部に設定した。なお、第１トレンチと第６トレンチ、第２トレンチと第７トレンチは、それぞれ直線上で確認できるよう設定している。

第２節　平成29・30年度の調査

第１トレンチ

位置：後円部北側に南北方向に設定した調査区で、周堀範囲を確認することを目的とした。墳丘を挟んで南側の直線上には第６トレンチを設定している。

概要：墳丘下段から周堀外側の立ち上がりまで検出した。墳丘の基壇（墳丘第一段）の斜面は近世以降の所産とみられる溝により切られ、墳丘裾は現況地盤まで削平されている。現状での周堀の上幅は9.8m、底面幅5.1mを測る。底面はやや船底形を呈し、周堀外側は約21度の角度で段をもって立ち上がる。現況地盤からの深さは2.95mを測り、底面直上の黒色土層を挟んでHr-FAが５～10㎝ほどの厚さで堆積する。底面から90㎝ほどの位置にAs-Bが堆積し、その上面をAs-Kkが覆う。As-Bの下位には黄褐色土ブロックを多量に含む泥流層が確認されている。墳丘は厚く崩落土が覆うが、墳丘盛土の下位にはAs-C軽石を含む黒色土の地山層が確認された。

遺物出土状況：墳丘立ち上がりを切る溝から多量の円筒埴輪が出土したほか、周堀内でも墳丘に近い位置から、崩落した葺石とともに円筒埴輪が出土している。なお、周堀内で器種は不明ながら形象埴輪片が１点出土している。

第２トレンチ

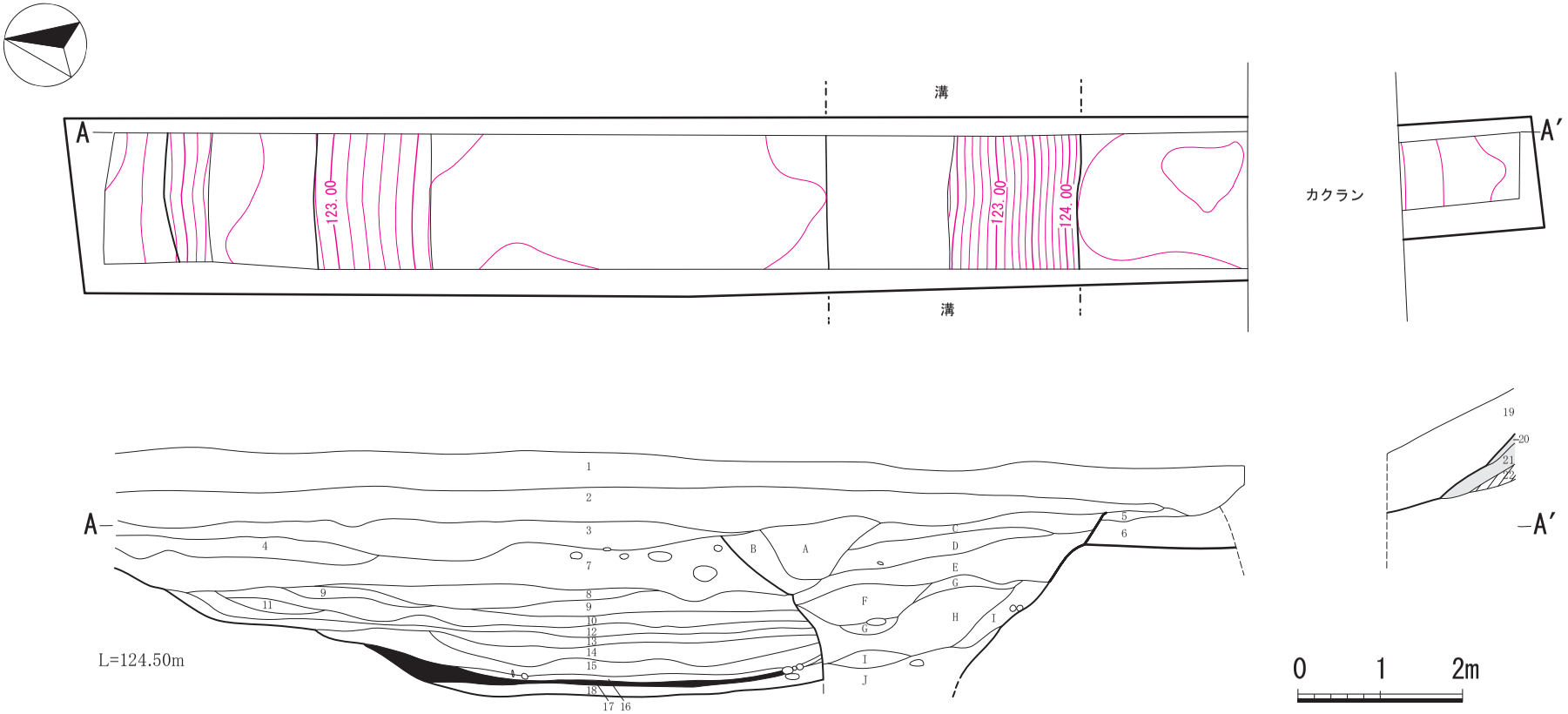
位置：前方部北側から墳丘南端にかけて南北方向に設定した調査区で、周堀範囲および墳丘形状の確認を目的とした。前方部墳頂付近で第３トレンチと接する。また、墳丘南側では直線上に第７トレンチを設定している。

周堀～基壇斜面：周堀の遺存状態は良好で、現状での周堀上端幅は約10.5m、底面幅は5.4mを測り、底面形状は船底形を呈するとみられる。現況地盤からの深さは約2.8mで、墳丘側底面から約60㎝の位置でAs-Bを検出したが、周堀中央が未調査のため、Hr-FAの確認には至らなかった。周堀外側は約21度、墳丘は約23度の角度をもって立ち上がり、他トレンチで確認された墳丘の立ち上がり角度に比べると傾斜角が緩やかである。基壇斜面で葺石（以下「第１段葺石」とする）を確認した。残存高は約80㎝で、縦位に目の通った石列は確認されず、川原石の配置もやや乱れているが、底面から40㎝ほどの高さで川原石が横位に並んでいる様子が確認され、根石と考えられる。

墳丘基壇：基壇テラス（墳丘第一段上面）は、表土・墳丘崩落土の直下で地山層が検出されており、耕作等による削平を相当に受けていると考えられる。第２トレンチで確認された基壇テラスは幅が広く、テラス中央部には低い葺石（以下「第２段葺石」とする）が施されている。このような構造は、本トレンチでのみ確認されている。

第２段葺石：基壇テラスの中央を区画しているとみられ、本トレンチのみで検出されている。葺石の高さは約50㎝と低いものの、約20度の角度をもって大小の川原石を整然と葺く。葺石中央に目の通った石列が確認される。

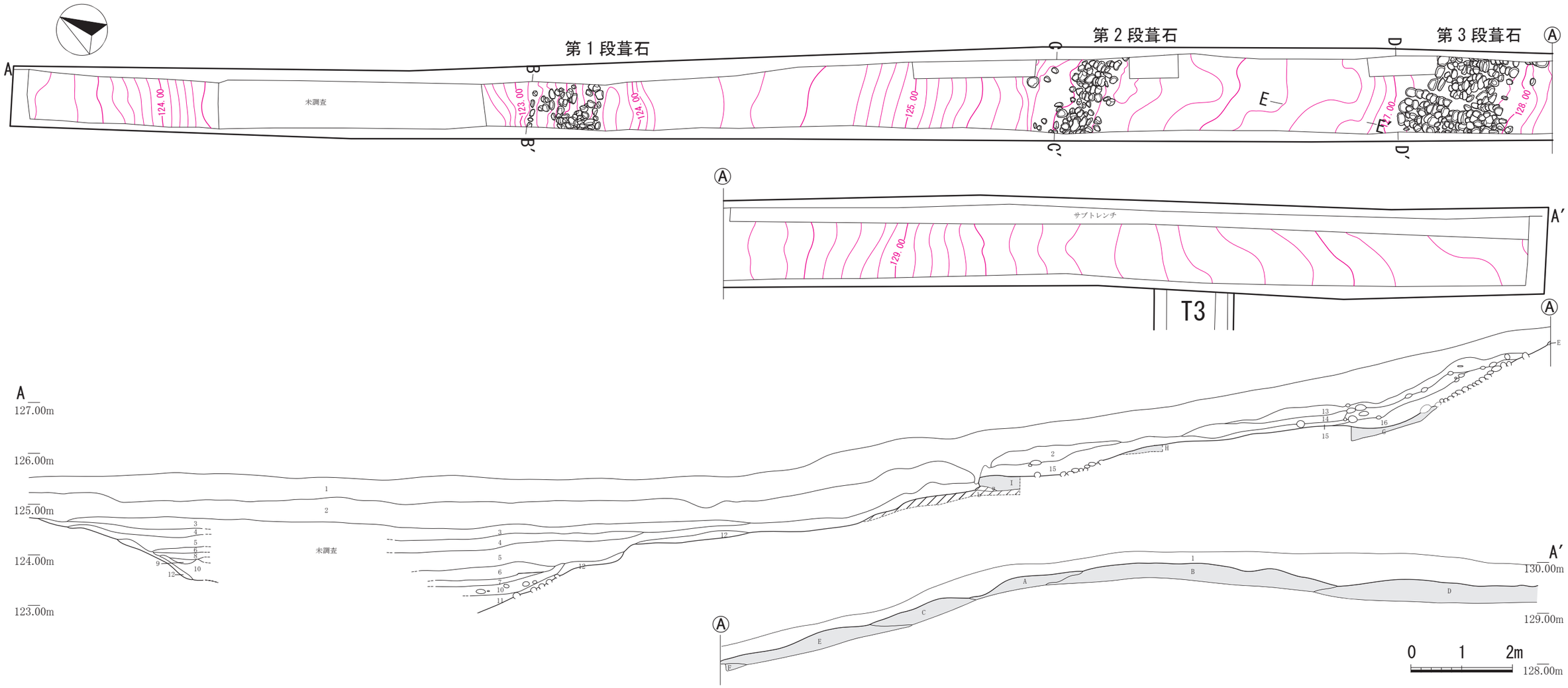
基壇テラス：上述のとおり基壇テラスは第２段葺石で区画され、第２段葺石より下位の基壇テラスは大きく削平を受けているものの、上位の基壇テラスの遺存状態は良好で、テラスの幅は約5.7mを測る。墳丘崩落土は暗褐色土を主体とし、下層に向かって黄褐色土ブロックの量を漸移的に増すものの、墳丘盛土との境界が不明瞭であったため、テラス面の認定は困難であった。このため、第２段葺石の上端から墳丘第二段の葺石（以下「第３段



T1 土層説明

		締り	粘性	
1	灰褐色土	強	弱	白色土ブロック主体。公園造成土。
2	灰褐色土	有	無	
3	灰褐色土	有	無	白色粒・赤色粒少量含む。
4	灰褐色土	強	無	白色土ブロックを微量含む。
5	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを多量に含む。
6	暗褐色土	有	有	
7	暗褐色土	有	弱	
8	暗褐色砂質土	有	弱	
9	黒褐色土	有	弱	
10	暗褐色土	有	弱	As-B 層。
11	黒褐色土	有	有	
12	暗褐色粘質土	有	有	黄褐色土ブロックを少量含む。
13	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック主体。
14	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを多量に含む。
15	灰黄色土	有	強	白色粒少量含む。
16	黒色土	有	強	黄褐色土ブロック少量含む。
17	暗褐色土	有	強	Hr-FA 層。
18	灰色土	有	強	白色粘土ブロック主体。
19	灰褐色土	有	無	礫を多量に含む。墳丘崩落土。
20	暗褐色土	有	無	墳丘盛土。
21	暗褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを多量に含む（墳丘盛土）。
22	黒褐色土	有	有	As-C 軽石を多量に含む（地山）。
A	灰褐色土	強	有	
B	暗褐色土	強	有	白色粘土ブロック主体。
C	暗褐色土	有	無	白色粒を含む。
D	灰褐色土	有	無	白色粒を含む。
E	暗褐色土	有	有	
F	灰褐色土	有	有	灰白色粘土ブロックを含む。
G	灰褐色砂質土	有	無	灰白色粘土ブロックを含む。
H	暗褐色土	有	有	
I	暗褐色土	有	有	
J	灰褐色砂質土	有	有	

第５図　第１トレンチ平面図・断面図



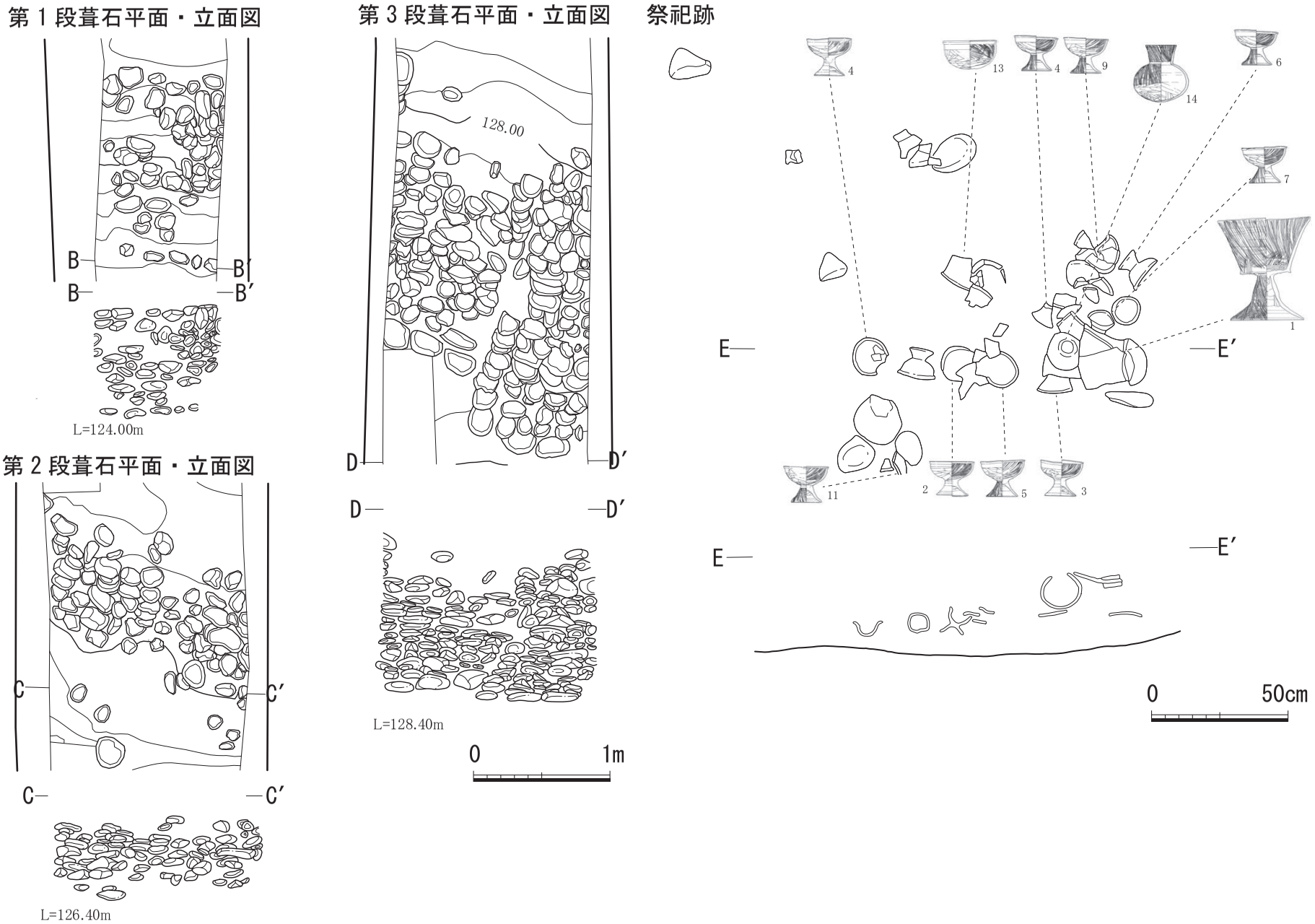
T2　土層説明

		締り	粘性	
1	灰褐色土	無	無	礫を多量に含む。表土。
2	灰褐色土	有	無	白色粒・黄褐色土ブロック少量含む。
3	灰褐色土	有	無	白色粒・赤色粒少量含む。
4	灰褐色土	有	無	黄褐色土ブロック多量含む。
5	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック少量含む。
6	暗褐色土	有	無	As-B 含む。
7	暗褐色砂質土	有	無	As-B 層。
8	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック少量含む。
9	黒色土	有	有	
10	褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・礫含む。
11	褐色土	有	有	黄褐色土ブロック多量含む。
12	褐色土	有	有	黄褐色土ブロック主体。
13	黒色土	有	無	白色粒少量含む。
14	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック少量含む。
15	暗褐色土	有	有	白色粒少量含む。
16	褐色土	有	有	黄褐色土ブロック少量含む。

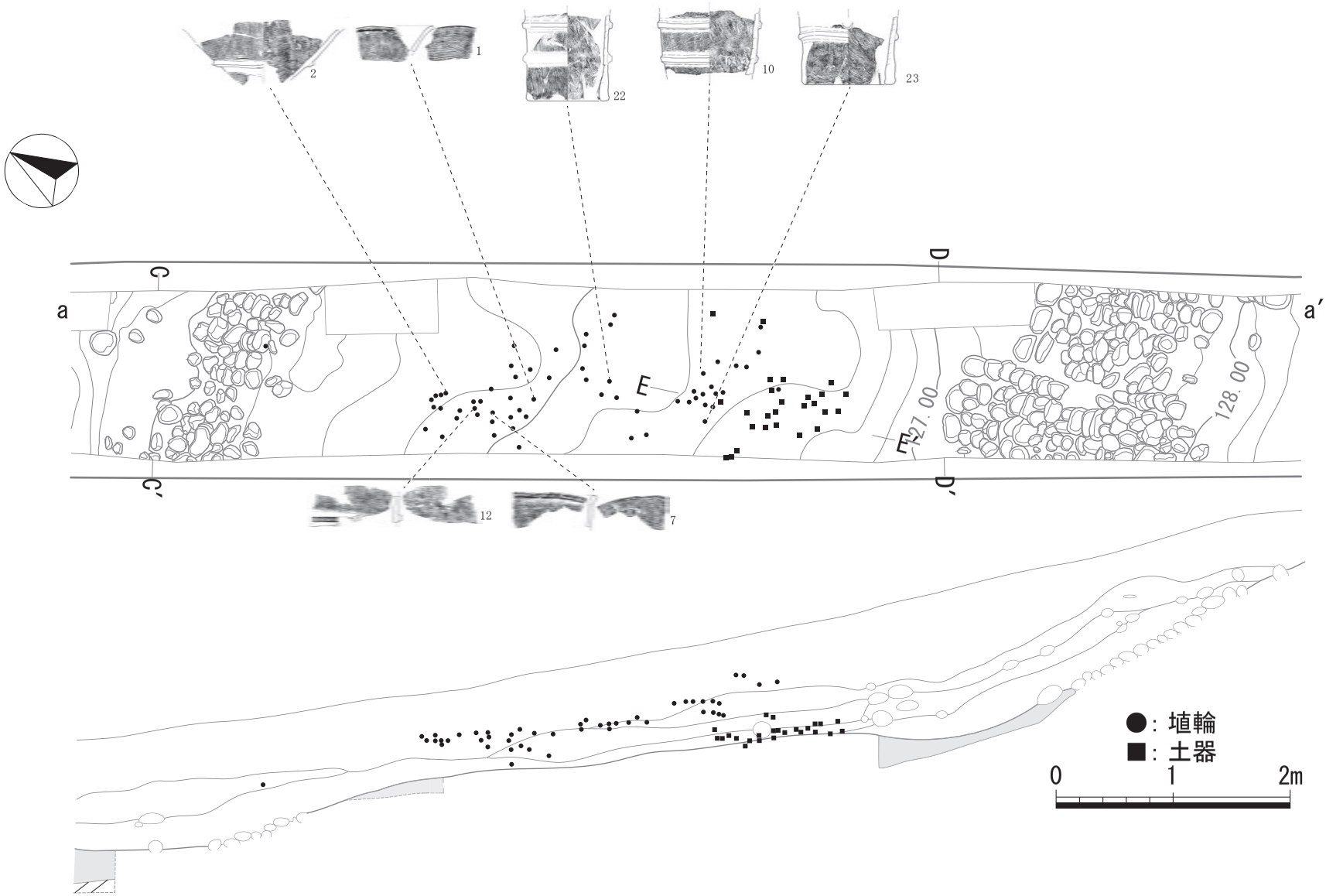
墳丘盛土・地山

		締り	粘性	
A	灰白色土	有	有	灰白色土ブロック多量含む。
B	灰白色土	有	有	灰白色土ブロック主体。
C	暗褐色土	有	無	灰白色土ブロック・黄褐色土ブロック少量含む。
D	灰褐色砂質土	有	無	砂礫主体。
E	暗褐色砂質土	有	無	灰白色土ブロック少量含む。
F	黒褐色土	有	有	As-C 少量含む。
G	褐色土	有	有	黄褐色土ブロック多量含む。
H	黒色土	有	有	As-C 多量含む。
I	褐色土	有	有	黄褐色土ブロック少量含む。
a	黒色土	有	有	As-C 多量含む（地山）。
b	褐色土	有	有	漸移層（地山）。

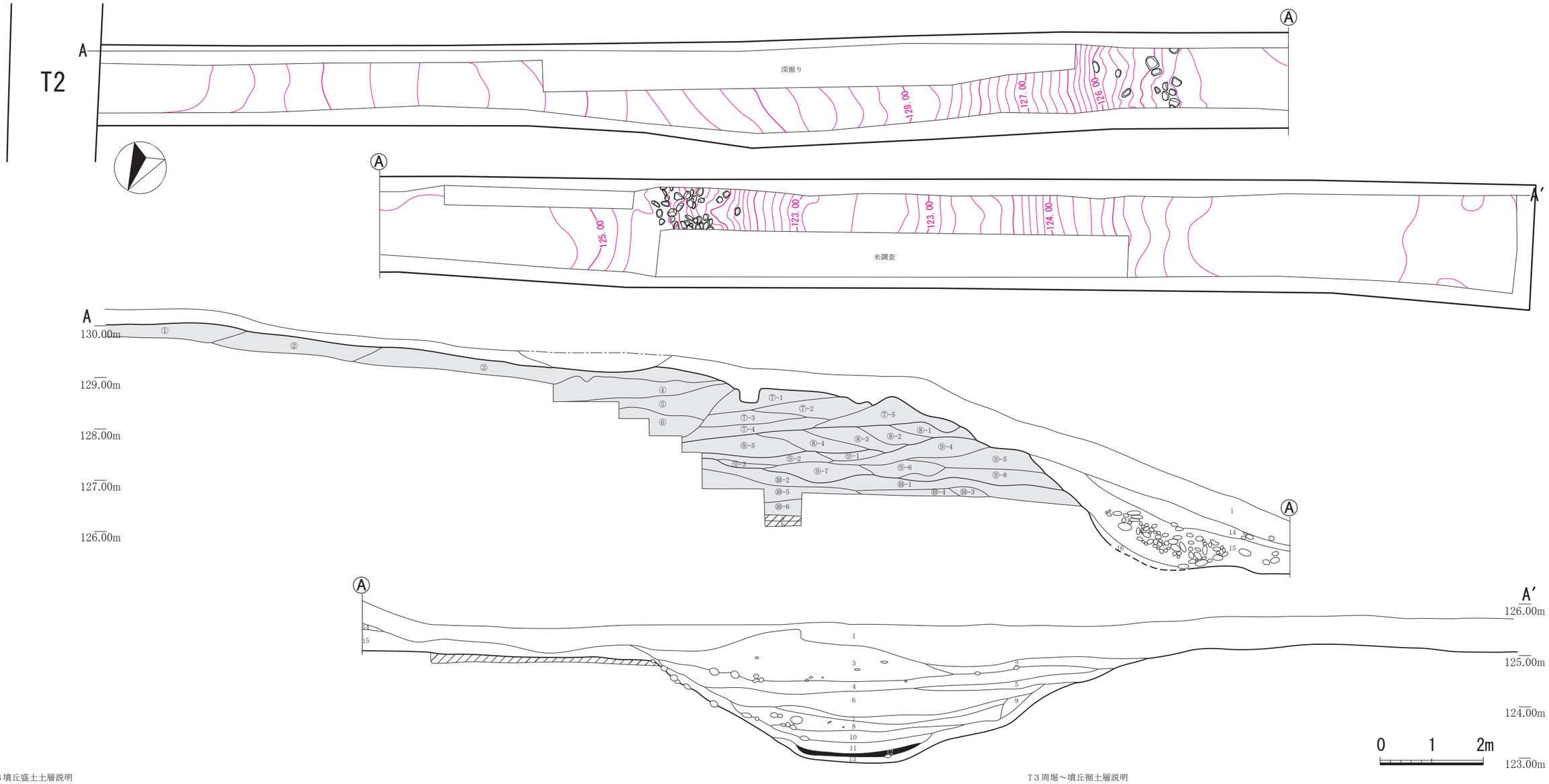
第６図　第２トレンチ平面図・断面図



第７図　第２トレンチ葺石・祭祀跡



第８図　第２トレンチ遺物出土状況図



T3 墳丘盛土土層説明

		締り	粘性	
1	灰褐色土	無	無	表土
①	灰色粘質土	有	有	灰色粘土層
②	灰色砂質土	無	無	灰色粘土ブロック少量含む。
③	灰色砂質土	無	無	黄褐色土ブロック少量含む。
④	黄褐色土	無	無	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、水平に層状を成す。
⑤	黄褐色砂質土	無	無	黄褐色土ブロックを多量、黒褐色土ブロックを少量含み、水平に層状を成す。
⑥	黄褐色砂質土	無	無	黄褐色土ブロックを多量に含み、水平に層状を成す。
⑦-1	黄褐色土	有	無	黄褐色土ブロック主体、黒褐色土ブロックを少量含み、水平に層状を成す。
⑦-2	黄褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック主体。黒褐色土ブロックを含み、水平に層状を成す。
⑦-3	黄褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、左下がりに層状を成す。
⑦-4	黄褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、左下がりに層状を成す。
⑦-5	黄褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、左下がりに層状を成す。
⑧-1	暗褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロックを少量、黒褐色土ブロックを多量に含む。
⑧-2	暗褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも少量に含み、右下がりの層状を成す。
⑧-3	暗褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも少量に含み、右下がりの層状を成す。
⑧-4	暗褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロックを少量、黒褐色土ブロックをやや多量に含み、右下がりの層状を成す。
⑧-5	暗褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも少量含み、水平に層状を成す。
⑨-1	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも微量含み、左下がりに層状を成す。
⑨-2	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも少量含み、左下がりに層状を成す。
⑨-3	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを多量、黒褐色土ブロックを微量含み、左下がりに層状を成す。
⑨-4	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、左下がりに層状を成す。
⑨-5	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも少量含み、左下がりに層状を成す。
⑨-6	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、水平に層状を成す。
⑨-7	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも少量含む。
⑨-8	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも少量含み、水平に層状を成す。
⑩-1	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、右下がりに層状を成す。
⑩-2	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを多量に含み、右下がりに層状を成す。
⑩-3	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを多量に含む。
⑩-4	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含み、右下がりに層状を成す。
⑩-5	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを多量に含む。
⑩-6	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックとも多量に含む。
a	黄褐色土	有	弱	総社砂層（漸移層相当。地山）。
b	黄褐色土	有	有	総社砂層（ハードローム相当。地山）。

T3 周堀～墳丘裾土層説明

		締り	粘性	
1	灰褐色土	有	無	白色粒を少量、黄褐色土を多量に含む。表土。
2	灰褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを多量に含む。
3	黄褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを主体とし、礫を多量に含む。
4	灰褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを少量含む。
5	黄褐色土	有	無	黄褐色土主体。
6	暗褐色砂質土	有	無	As-B 含む。
7	暗褐色砂質土	有	無	As-B 層。
8	黒褐色土	有	無	白色粒を少量含む。
9	暗褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを少量含む。
10	暗褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを多量に含む。
11	暗褐色土	有	無	白色粒・黄褐色土ブロックを少量含む。
12	暗褐色土	有	無	Hr-FA 層。
13	黒褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを少量含む。
14	灰褐色土	有	無	礫を含む。
15	灰褐色土	有	無	礫を多量に含む。
16	灰褐色土	有	無	

第９図　第３トレンチ平面図・断面図

葺石」とする）の根石を結んだラインで、崩落した葺石や埴輪などの遺物が出土せず、黄褐色土ブロックを多量に混じえる面をテラス面と認定した。ただ、第３段葺石の根石レベルに食い違いが生じており、第３段葺石付近では本来のテラス面よりも掘り下げている可能性がある。テラス面は平坦ではなく、やや北に向かって傾斜していることから、墳丘北側が若干沈降していると考えられる。

埴輪列：埴輪列は確認されなかったものの、第２段葺石の上端から約２ｍほどの位置でややまとまって埴輪が出土していることから、葺石の上位に埴輪列を樹立していた可能性がある。

祭祀跡：第３段葺石前面のテラス部にて径1.5mほどの範囲から土器がまとまって出土した。高坏のほか大型高坏、坏、直口壷があり、完形個体の数は14点に上る。いずれもほぼ同一レベルで出土しており、大型高坏の脚部は正位で出土している。また、近接した範囲内での接合関係が認められることから、祭祀行為に伴って一括して置かれたものと考えられる。なお、周囲の土を採集して水洗したものの玉類等は出土しなかった。

第３段葺石：基壇テラスの上端を区画する。約28度の角度をもって立ち上がり、高さ110㎝ほど遺存する。葺石中央に目の通った石列があり、石列東側は大小の川原石をやや乱雑に積み上げるのに対し、石列西側では大きさのそろった川原石を整然と積み上げるなど、施工者の個性を反映していると考えられる。目の通った石列は１条のみのため、施工単位に係る石列の間隔は不明である。また、上述のとおり根石レベルも石列を境に食い違いが見られ石列西側のほうが低い。第５トレンチの状況を考えると、葺石施工後に石列東側の根石レベルに合わせて一部葺石を埋め戻してテラス面を整形している可能性がある。

墳頂部：削平を受けているものの、墳頂部周辺では灰白色粘土ブロックを多量に含んだ墳丘盛土が確認され、第３トレンチ墳頂部まで一部連続する。

遺物出土状況：周堀からは崩落葺石とともに円筒埴輪片が多く出土している。また、基壇テラス南側では、全面を覆うように埴輪片が出土している。一方、基壇立ち上がりから第２段葺石までは遺物の出土は少量で、第３段葺石上端より上位の墳頂部では遺物は全く出土しなかった。なお、本トレンチでも形象埴輪は出土していない。

第３トレンチ

位置：前方部西側から墳頂部にかけて東西方向に設定した調査区で、周堀範囲や墳丘形状、中堤や外堀といった周堀外部施設の確認を目的とした。前方部墳頂にて第２トレンチと接する。

周堀～基壇斜面：周堀の遺存状態は良好で、基壇斜面から周堀外側の立ち上がりまで確認することができた。現状での周堀上端幅は8.9m、底面幅は約2.5mを測る。現況地盤からの深さは約2.7mで底面形状は船底形を呈する。周堀外側は約24度の角度で段をもって立ち上がる。基壇斜面は約34度の角度をもって立ち上がり、斜面には大小の川原石を乱雑に積み上げた葺石を施す。残存高は110㎝を測る。周堀覆土は、底面直上の黒褐色土層を挟んでHr-FAが10㎝ほど堆積し、底面から90㎝の高さでAs-Bが堆積する。As-B層の下位ではやはり黄褐色土ブロックを多量に含む泥流層が確認された。

周堀外部施設：中堤や外堀の検出を目的として、周堀外側までトレンチを伸ばしたものの、外部施設を確認することはできなかった。

墳丘：第２トレンチで確認された第２段及び第３段葺石に対応する葺石を検出して墳丘形状を確認するため、墳丘裾から前方部墳頂まで調査した。墳丘裾ではまとまった川原石を検出したものの、石を積み上げた様子は認められず、石の間には近世以降の陶磁器片を交えていた。そして墳丘盛土との間に間層が確認されたことから、耕作等によって崩落した葺石を墳丘裾に寄せたものと考えられる。墳丘でも第２トレンチで確認された第２段及び

第３段葺石の続きは検出されず、墳丘の断ち割りまで行ったものの確認には至らなかった。前方部西側は後世の開発により墳丘部も大きく削られ、葺石も破壊されているものと考えられる。

墳丘部の断ち割りを行ったことから、墳丘の築造状況を確認することができた。墳丘盛土には後世の撹乱は認められず、築造当初の盛土であると考えられる。墳丘盛土は総社砂層上面の漸移層相当の層位上面に構築されていることから、その上位に堆積していたAs-C 軽石を含む黒色土は、盛土構築前に整地のために削平されていると考えられる。盛土は前方部西側に土手状に積み上げ、その後内側（東側）に粘性の少ない砂質土を埋める２大別の築造工程が確認された。また、土手状の盛土も、積み上げる方向から３～４段ほどに分けて積み上げ、黄褐色土、黒色土、暗褐色土を互層に積み上げる様子が見られた。

墳頂部：削平を受けているものの、第２トレンチと連続する墳頂部周辺では灰白色粘土ブロックを多量に含んだ墳丘盛土が確認された。

遺物出土状況：本トレンチの埴輪類の大部分は周堀からの出土で、墳丘裾で陶磁器類とともに若干出土したものの、墳丘部では全く出土しなかった。このことも、前方部西面の墳丘部が大きく損なわれていることの傍証になろう。

第４トレンチ

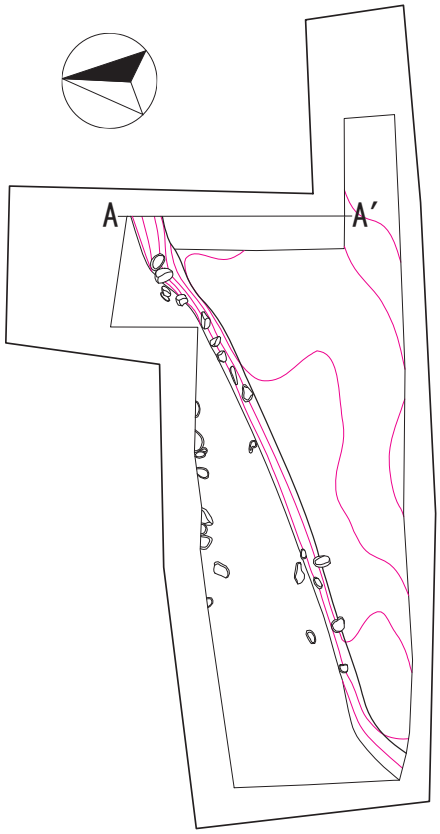
位置：前方部北西隅を確認するための調査区である。プラン確認による調査で、周堀部分は若干掘り下げるのみとした。

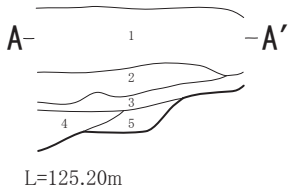
概要：東西方向に延び、トレンチ西端で南に折れる落ち込みが確認された。周堀からは崩落した葺石や埴輪が出土している。

第５トレンチ

位置：墳丘北側くびれ部に設定した調査区で、墳丘形状の確認を目的とした。

葺石：前方部～後円部にかけて葺石を検出した。前方部に施された葺石の根石レベルと、



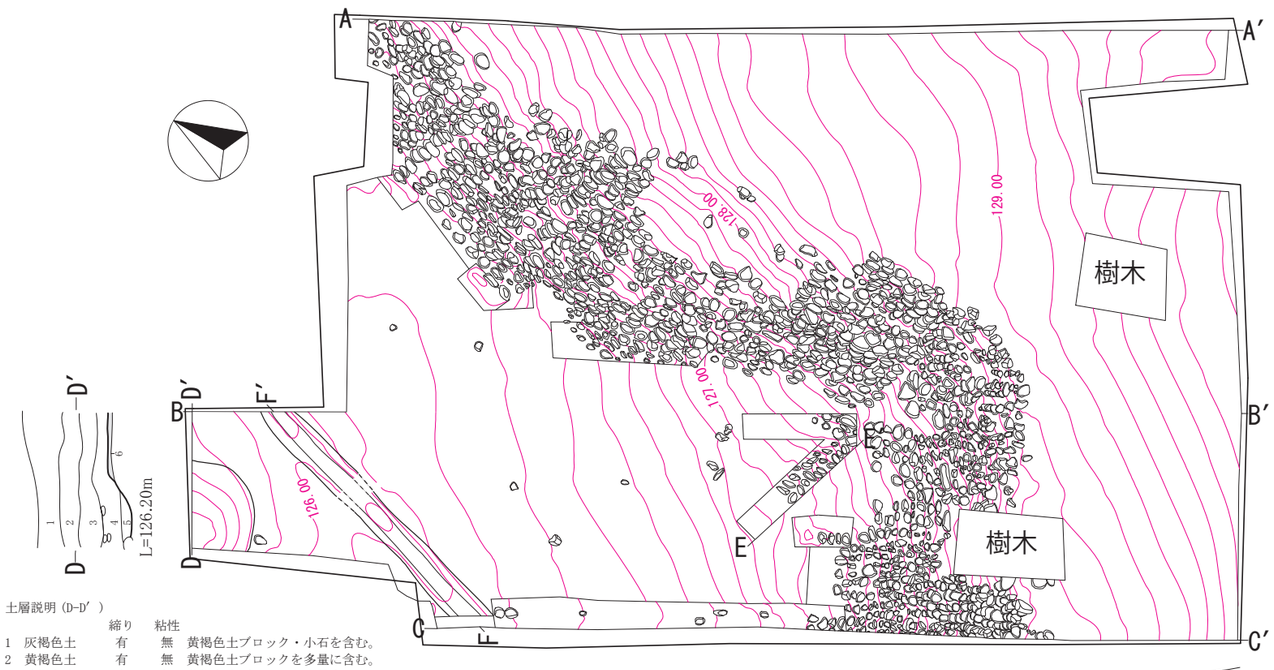


T4　土層説明

		締り	粘性	
1	灰褐色土	有	無	表土。
2	灰褐色土	有	無	黄褐色土ブロック多量に含む。
3	灰褐色土	有	有	黒色土ブロック少量含む。
4	暗褐色砂質土	有	無	As-B 含む。
5	暗褐色土	有	無	黄褐色土ブロック少量含む。

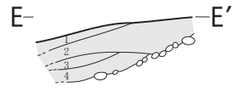
0　1　2m

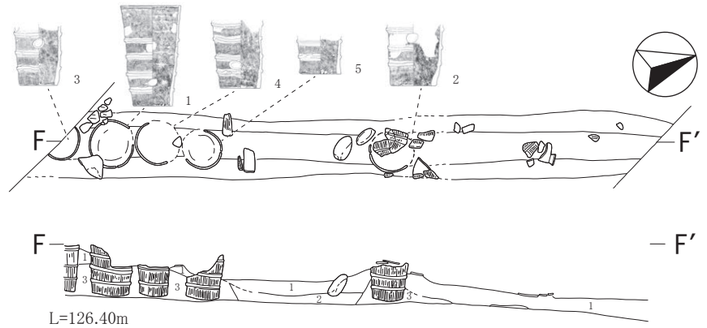
第10図　第４トレンチ平面図・断面図



土層説明（D-D′）

		締り	粘性	
1	灰褐色土	有	無	黄褐色土ブロック・小石を含む。
2	黄褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを多量に含む。
3	暗褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを少量含む。
4	暗褐色土	有	無	褐色土ブロック・黒褐色土ブロックを含む。
5	暗褐色土	弱	無	褐色土ブロック・黒褐色土ブロック黄褐色土ブロックを含む。
6	暗褐色土	弱	無	黄褐色土ブロックを多量に含む（墳丘盛土）





土層説明（E-E′）

		締り	粘性	
1	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを含む。
2	黒褐色土	有	弱	褐色土ブロック。白色軽石を含む。
3	暗褐色土	有	弱	灰褐色ブロックを多量に含む。
4	暗褐色砂層	有	無	白色軽石を多量に含む。

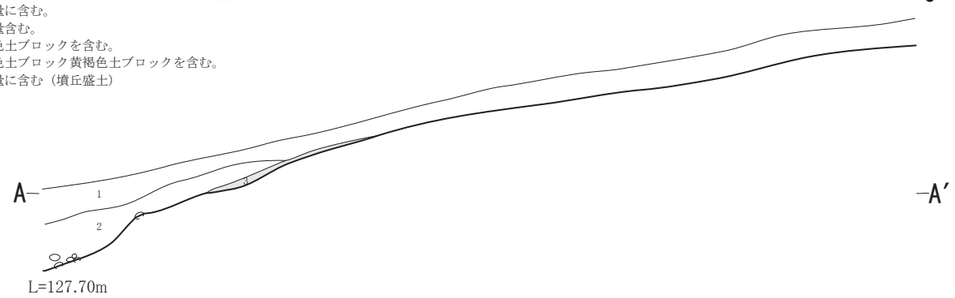
土層説明（F-F′）

		締り	粘性	
1	黒褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを多量に含む。
2	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを含む。
3	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロックを多量に含む。

0　1m

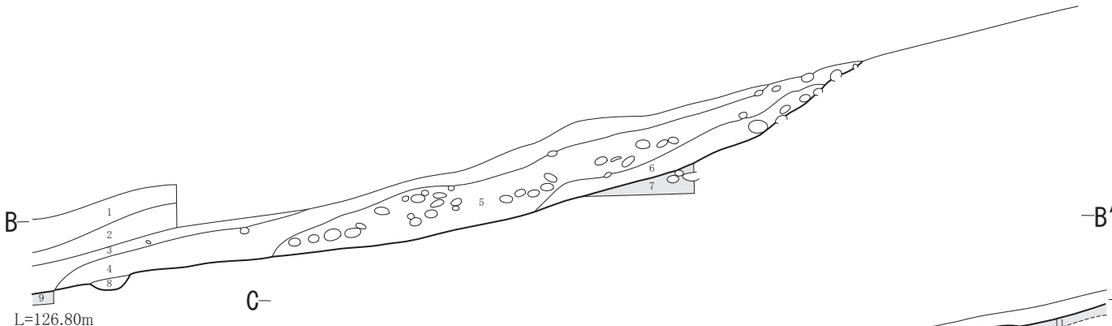
土層説明（A-A′）

		締り	粘性	
1	灰褐色土	有	無	表土。
2	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを含む。
3	暗褐色土	有	無	黄褐色土ブロック主体（墳丘盛土）



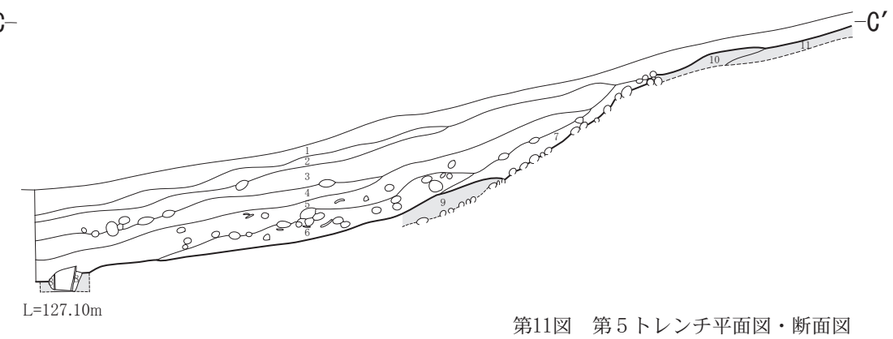
土層説明（B-B′）

		締り	粘性	
1	灰褐色土	有	弱	表土。
2	黄褐色土	有	弱	褐色土ブロック・灰色土ブロックを多量に含む。
3	黄褐色土	有	無	黄褐色土ブロック主体。
4	暗褐色土	有	弱	褐色土粒を少量含む。
5	黒褐色土	有	弱	褐色土ブロックを少量、崩落葺石・埴輪片・白色粒を多量に含む。
6	暗褐色土	有	有	褐色土粒を多量に含む。
7	褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを多量に含む（墳丘盛土）。
8	暗褐色土	有	弱	埴輪列覆土。
9	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを多量に含む（墳丘盛土）。



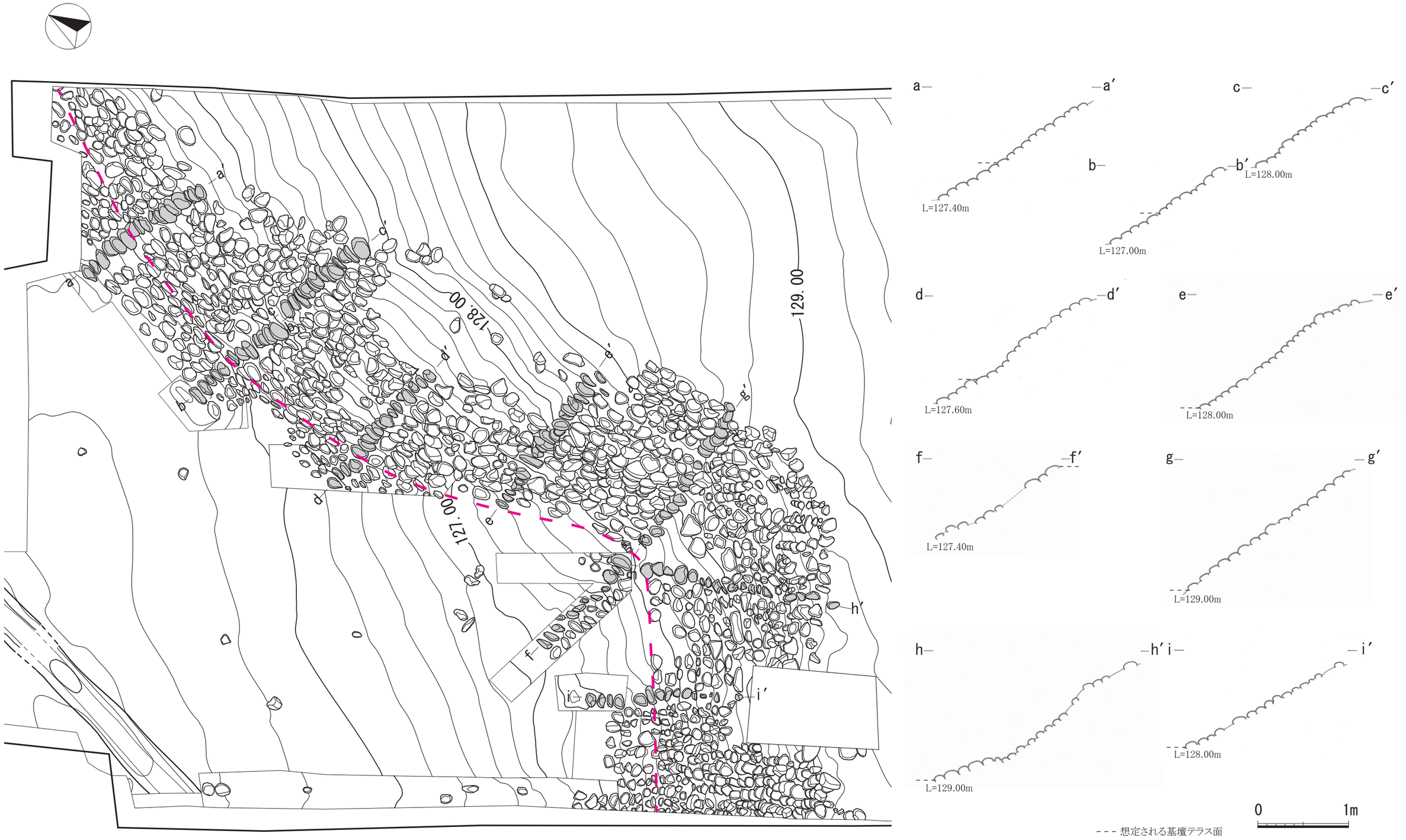
土層説明（C-C′）

		締り	粘性	
1	灰褐色土	弱	無	表土。
2	黄褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック主体。
3	暗褐色土	有	無	崩落葺石・埴輪片を含む。
4	暗褐色土	有	弱	黒褐色土ブロック・崩落葺石・埴輪片を含む。
5	黒褐色土	弱	弱	白色軽石・崩落葺石・埴輪片を含む。
6	黒褐色土	有	弱	褐色土ブロックを多量、崩落葺石・埴輪片を含む。
7	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを少量含む。
8	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを多量に含む。１０層よりやや暗い。埴輪列埋土。
9	暗褐色土	有	無	黄褐色土ブロックを多量に含む（テラスの成形土）。
10	灰色土	有	有	灰色粘土主体（墳丘盛土）。
11	暗褐色土	有	無	灰色粘土を含む（墳丘盛土）。



0　1　2m

第11図　第５トレンチ平面図・断面図



第12図　第５トレンチ葺石

第13図　第５トレンチ遺物出土状況図

第２トレンチで検出した第３段葺石の根石レベルがほぼ同一であり、連続していると考えられる。全体的に遺存状態は良好である。1.5m前後の間隔で縦位に目の通った石列が確認されており、施工単位を示すと考えられる。30～35度の角度をもって立ち上がり、この石列の間を拳大～人頭大の川原石を充填するが、前方部では全体的に小ぶりな石を用い、縦の目を強く意識して葺いている。後円部では、くびれ部付近のように大ぶりな石を用いて、横の目も意識して石を葺く場所もあれば、大小の石を用いて充填する場所もあり、単位ごとに施工者の個性が見られる。また、b-b'・c-c'間のように目の通った石列が上下で食い違う箇所も見られることから、高さ１ｍ前後の位置で上下の施工単位が設定されているものと考えられる。根石のレベルには前方部と後円部で大きく差があり、石列ｂの根石と石列ｉの根石では１ｍほど高低差がある。また、石列ｈの下層では後円部の葺石が確認されている（石列f）。古墳完成時に、くびれ部で後円部と前方部の葺石が交差している状況は想定しえないことから、後円部の葺石施工後に下部の葺石を埋め戻し、その後に、前方部葺石を施工していると考えられる。

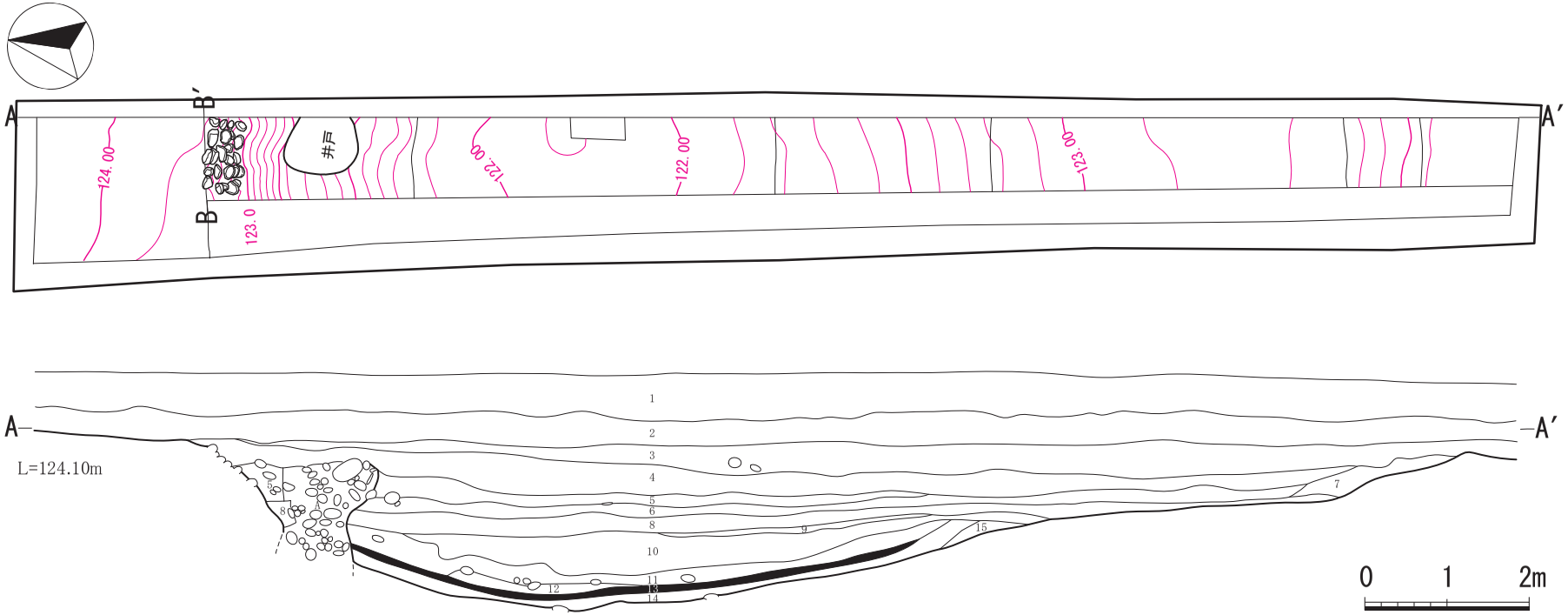
第２トレンチの第３段葺石同様、前方部側の葺石の根石は石列ｉを境に東西で50㎝ほどレベル差が認められた。ピンポールを使用したボーリング調査から、石列ｉの根石およびトレンチ西壁の葺石の根石よりも下層には葺石を施していないことを確認している。このため、古墳完成時には、前方部側の葺石は根石レベルに高低差を持った状態であったか、施工後に一部埋め戻して前方部の根石レベルをそろえていたとする２つの可能性が考えられる。トレンチ西壁の土層確認では、葺石の下位が黄褐色土ブロックを多量に含んだテラス面の整形に用いた土と同様の土層で覆われていることから、石列ｉ西側の葺石は、施工後に下部を埋め戻していたと判断した。

基壇テラス：第２トレンチで確認された第２段葺石～第３段葺石間の基壇テラスと連続しており、レベルもほぼ同一である。前方部に葺かれた葺石の根石から埴輪列までの幅は約5.0ｍを測る。本トレンチでも墳丘盛土と墳丘崩落土との境界が不明瞭で、テラス面の認定は困難であったが、前方部側の葺石の根石と埴輪列を結ぶラインで、崩落した葺石や埴輪などの遺物を含まず、黄褐色土ブロックを多量に混じえる面をテラス面と認定した。

後円部側の葺石はa-a'からb-b'付近までは、葺石施工の確認のため根石まで検出しており、ピンポールを用いたボーリング調査でも検出した根石が葺石の最下段であることを確認している。これらの葺石の根石レベルは、想定されるテラス面のレベルより低い位置にあり、テラス面の認定が上述のとおりとすると、前方部に施された葺石と同様に、いったん後円部に施した葺石の下部を、テラス面を整形するために埋め戻していると考えられる。そして、古墳完成時には、第12図中に赤い点線で示したラインがテラス面の上端であったと推定される。なお、第２トレンチ同様テラス面は平坦ではなく、やや北に向かって傾斜していることから、墳丘北側が若干沈降している可能性がある。

第２段葺石：第２トレンチで検出された第２段葺石の続きの確認に努めたものの、検出には至らなかった。トレンチ北端部で落ち込みが確認されたが、葺石を施していた様子は認められなかった。

埴輪列：本トレンチにて、遠見山古墳の調査では初となる埴輪列が検出された。南西―北東方向の布掘り状の設置溝内に円筒埴輪を埋設したもので、走行方向から後円部に沿って並べられたものと考えられる。設置溝の幅は約40㎝、深さは20㎝前後と、円筒埴輪の底部～第２段が埋まる高さで据えられており、テラス面同様黄褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土で埋め戻されていた。埴輪の多くは抜き取られていたものの、底部が残存するＡ～Ｅの５本の埋設の様子から、築造当初は密接して置かれていたと考えられる。上半部を欠



葺石平面図

葺石立面図

L=124.10m

0　1m

T6 土層説明（A-A′）

		締り	粘性	
1	灰色土	有	弱	灰白色ブロック・褐色土ブロック少量含む。表土。
2	灰褐色土	有	有	褐色土粒少量含む。畑の床土。
3	灰褐色土	有	有	褐色土ブロック･黒色土ブロック・黒褐色土ブロック主体。白色軽石多量に含む。
4	暗褐色砂質土	有	弱	As-B・白色粒多量に含む。
5	暗褐色砂質土	有	無	As-B 層。
6	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック・白色粒少量含む。
7	明褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック主体。
8	褐色土	有	弱	黄褐色土ブロックを多量、白色粒を少量含む。
9	暗褐色土	有	有	黄褐色土ブロック多量に含む。
10	褐色砂質土	有	弱	黄褐色土ブロック主体。
11	黒色粘土	有	有	白色粒多量に含む。崩落石多量含む。
12	黒色粘土	有	有	Hr-FA 少量含む。
13	黄灰色粘土	有	強	Hr-FA 層。
14	暗灰色粘土	有	強	灰白色粘土ブロック･褐色土粒多量に含む。
15	暗褐色土	有	弱	褐色土ブロック多量に含む。
井戸跡				
A	暗褐色土	有	弱	As-B・白色粒・崩落石・埴輪多量に含む。

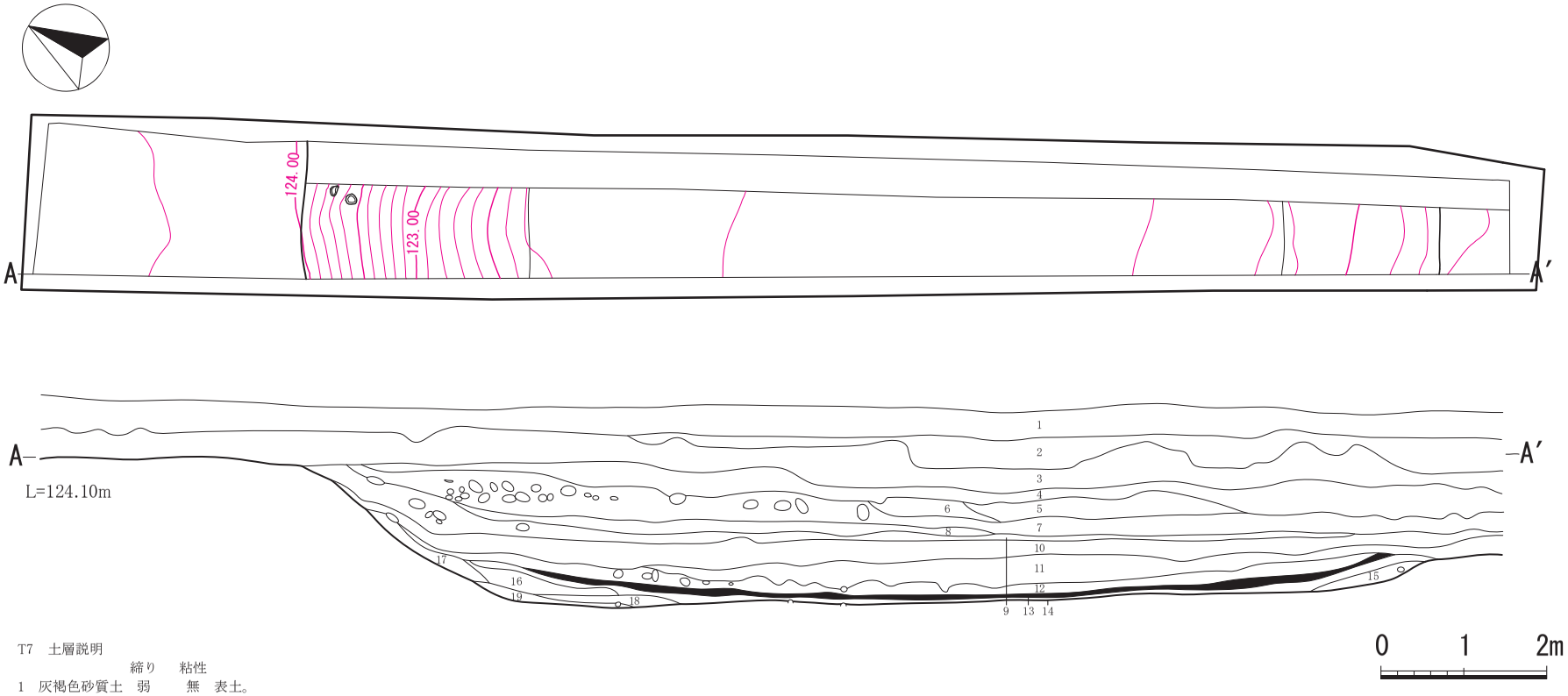
第14図　第６トレンチ平面図・断面図

失したものが多いが、Ａ～Ｄはすべて４条突帯を持つ円筒埴輪と考えられる。
遺物出土状況：葺石斜面から基壇テラスにかけて、崩落した葺石とともに普通円筒埴輪や朝顔形埴輪片が大量に出土している。また、本トレンチでも形象埴輪は全く出土していない。一方、葺石上端より上位ではほとんど遺物が出土せず、大きく削平を受けていることが推測される。

第６トレンチ
位置：後円部南側に南北方向に設定した調査区で、周堀範囲を確認することを目的とした。墳丘を挟んで北側の直線上には第１トレンチを設定している。
概要：基壇斜面から周堀外側の立ち上がりまで検出した。確認できた周堀の上幅は14.8m、底面幅は7.0mを測る。底面は船底形を呈し、周堀外側は約11度の角度をもって緩やかに立ち上がる。基壇斜面は約32度の角度をもって立ち上がり、上部には整然と施された葺石が５段ほど確認された。残存高は約40㎝である。葺石下位の斜面は、As-B を多量に含む中世の所産とみられる井戸によって切られる。現況地盤からの深さは2.8mを測り、他のトレンチ同様底面直上の黒色土層を挟んで Hr-FA が５～10㎝ほどの厚さで堆積する。底面から120㎝ほどの位置に As-B が堆積し、その下位には黄褐色土ブロックを多量に含む泥流層が検出された。
遺物出土状況：周堀内でも、墳丘に近い位置から、墳丘崩落の葺石とともに円筒埴輪が出土している。また、井戸内からも崩落葺石や埴輪が出土した。なお、周堀内から１点人物埴輪の顔部が出土している。

第７トレンチ
位置：前方部南側に南北方向に設定した調査区で、周堀範囲を確認することを目的とした。直線上の墳丘上から北に向かって第２トレンチを設定している。
概要：基壇斜面から周堀外側の立ち上がりを検出した。トレンチ南端まで、As-B 層下位の黄褐色土ブロックを多量に含む泥流層が検出され、周堀の外側の端部はトレンチ外に延びると考えられる。底面の幅は9.0mを測り、他のトレンチで確認された底面形状とは異なり、底面は平坦である。周堀外側は緩やかに立ち上がる。基壇斜面は約31度の角度をもって立ち上がり、葺石は検出されなかった。現況地盤からの深さは2.4mを測り、他のトレンチ同様底面直上の黒色土層、Hr-FA 層、黄褐色土ブロックを多量に含む泥流層、As-B 層が検出された。
遺物出土状況：周堀内でも墳丘に近い位置から、墳丘崩落の葺石とともに円筒埴輪が出土している。

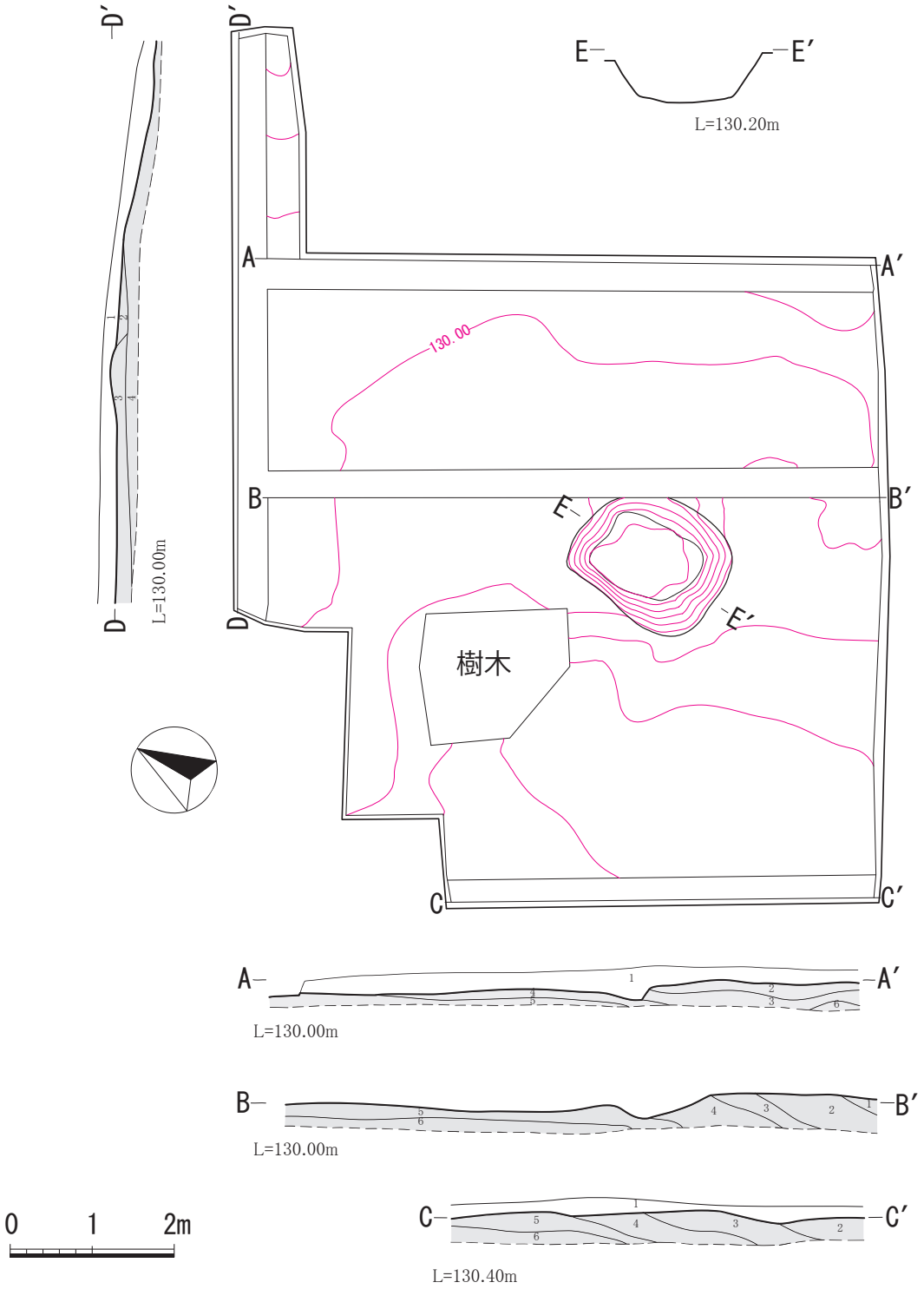
第８トレンチ
位置：調査前より後円部墳頂部にはくぼみが残り、地元で盗掘坑と伝えられていたことから、埋葬施設の位置を確認するために調査区を設定した。
概要：盗掘坑とみられたくぼみは、長軸1.8m・短軸1.5mを測る。土坑内からは近現代の陶磁器やガラス製品、トタン板片が出土し、底面が確認されたことから、近現代のゴミ穴またはイモ穴と考えられる。また、東西方向・南北方向にサブトレンチを設定して平面・断面で確認したものの、墳丘盛土を確認したのみで、主体部を構築するための掘り込みは確認できなかった。
遺物出土状況：土器や埴輪類は全く出土しなかった。



T7　土層説明

		締り	粘性	
1	灰褐色砂質土	弱	無	表土。
2	灰白色粘質土	有	有	灰白色粘土ブロック主体。
3	灰褐色土	有	弱	白色粒・褐色粒少量含む。
4	灰褐色土	有	有	灰褐色粘土ブロック多量に含む。黒色土ブロック・褐色土ブロック少量含む。
5	褐色砂質土	有	弱	褐色土ブロック主体。
6	灰褐色砂質土	有	弱	褐色土ブロック少量含む。
7	暗褐色砂質土	有	弱	As-B 多量に含む。崩落葺石多量に含む。
8	暗褐色砂質土	有	弱	As-B 層。
9	暗褐色土	有	有	白色粒多量に含む。崩落葺石・埴輪片多量に含む。
10	褐色砂質土	有	弱	黄褐色土ブロック多量に含む。白色粒少量含む。
11	褐色砂質土	有	弱	黄褐色土ブロック主体。
12	黒色粘土	有	強	白色粒少量含む。
13	黄灰色粘土	有	有	Hr-FA 層。
14	黒色粘土	有	強	
15	褐色砂質土	有	弱	褐色土ブロック多量に含む。
16	暗灰色粘土	有	強	灰白色粘土ブロック・褐色土ブロック多量に含む。礫少量含む。
17	暗褐色砂質土	有	弱	褐色土ブロック・砂粒・小礫主体。
18	暗灰色粘土	有	強	
19	黒褐色土	有	有	灰白色粘土ブロック・褐色土ブロック多量に含む。

第15図　第７トレンチ平面図・断面図



土層説明（A-A′）

		締り	粘性	
1	灰褐色土	弱	無	表土。
2	暗褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック多量に含む。
3	黒褐色土	有	有	黄褐色土ブロック含む。
4	黒褐色土	有	有	As-C 軽石多量に含む。
5	黄褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック主体。
6	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック多量に含む。

土層説明（B-B′）

		締り	粘性	
1	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック多量に含む。
2	黒褐色土	有	有	As-C 軽石多量に含む。褐色土ブロック含む。
3	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック含む。
4	暗褐色土	有	有	褐色土ブロック・黒色土ブロック含む。
5	黒褐色土	有	弱	As-C 軽石多量に含む。
6	黄褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック主体。

土層説明（C-C′）

		締り	粘性	
1	灰褐色土	無	無	表土。
2	黒褐色粘質土	有	強	褐色土ブロック多量に含む。
3	暗褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック・黒色土ブロック多量に含む。
4	褐色粘土	有	強	褐色土ブロック主体。
5	黄褐色土	弱	弱	黄褐色土ブロック主体。
6	黒褐色土	有	弱	黄褐色土ブロック含む。As-C 軽石多量に含む。

土層説明（D-D′）

		締り	粘性	
1	灰褐色土	無	無	表土。
2	黄褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック主体。
3	黒褐色土	有	有	As-C 軽石多量に含む。
4	黄褐色砂質土	有	無	黄褐色土ブロック主体。

第16図　第８トレンチ平面図・断面図

第３節　平成３年度の調査

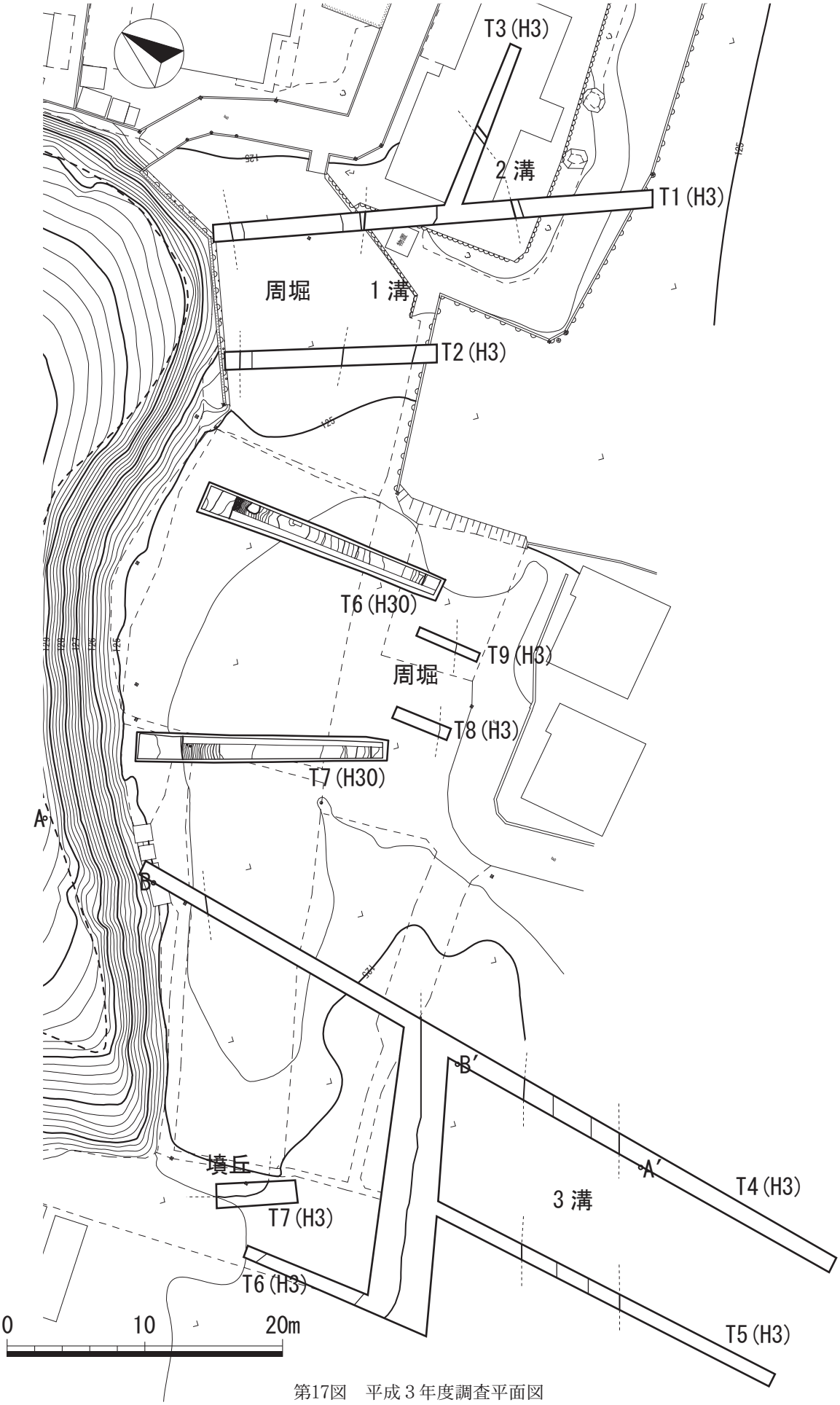
墳丘南側に９本の調査区を設定して調査を行った。Ｔ１（Ｈ３）・Ｔ２（Ｈ３）にかけて、後円部南側の周堀のほか、近世以降の所産とみられる東西方向の溝を１条（本報告にて「第１号溝」とする。）検出した。また、Ｔ１（Ｈ３）南側からＴ３（Ｈ３）にかけてAs-Bを含む東西方向の溝１条（本報告にて「第２号溝」とする。）を確認している。

Ｔ４（Ｈ３）およびＴ６（Ｈ３）では前方部南側の周堀が確認でき、断面観察の結果Hr-FAが周堀の下層に堆積している状況が認められ、両トレンチをつなぐ東西のトレンチでは周堀の外側立ち上りが検出された。なお、基壇斜面では葺石は検出されていない。Ｔ４（Ｈ３）・Ｔ５（Ｈ３）では、周堀の南側で周堀と同一方向の東西方向の溝（本報告にて「第３号溝」とする。）が検出され、溝の下部にHr-FAが堆積していたとする観察所見が得られている。Ｔ７（Ｈ３）では墳丘南西コーナーが確認され、Ｔ８（Ｈ３）・Ｔ９（Ｈ３）では周堀の外側立ち上がりが検出されている。なお、Ｔ４（Ｈ３）およびＴ５（Ｈ３）南側は大規模な削平を受けていたことが確認されている。

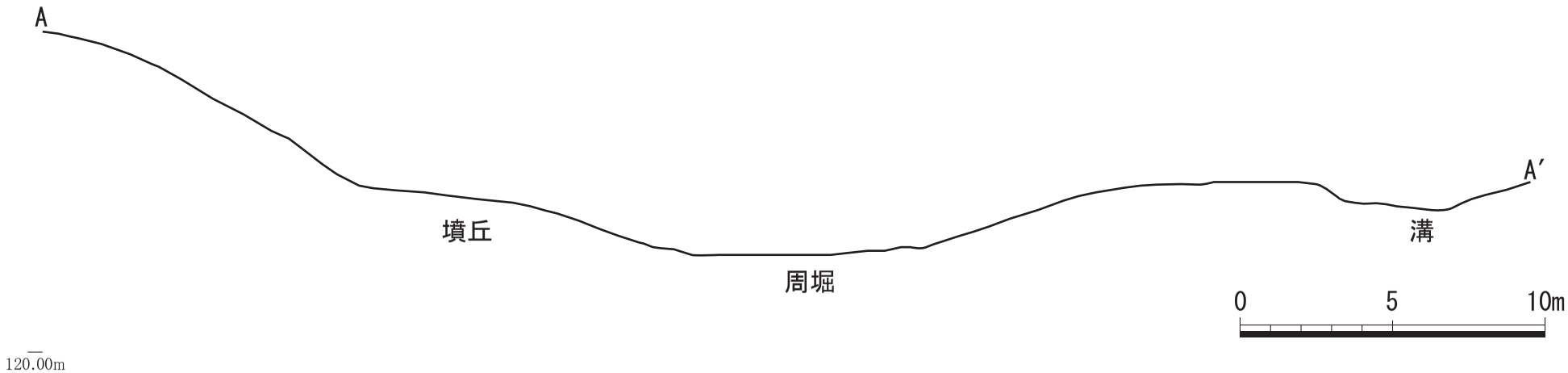
出土した埴輪はすべて円筒埴輪であり、形象埴輪は含まれていない。赤色塗彩を持つものも多く、焼成は良好である。突帯の断面形状は台形を呈するものが多く、方形を呈するものも存在する。透かしの形状は円形が主体である。

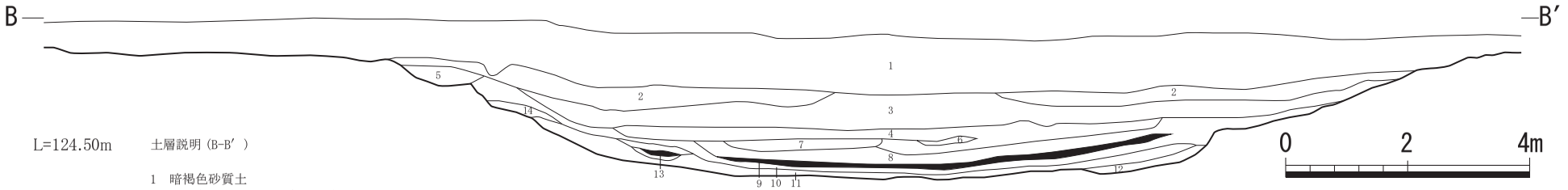
第４節　平成６年度の調査

くびれ部付近の墳丘北側に７本の調査区を設定して調査を行った。Ｔ１（Ｈ６）・Ｔ２（Ｈ６）では、周堀外側立ち上がりおよび墳丘基壇立ち上がりを検出した。Ｔ３（Ｈ６）では周堀外側立ち上がりを検出し、断面観察の結果底面から30㎝ほどの位置でAs-Bが堆積していた。Ｔ５・６（Ｈ６）でも周堀外側立ち上がりが確認されている。また、Ｔ４・７（Ｈ６）では、周堀覆土のみの確認で、基壇の立ち上がりは検出できなかった。



第17図　平成３年度調査平面図

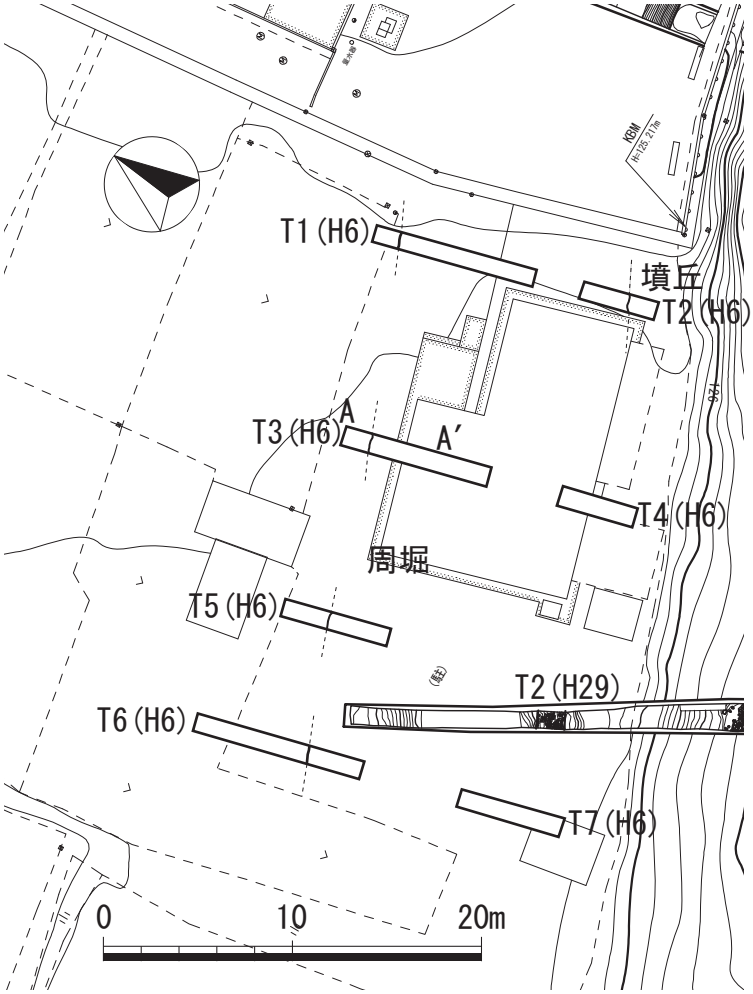


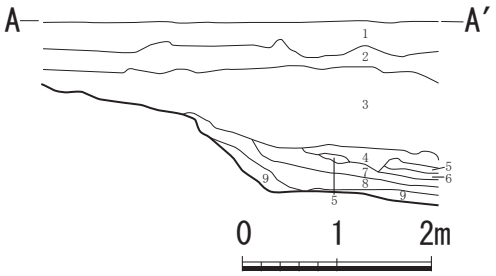


土層説明（B-B′）

1　暗褐色砂質土
2　黒灰色砂質土。小礫含む。締りあり。
3　黒褐色粘質土。締りあり。As-B 含む。
4　褐色粘質土と砂の混土。Hr-FP 混じる。
5　3 層に同じ
6　暗褐色粘質土と砂の混土
7　4＋8 層の混土
8　黒色高締粘質土
9　Hr-FA 層
10 黒色粘質土
11 暗黄褐色砂質土
12 注記なし。
13 Hr-FA 層
14 暗褐色粘質土と砂の混土

第18図　平成３年度調査土層断面図





土層説明（A-A′）

1　暗灰黄色（2.5Y4/2）　細砂層
　軽石なし。粘性なし、締りややあり。

2　黄褐色（5YR4/6）　細砂層
　φ1のCP2%含む。粘性なし、締りあり。

3　暗褐色（10YR3/4）　細砂層
　φ1～5のCP1%含む。粘性なし、締りあり。

4　黒色（7.5YR2/1）　細砂層
　φ1のCP3%含む。粘性なし、締りややあり。

5　As-B灰層＋軽石　粗砂層
　粘性なし、締りあり。

6　As-B軽石純層　粗砂層
　粘性、締りともなし。

7　黒色（7.5YR2/1）　微砂層
　As-B軽石が少量混じる。粘性あり、締りややあり。

8　黒褐色（7.5YR2/2）　微砂層
　As-B軽石が少量混じる。粘性あり、締りややあり。

9　にぶい黄褐色（10YR4/3）　細砂層
　φ1～5の軽石5%含む。粘性、締りともにあり。

第19図　平成６年度調査平面図・断面図

第５節　出土遺物

本項では、平成29～30年度調査で出土した遺物を報告する。遺物の主体となるのは墳丘や周堀から出土した埴輪類だが、形象埴輪は後円部南北の周堀から出土したわずか２点に過ぎない。このほか第２トレンチで確認された祭祀跡の土師器や、周堀や墳裾などから土師器や須恵器、陶磁器類が出土している。なお、後円部南側で表採された平成17年度寄贈資料のうち、形象埴輪については今回の出土遺物と併せて再報告する（前橋市教育委員会2007）。

１　埴　　輪

⑴　円筒埴輪

本古墳では、埴輪列出土の円筒埴輪以外にも、墳丘やその周辺から崩落した円筒埴輪が周堀や墳丘で出土しており、総量はテン箱100箱近くに上る。今回の調査では、原位置を留めていない破片類はすべて採取している。また、本古墳の年代や性格を知る上で欠かすことのできない良好な状態の埴輪を採取することを目的として、第５トレンチ埴輪列出土の円筒埴輪はすべて採取した。これらの円筒埴輪のうち、遺存度の良好なものや、本古墳出土の円筒埴輪の特徴を示すものを中心に掲載した。遺物の詳細は観察表に記載しており、観察項目は以下のとおりである。

１法量：口径・底径・器高の判明したものを記載した。口径・底径は復元径を含む。

２突帯：突帯形は、台形を基本としながらもバラエティがみられる。

台　形：上面の稜が明瞭なもの。

低台形：上面の稜が明瞭で、突帯の高さが台形の底辺１/４以下のもの。

高台形：上面の稜が明瞭で、突帯の高さが台形の底辺１/２以上のもの。

Ｍ字形：上面の稜が明瞭で、上面を押圧して断面Ｍ字形を呈するもの。

不定形：上面の稜がはっきりせず、断面がかまぼこ形を呈するもの。

三角形：断面が三角形を呈するもの。朝顔形埴輪の頸部突帯に多い。

３透孔：半円形または円形のものがみられる。破片資料が多いため曲線部のみが確認されるものは円形指向、半円形の平坦部のみが確認されるものを半円形指向とした。このほか小円孔を施すものは小円形と記載。

４色調：赤色・橙色・黄橙色・にぶい黄褐色・白色・灰色に分類した

５胎土：白色粒や黒色粒、小礫を含んでおり、これら以外の目立った鉱物についても記載した。

６焼成：一般的な焼成のものを普通とし、粉っぽく著しく焼成が悪いものを不良、須恵質を呈するなど著しく堅緻なものを良好とした。

７刷毛：１㎝当たりの本数と、施文の深さを記載。資料の遺存状態にも左右される。

８成形・整形の特徴：①内面調整、②口唇部成形、③底部調整について記載した。

①内面調整：内面のハケやナデの調整について記載。

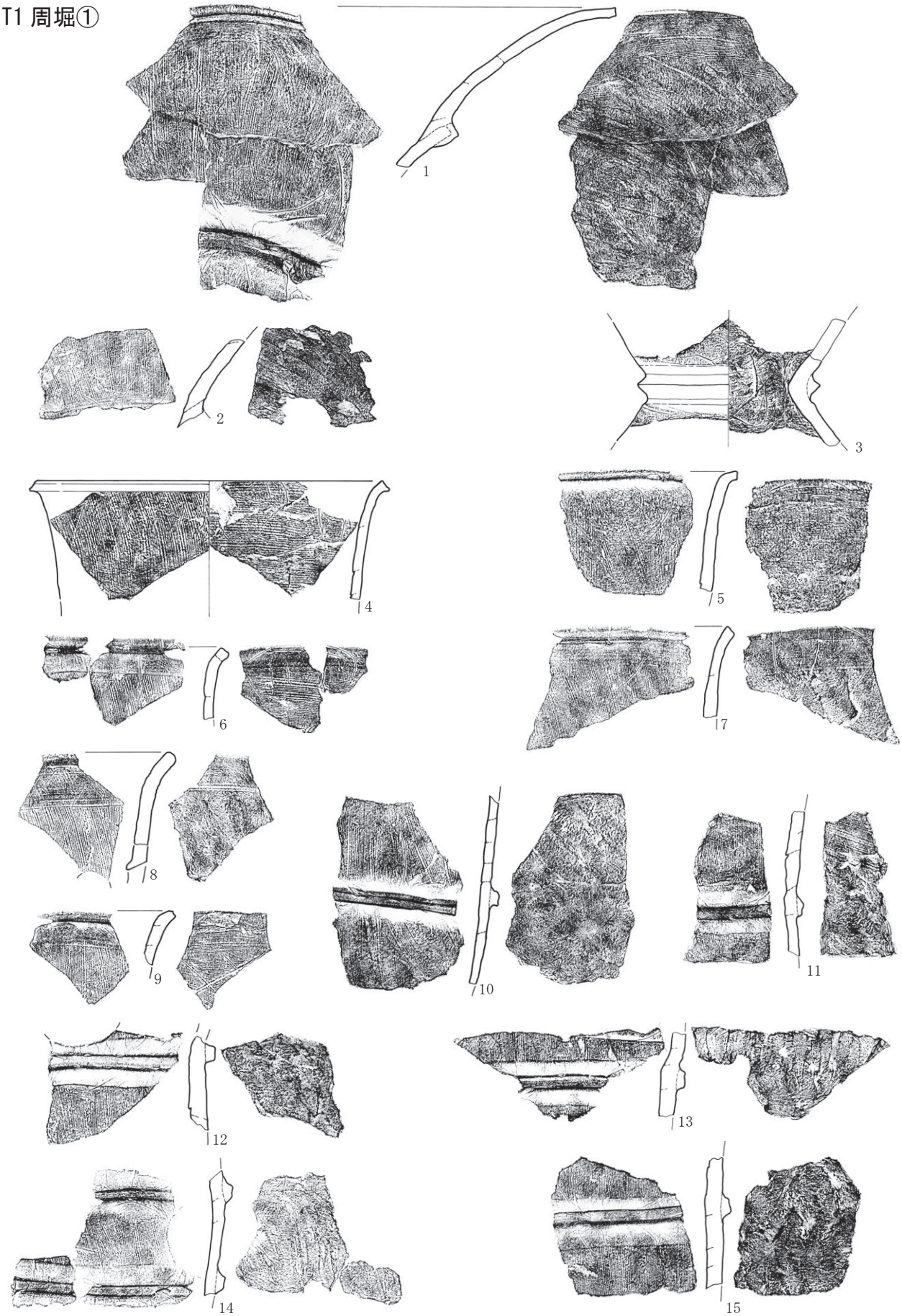
②口唇部成形：口縁部や口端部の形状にもバラエティがみられ、口縁部の開きの強さにより外反および外屈に分け、口端部の断面形状により角頭状・隅丸形・丸頭形に分けて記載した。

③底部調整：調整の有無を○と×で記載した。

９残存率

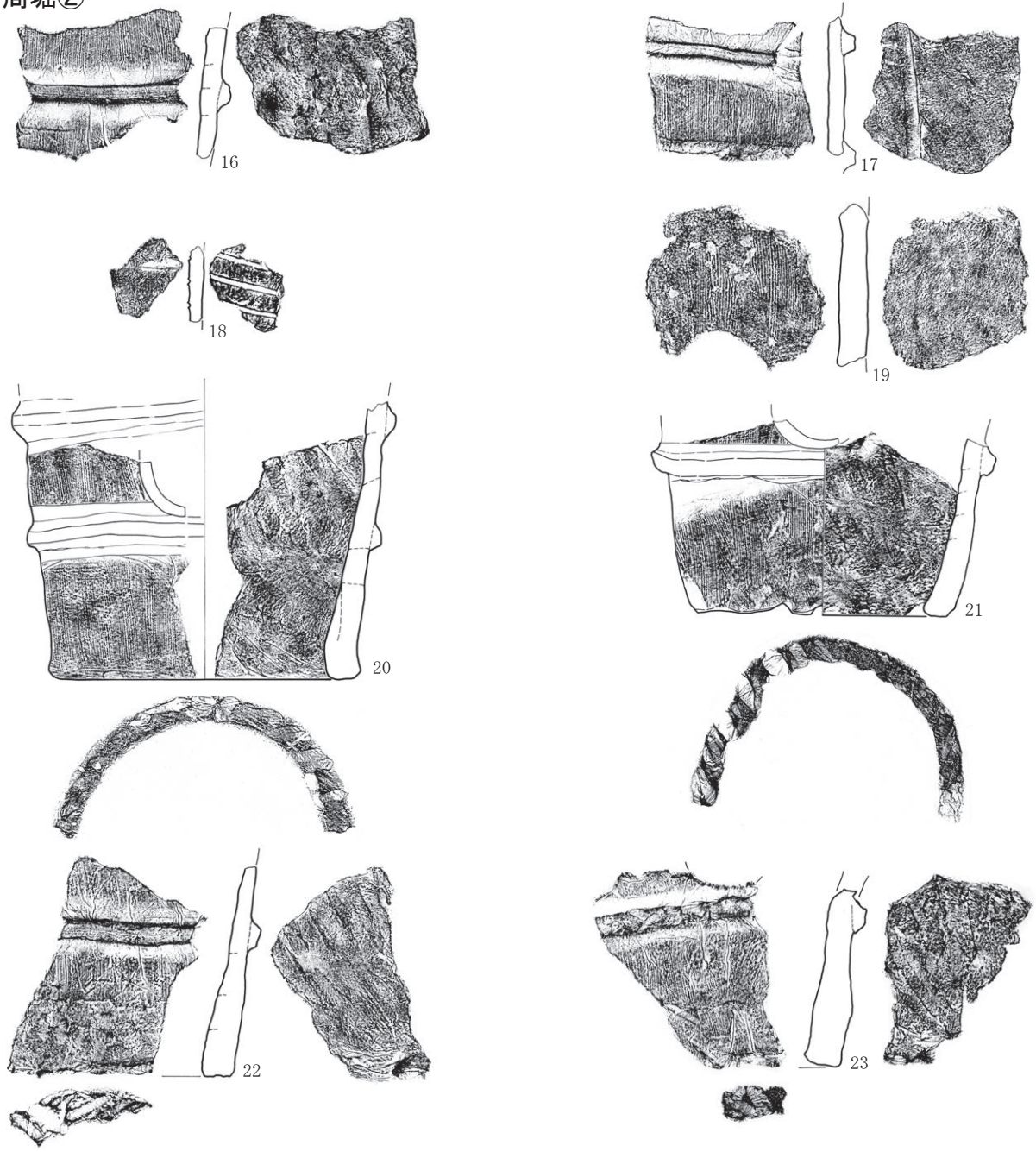
10備考：赤彩や線刻、突帯裏面の調整について記載した。

T1 周堀①



第20図　円筒埴輪（1）　S＝1/5

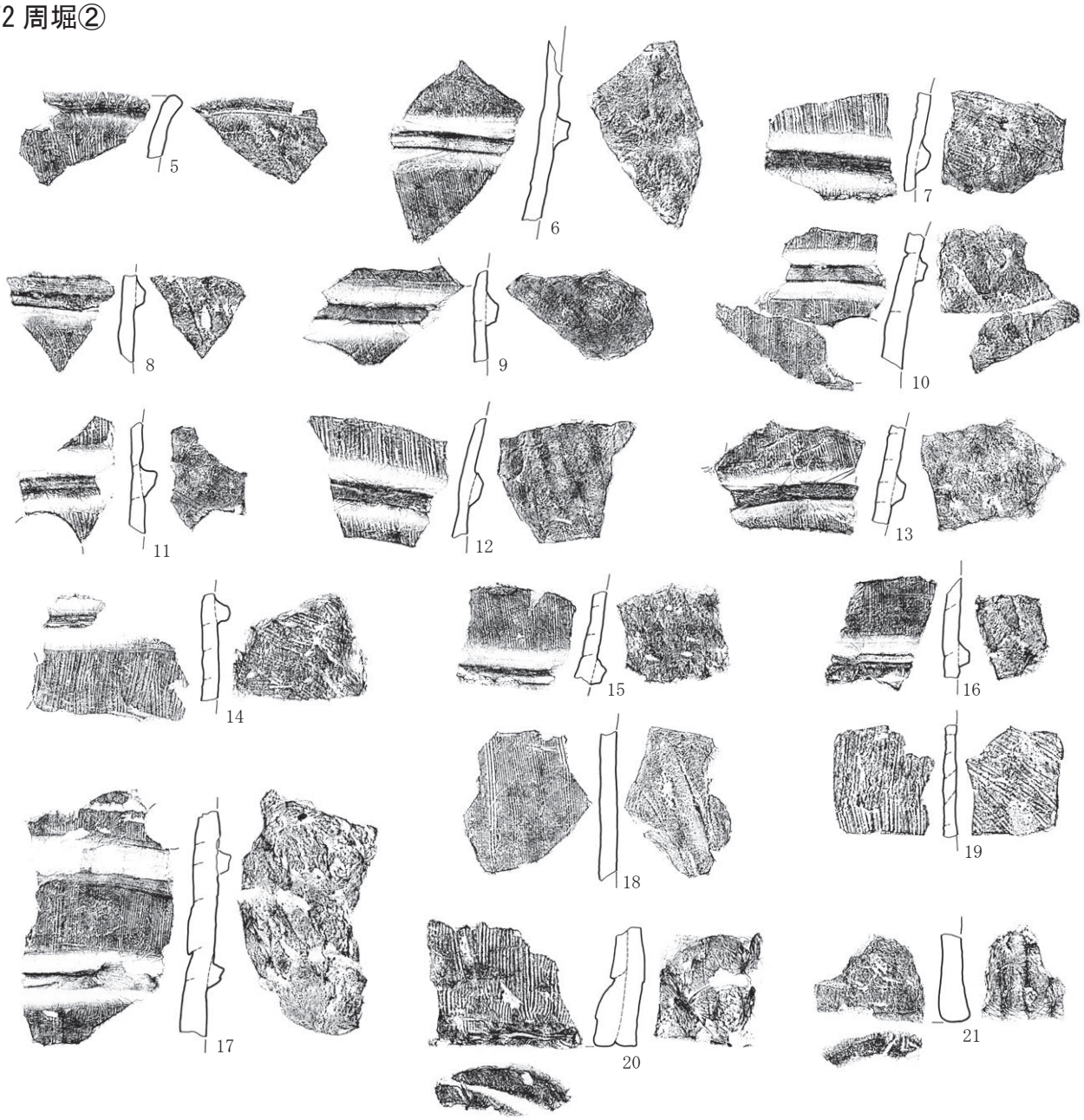
T1 周堀②



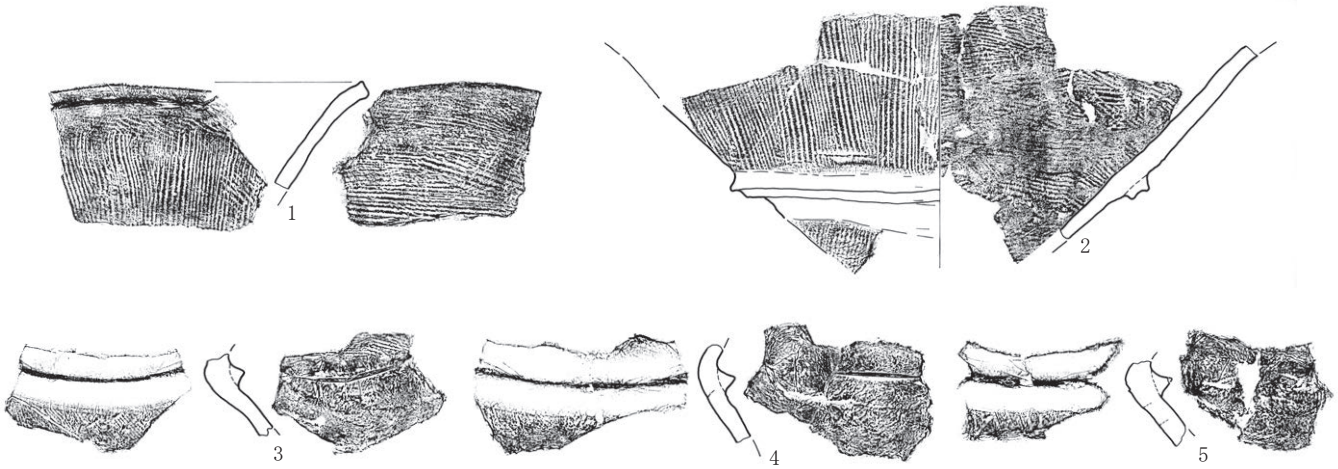
T2 周堀①

第21図　円筒埴輪（2）　S＝1/5

T2 周堀②

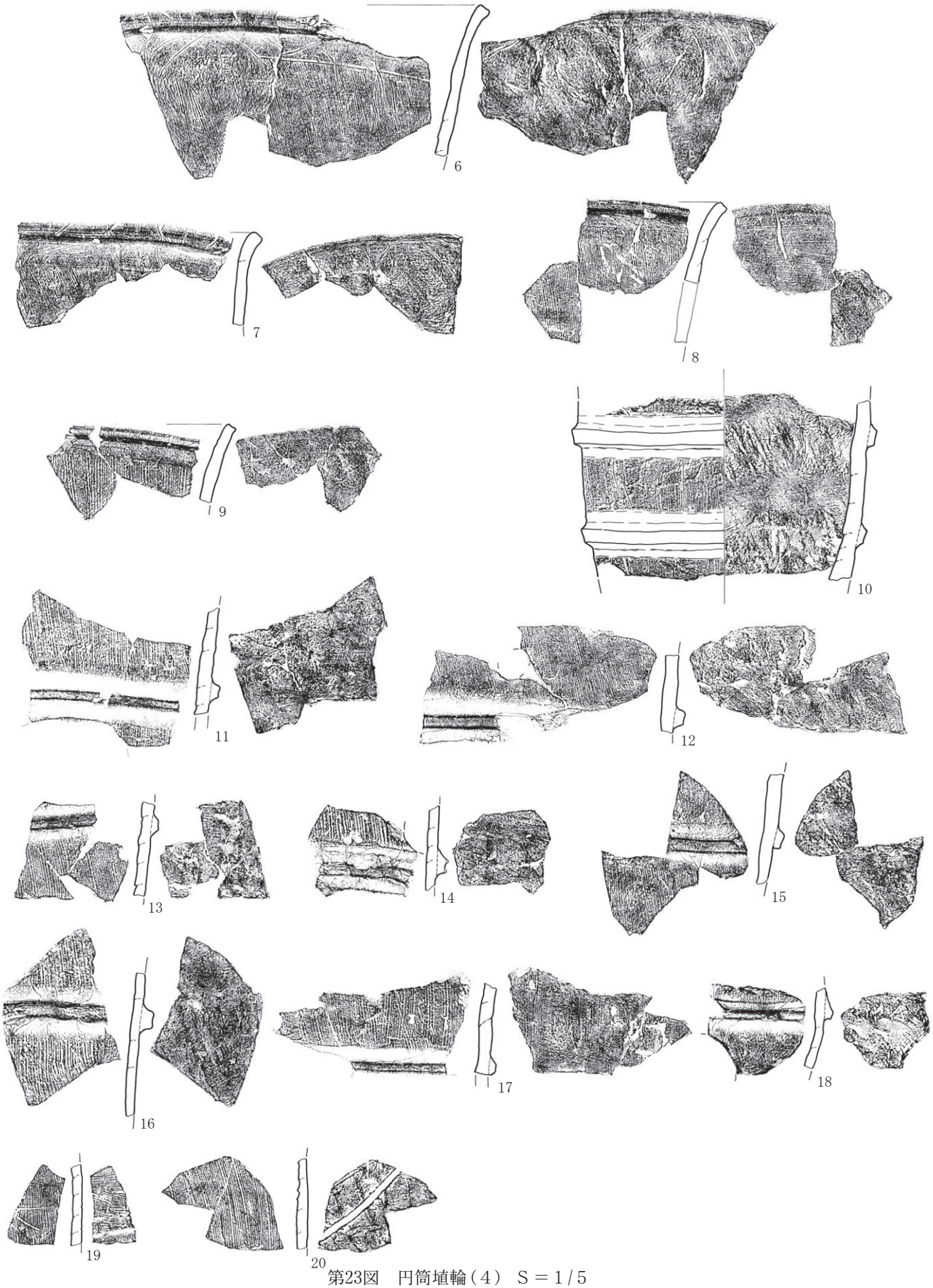


T2 基壇テラス①



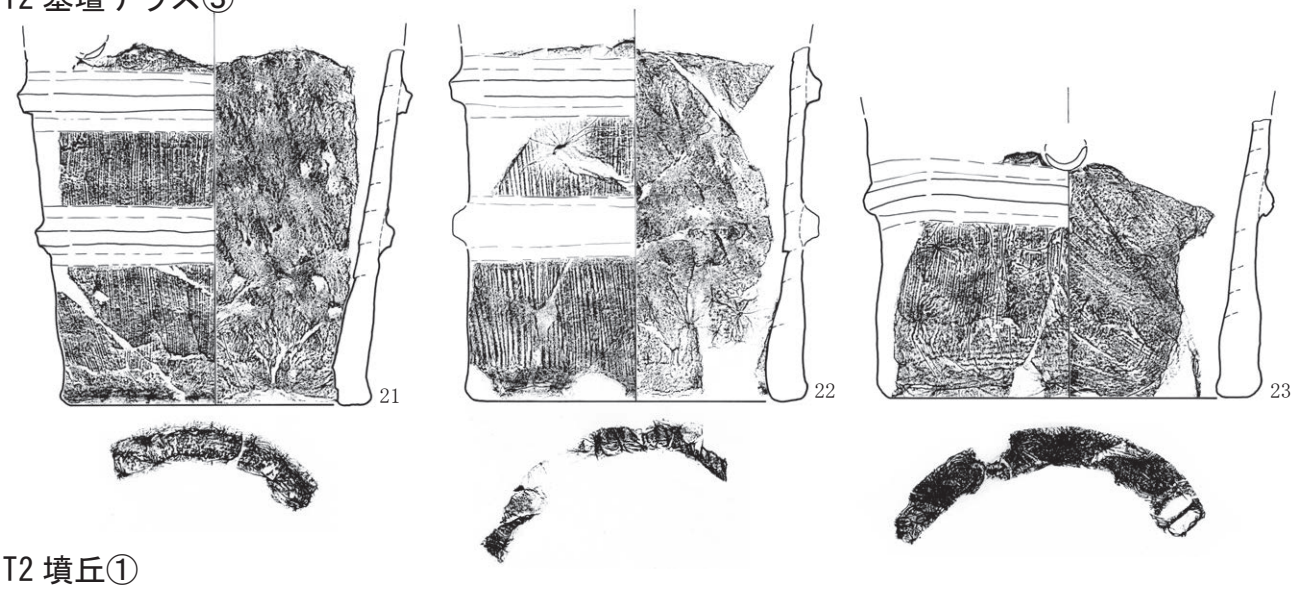
第22図　円筒埴輪（３）　Ｓ＝１/５

T2 基壇テラス②

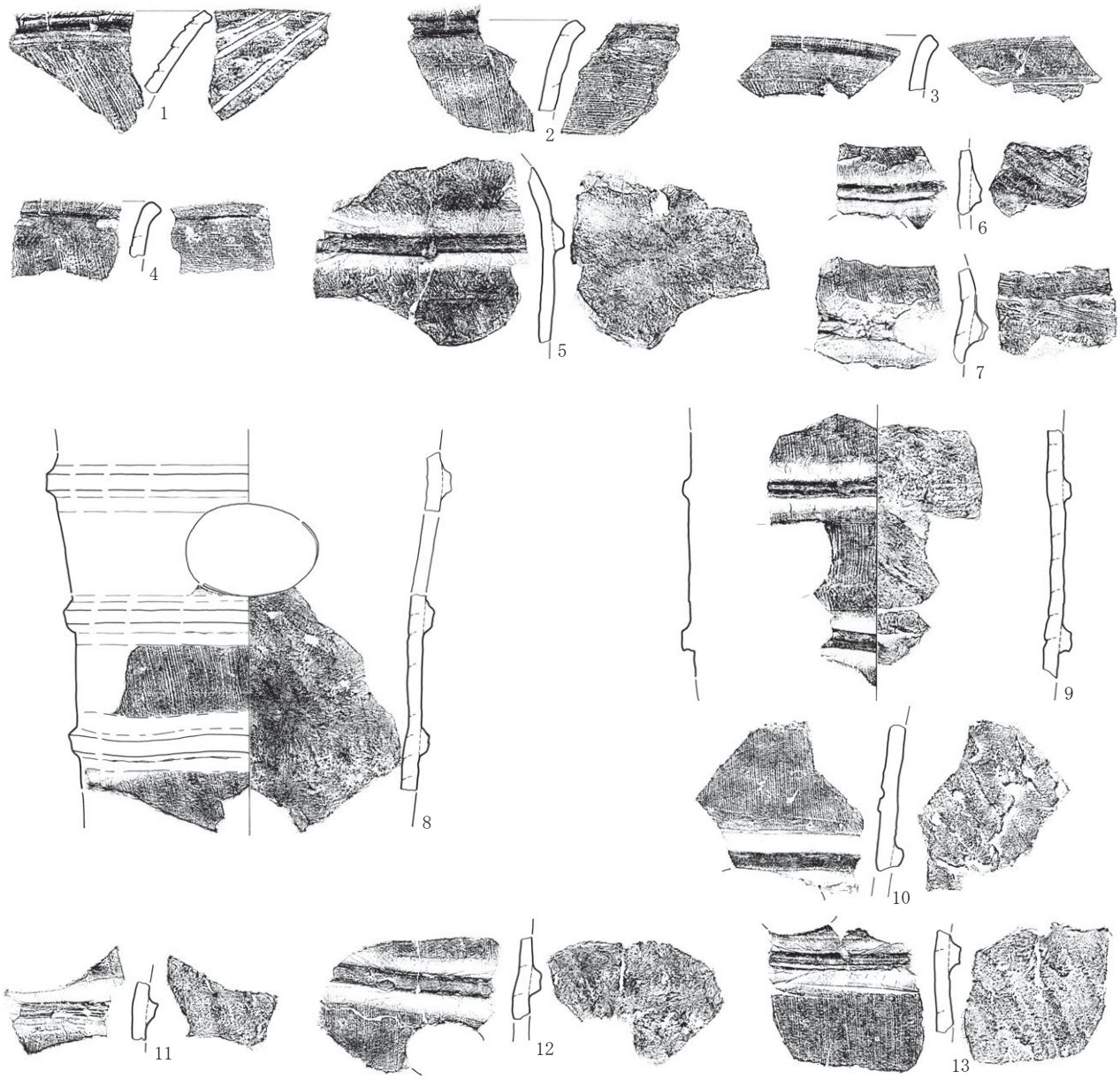


第23図　円筒埴輪（4）　S＝1/5

T2 基壇テラス③

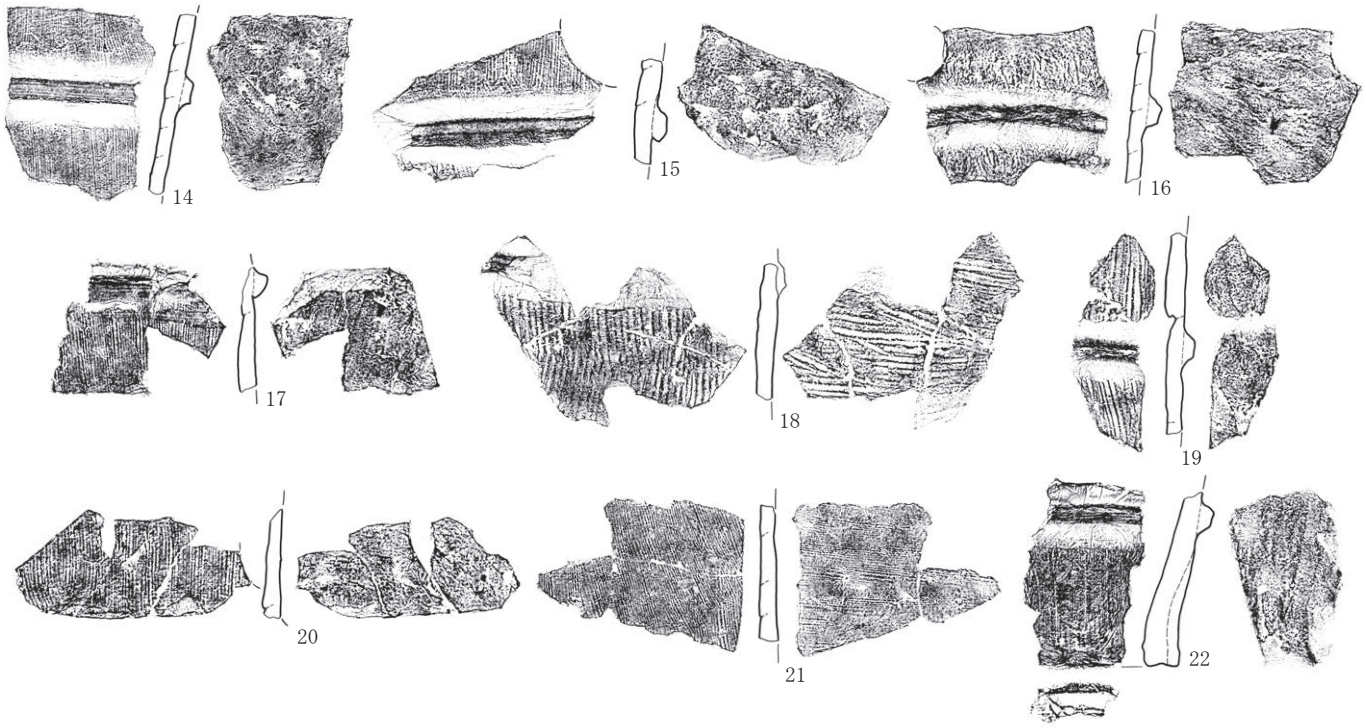


T2 墳丘①

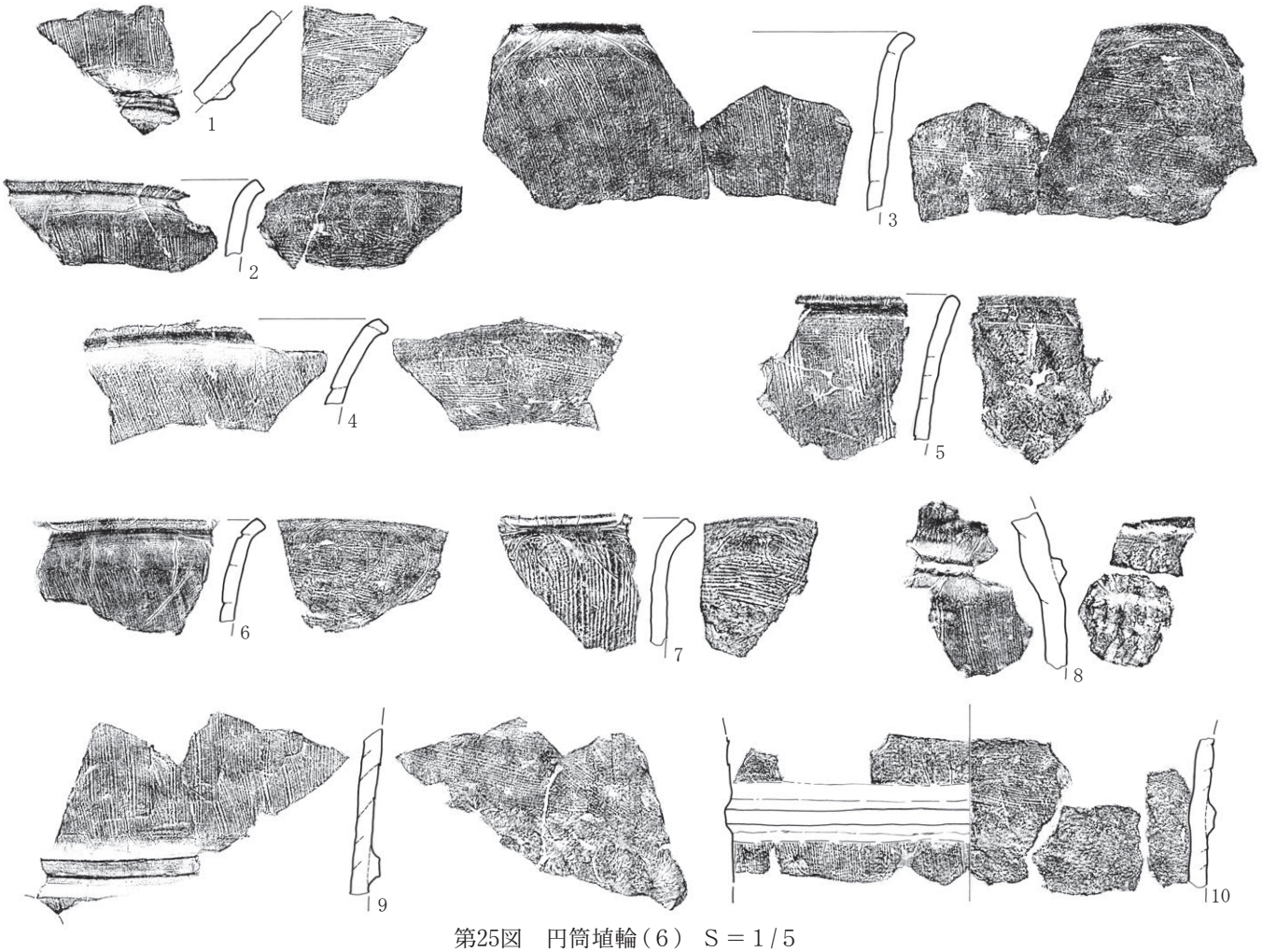


第24図　円筒埴輪（5）　S＝1/5

T2 墳丘②

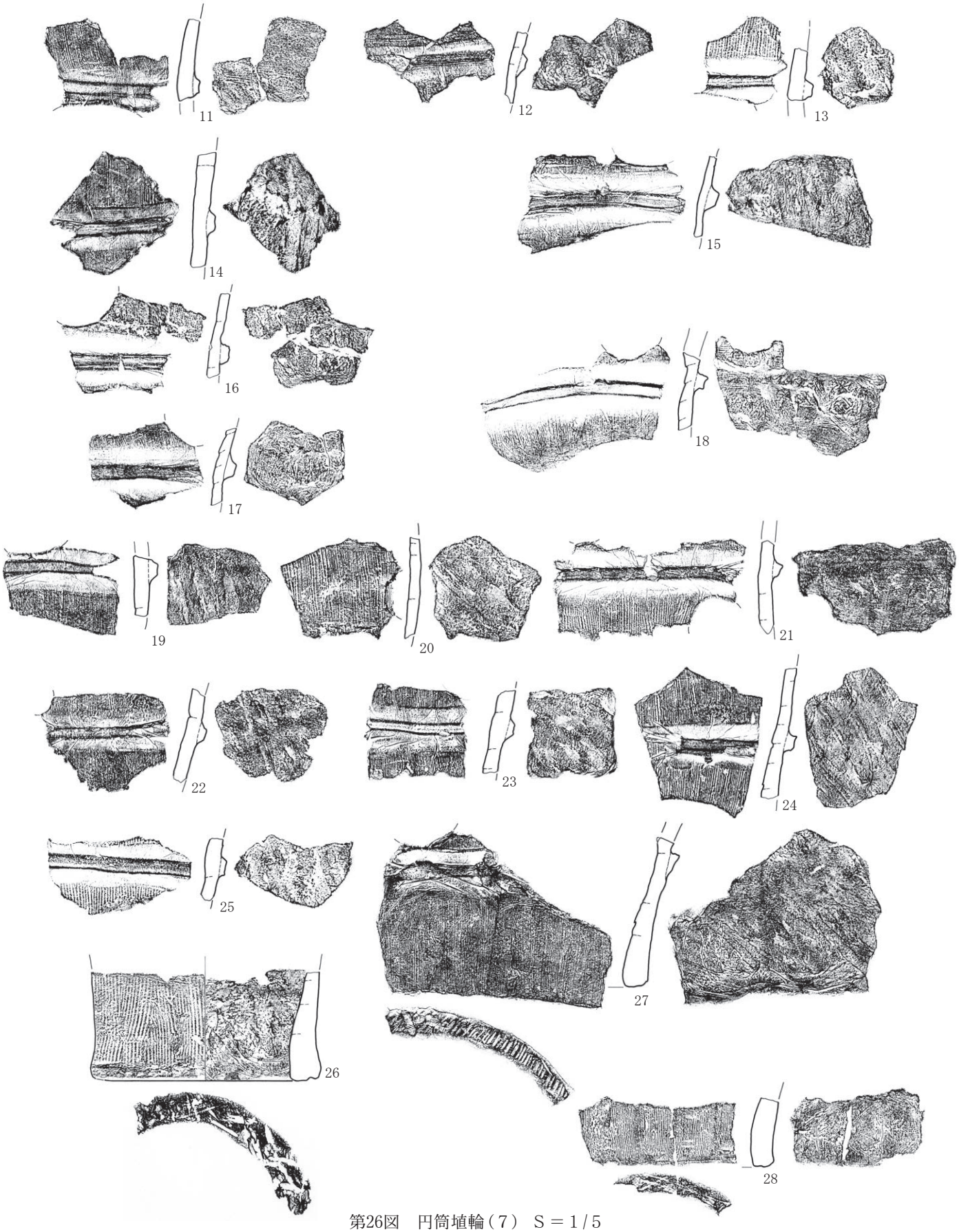


T3 周堀・墳丘①



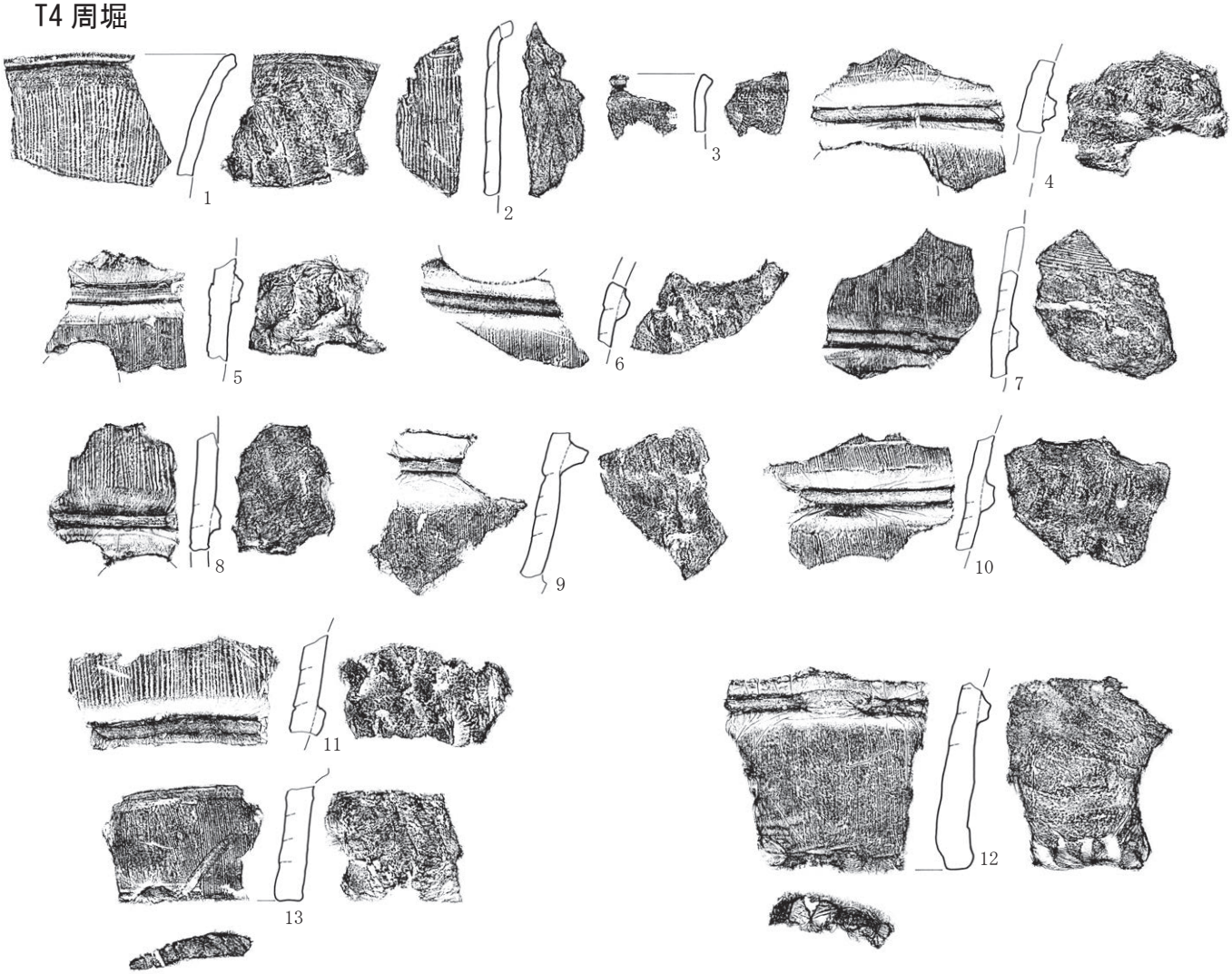
第25図　円筒埴輪（6）　S＝1/5

T3 周堀・墳丘②



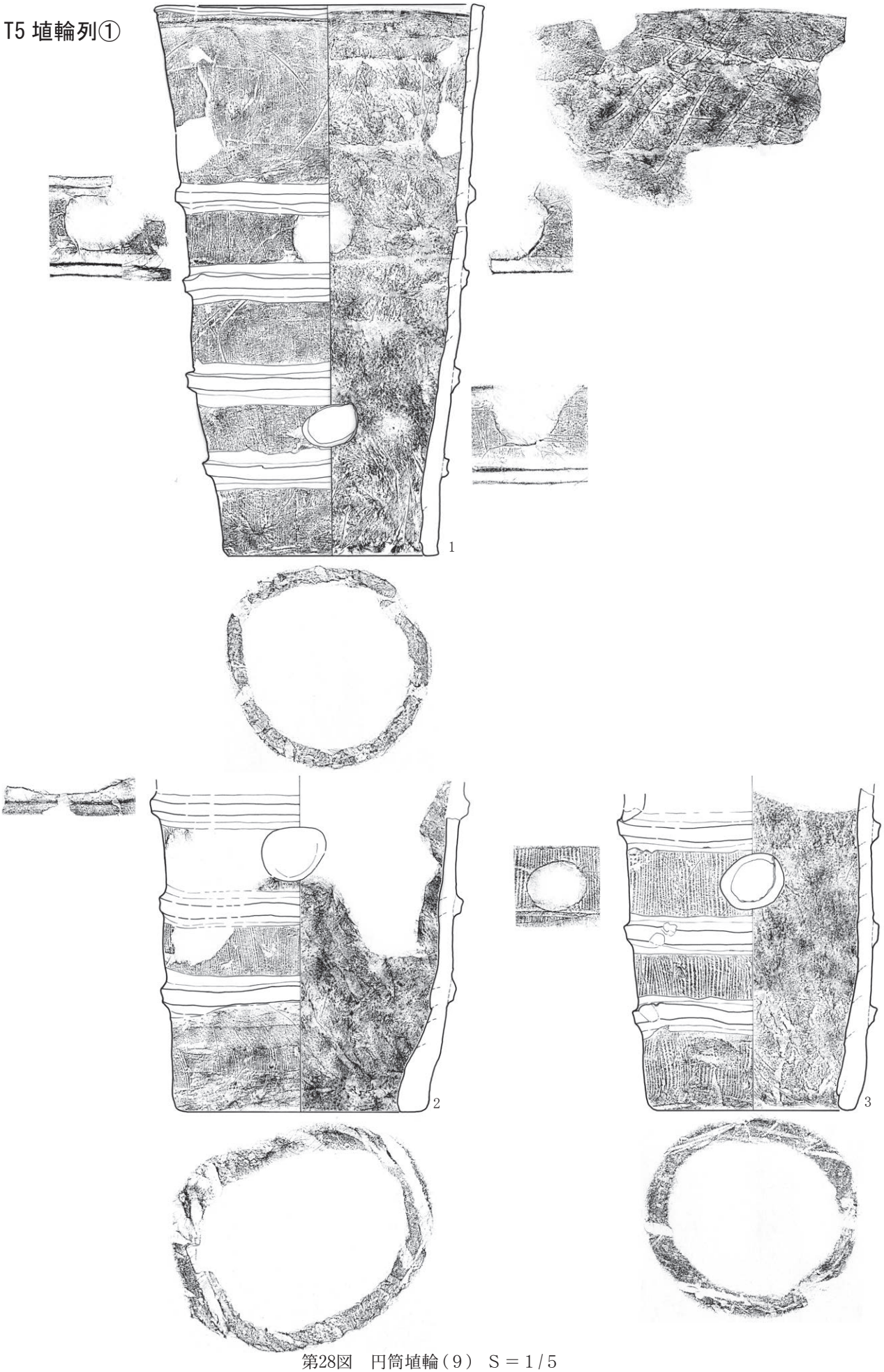
第26図　円筒埴輪（7）　S＝1/5

T4 周堀



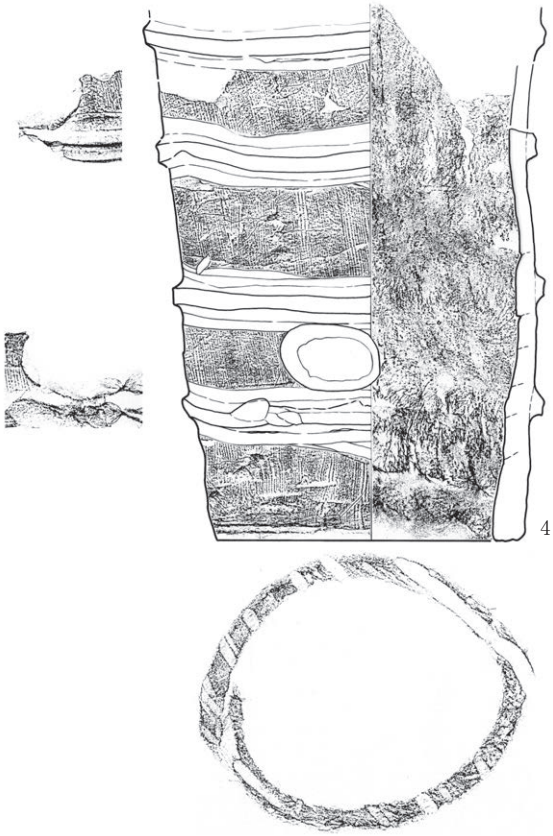
第27図　円筒埴輪（８）　Ｓ＝１/５

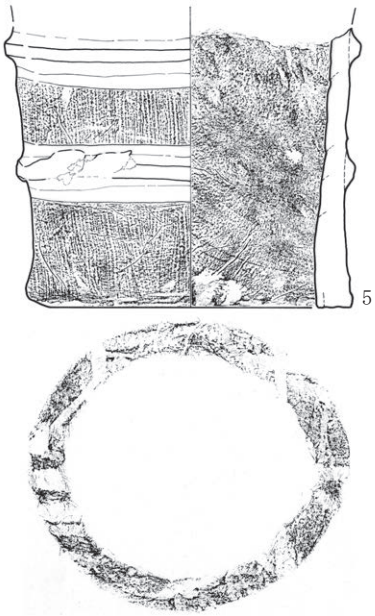
T5 埴輪列①



第28図　円筒埴輪（9）　S＝1/5

T5 埴輪列②

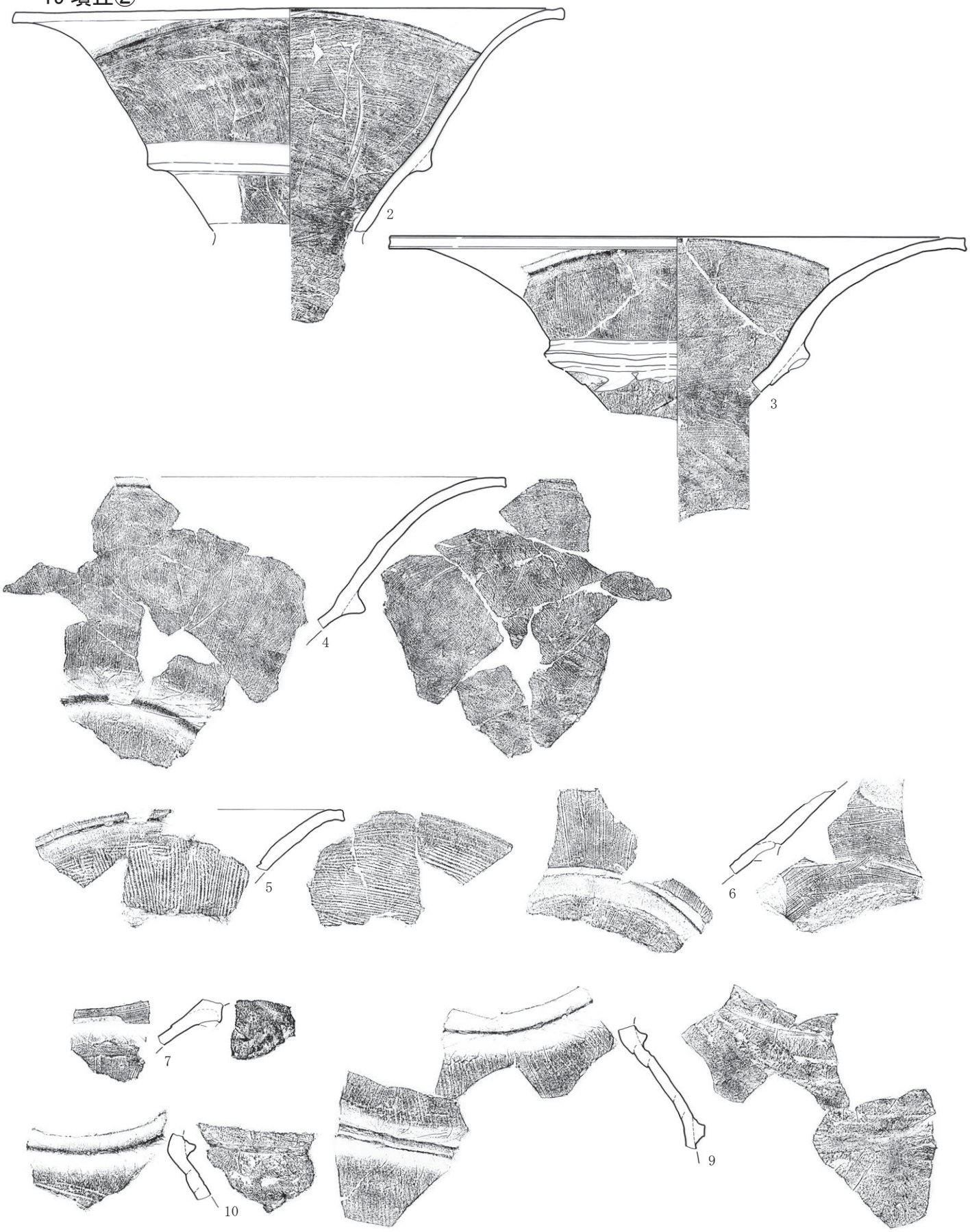




T5 墳丘①

第29図　円筒埴輪(10)　S＝1/5

T5 墳丘②

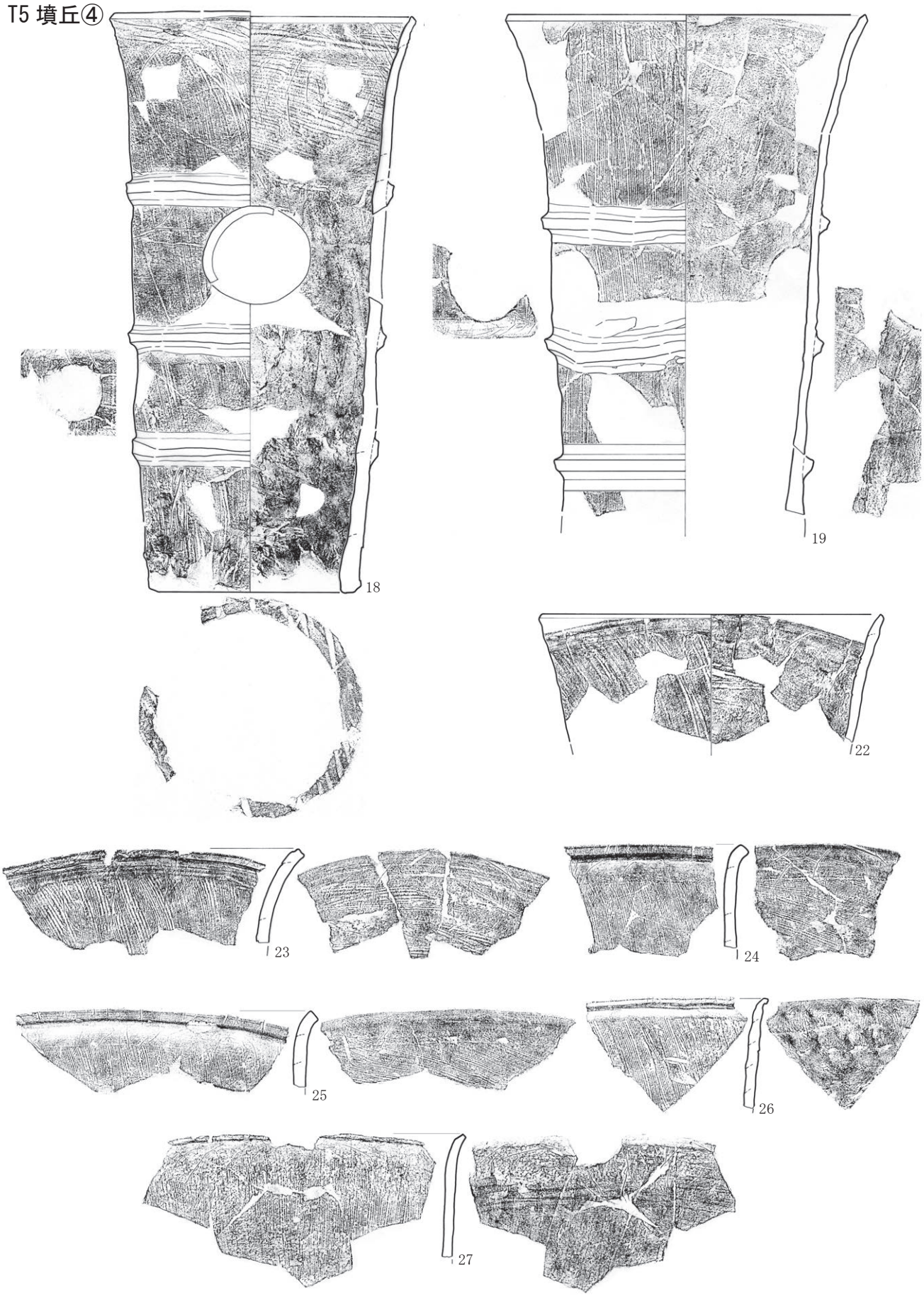


第30図　円筒埴輪(11)　S＝1/5

T5 墳丘③

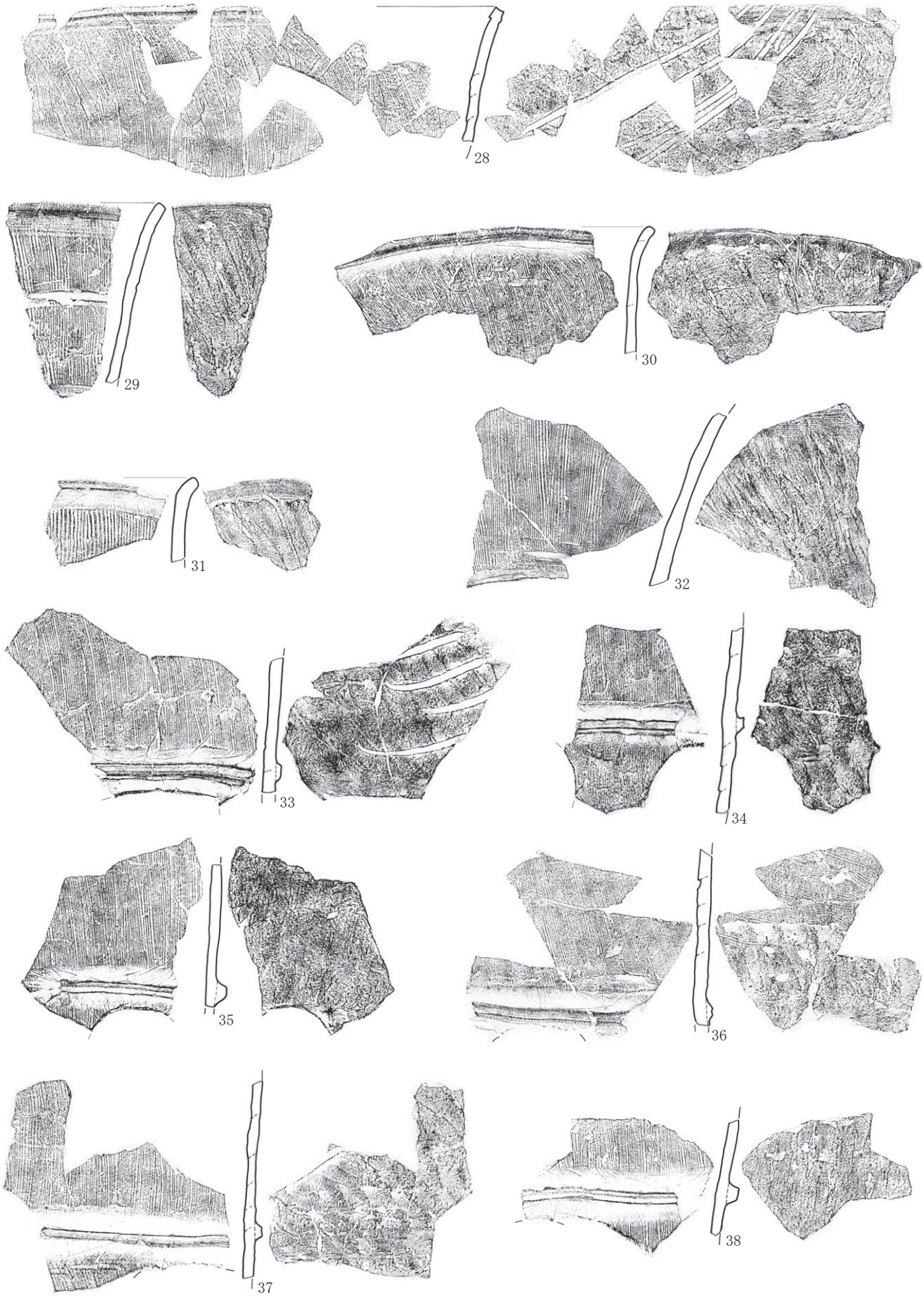
第31図　円筒埴輪(12)　S＝1/5

T5 墳丘④



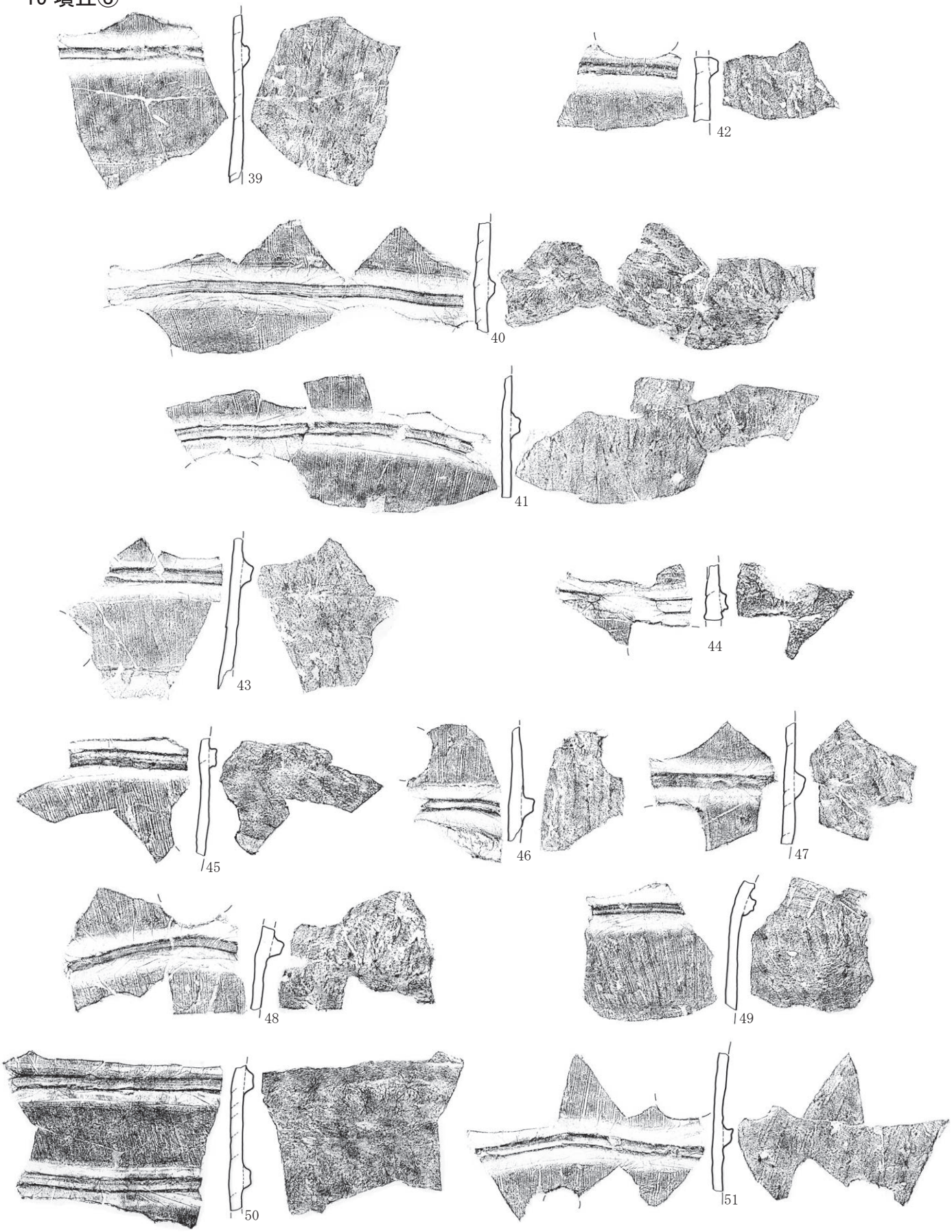
第32図　円筒埴輪(13)　S＝1/5

T5 墳丘⑤



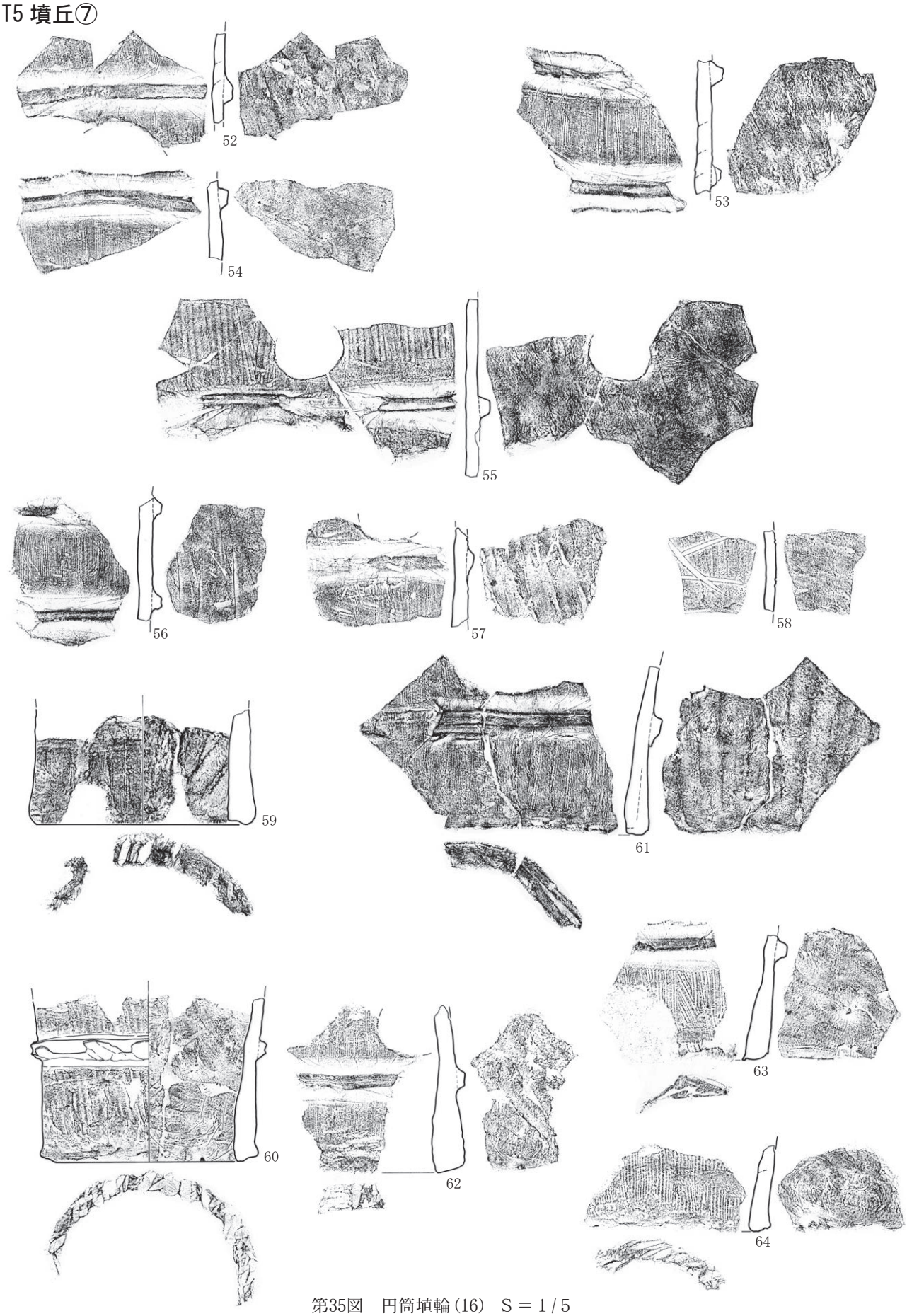
第33図　円筒埴輪(14)　S＝1/5

T5 墳丘⑥



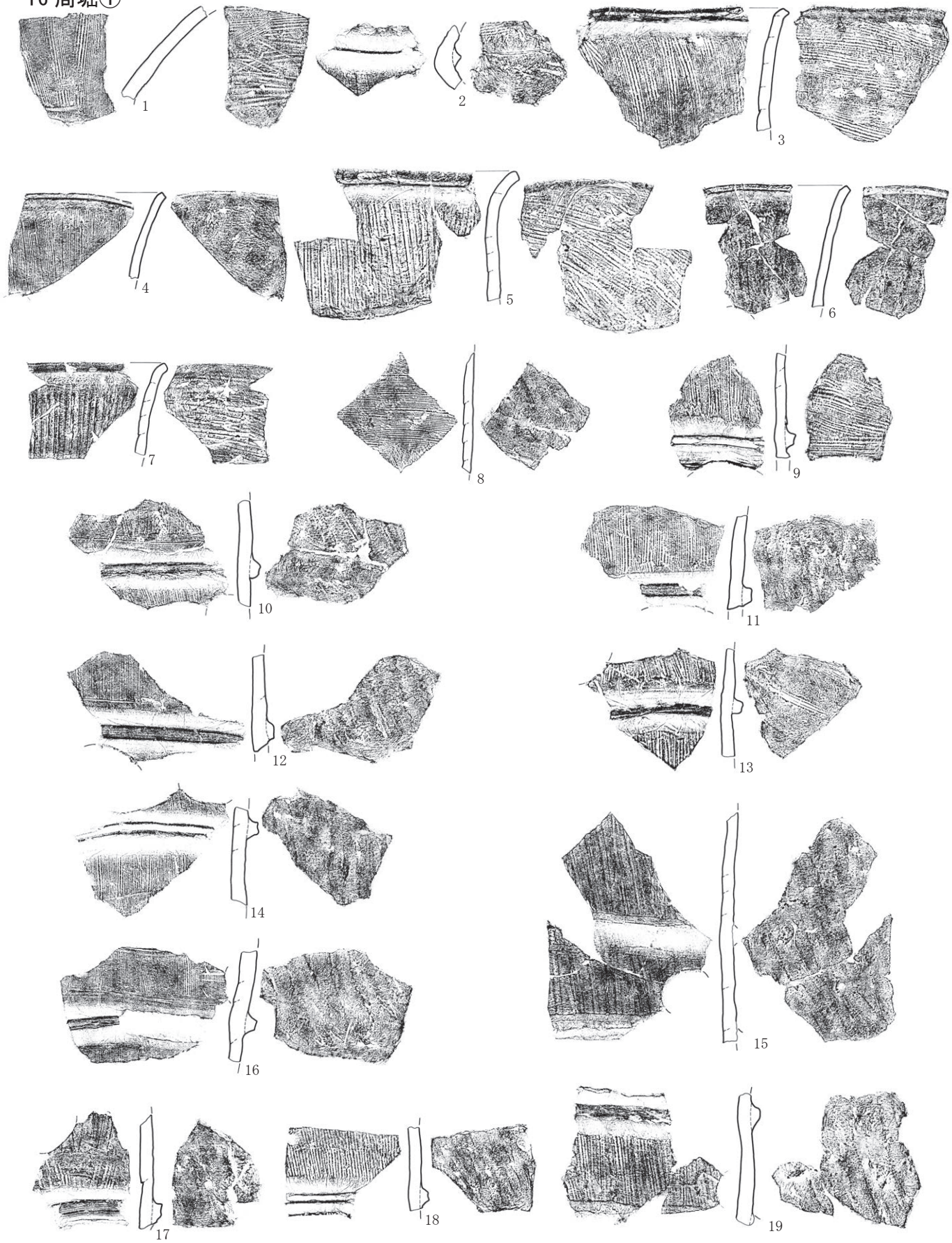
第34図　円筒埴輪(15)　S＝1/5

T5 墳丘⑦



第35図　円筒埴輪(16)　S＝1/5

T6 周堀①

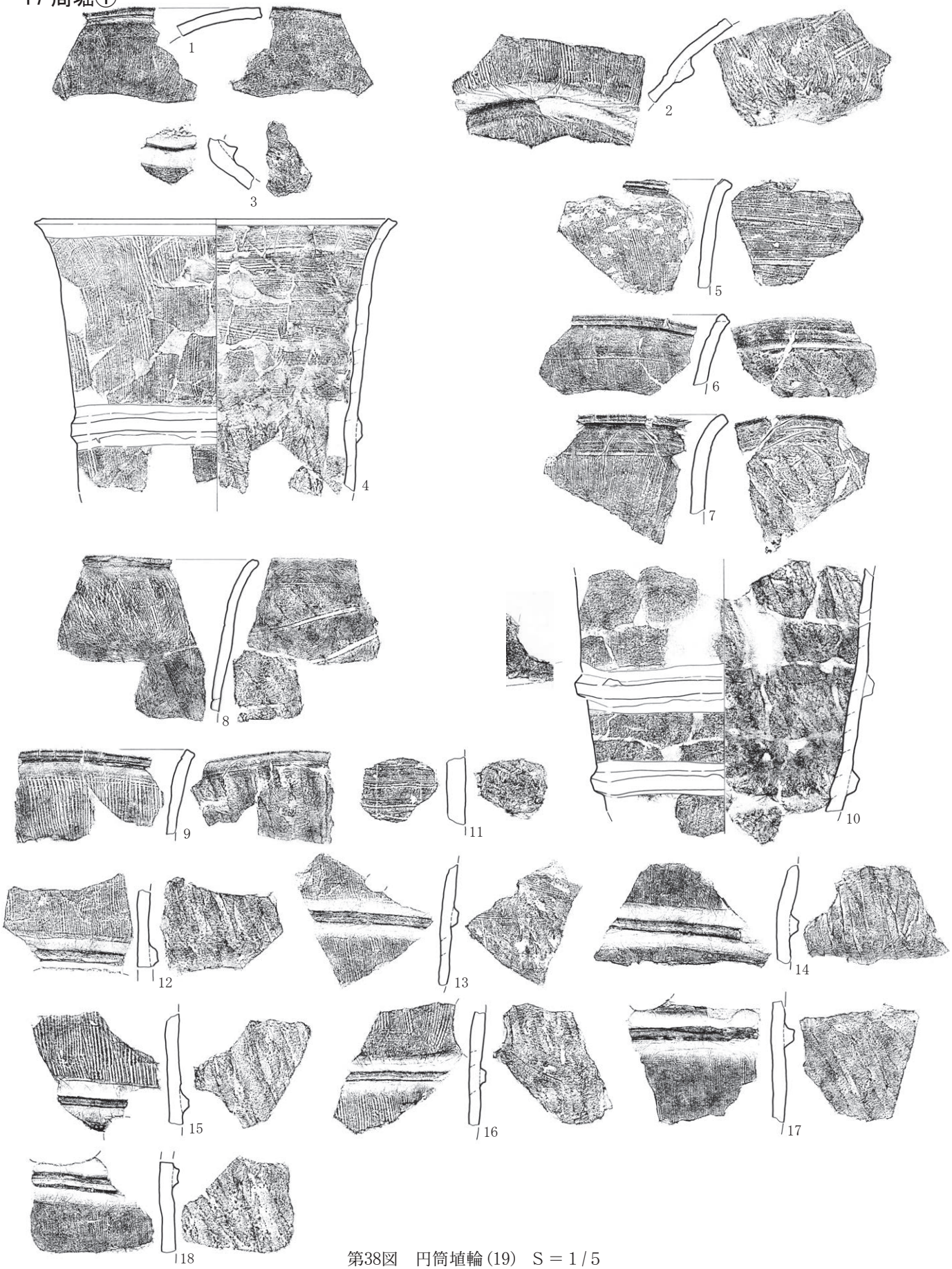


第36図　円筒埴輪(17)　S＝1/5

T6 周堀②

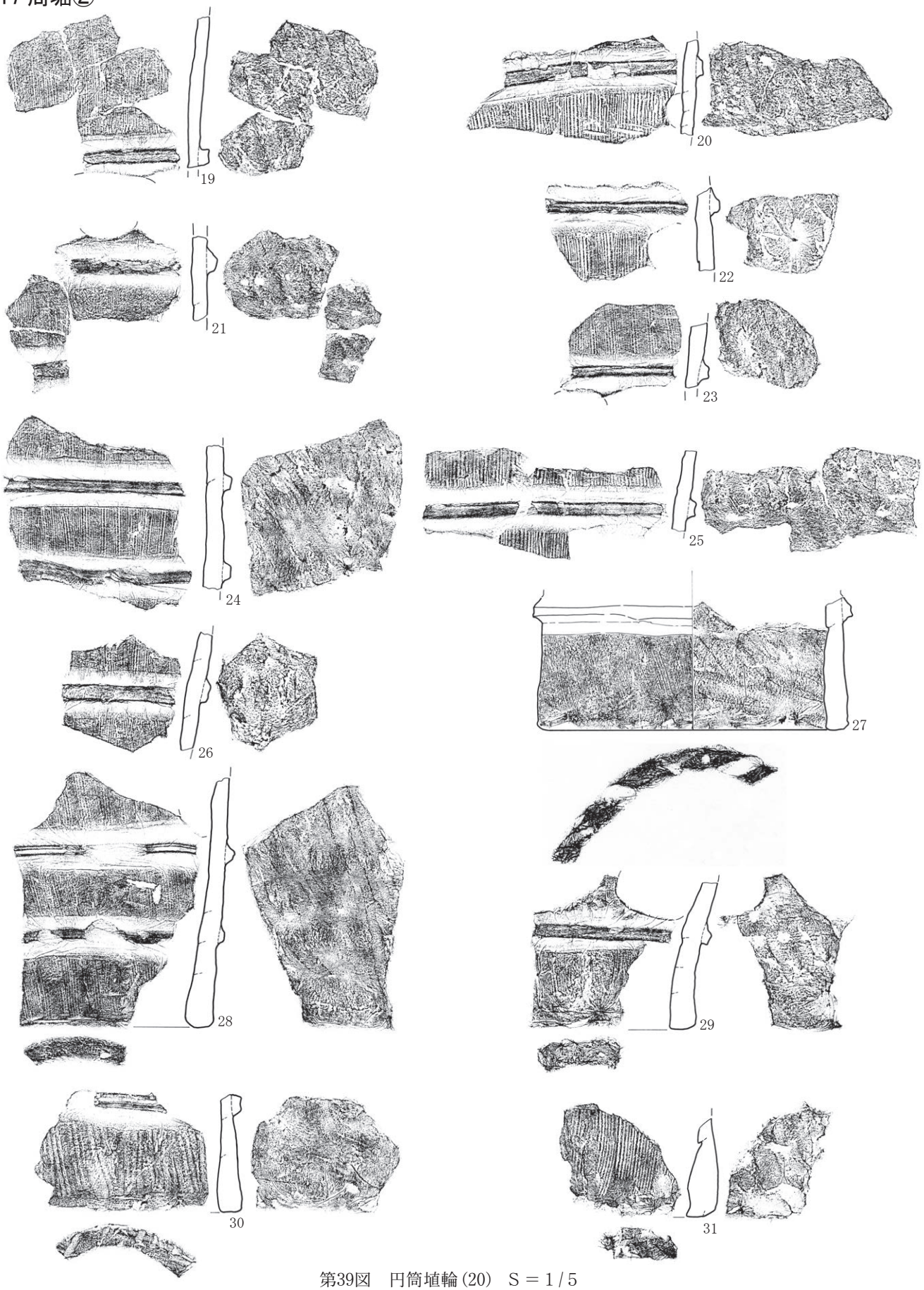
第37図　円筒埴輪(18)　S＝1/5

T7 周堀①



第38図　円筒埴輪(19)　S＝1/5

T7 周堀②



第39図　円筒埴輪(20)　S＝1/5

円筒埴輪観察表

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T1	1	周堀	—	三角形	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ハケ後ナデ②外反角頭状③—	口縁部破片	朝顔形。
T1	2	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	口縁部破片	朝顔形。
T1	3	周堀	—	三角形	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ハケ後ナデ②—③—	頸部破片	朝顔形。
T1	4	周堀	口径：31.8	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	普通	①ハケ②外屈角頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T1	5	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外屈角頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T1	6	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T1	7	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T1	8	周堀	—	—	小円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T1	9	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	内面斜格子線刻。内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T1	10	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏横ナデ。
T1	11	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T1	12	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T1	13	周堀	—	低台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T1	14	周堀	—	台形	円形	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏横ナデ。
T1	15	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。16と同一。
T1	16	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。15と同一。

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T1	17	周堀	—	台形	—	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	還元焔焼成。
T1	18	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	6	浅い	①ハケ②—③—	胴部破片	内面斜位の線刻。
T1	19	周堀	—	—	—	赤色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	底部付近破片	
T1	20	周堀	底径：24.0	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③○	底部1/3	
T1	21	周堀	底径：19.2	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③×	底部1/2	
T1	22	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③○	底部破片	
T1	23	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③○	底部破片	突帯上に布状圧痕。
T2	1	周堀	—	—	—	赤色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	朝顔形。内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T2	2	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反角頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T2	3	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反丸頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T2	4	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反丸頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T2	5	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②外反丸頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T2	6	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。
T2	7	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ後一部ハケ②—③—	胴部破片	赤彩。
T2	8	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T2	9	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T2	10	周堀	—	低台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T２	11	周堀	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	
T２	12	周堀	—	台形	円形指向	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	還元焔焼成。
T２	13	周堀	—	台形	円形指向	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T２	14	周堀	—	台形	円形指向	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	15	周堀	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	16	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	17	周堀	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	18	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	19	周堀	—	—	—	灰色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	良好	5	浅い	①ハケ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	20	周堀	—	—	—	赤色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③×	底部破片	
T２	21	周堀	—	—	—	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	—	—	①ナデ②—③×	底部破片	
T２	1	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	普通	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	朝顔形。内外面口縁部横ナデ。赤彩。２と同一。
T２	2	墳丘	—	M字形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	4	普通	①ハケ②—③—	口縁部3/4	朝顔形。突帯上に布状圧痕。１と同一。
T２	3	墳丘	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	浅い	①頸部上位ハケ、以下ナデ②—③—	頸部破片	肩部外面に斜位の線刻。
T２	4	墳丘	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	不明	不明	①ナデ②—③—	頸部破片	外面アバタ状剥離。
T２	5	墳丘	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	8	浅い	①ナデ②—③—	頸部破片	朝顔形。赤彩。
T２	6	墳丘	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T２	7	墳丘	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。９と同一。
T２	8	墳丘	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①上部ハケ・下部ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	外面口縁部横ナデ。赤彩。
T２	9	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。７と同一。
T２	10	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部1/3	やや還元状の焼成。
T２	11	墳丘	—	台形	半円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。
T２	12	墳丘	—	台形	小円形	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	13	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	14	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	15	墳丘	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	16	墳丘	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	不良	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	17	墳丘	—	台形	半円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ハケ②—③—	胴部破片	
T２	18	墳丘	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	19	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	赤彩。外面斜位線刻。
T２	20	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	内面斜位線刻。
T２	21	墳丘	底径：19.6	—	円形指向	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③○	底部1/3	
T２	22	墳丘	底径：22.4	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③×	底部1/3	
T２	23	墳丘	底径：23.8	不定形	小円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③○	底部1/3	

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透　孔	色　調	胎　　土	焼成	刷　毛		成形・整形の特徴	残存率	備　　考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T２	1	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②外反角頭状③—	口縁部破片	朝顔形。内面斜位線刻。赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T２	2	墳丘	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T２	3	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T２	4	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	7	普通	①ハケ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T２	5	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	8	浅い	①ナデ②—③—	肩部破片	朝顔形。外面アバタ状剥離。
T２	6	墳丘	—	台形	半円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	8	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯上に布状の圧痕。
T２	7	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	7	普通	①ハケ後ナデ②—③—	肩部破片	赤彩。朝顔形。
T２	8	墳丘	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	8	浅い	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部1/3	赤彩。12・13・14と同一。
T２	9	墳丘	—	台形	半円形	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。15と同一。
T２	10	墳丘	—	不定形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	11	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	12	墳丘	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	8	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。８・13・14と同一。
T２	13	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	不良	8	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。８・12・14と同一。
T２	14	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	不良	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。８・12・13と同一。
T２	15	墳丘	—	台形	円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。９と同一。
T２	16	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	不良	4	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	外面アバタ状剥離。
T２	17	墳丘	—	不定形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T２	18	墳丘	—	台形	円形	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	3	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	外面X字状線刻。赤彩。19と同一。
T２	19	墳丘	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	3	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	赤彩。18と同一。
T２	20	墳丘	—	—	円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T２	21	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	赤彩。
T２	22	墳丘	—	台形	—	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	8	浅い	①ナデ②—③○	底部破片	
T３	1	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ハケ②—③—	口縁部破片	赤彩。
T３	2	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	浅い	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。朝顔形か。
T３	3	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。４と同一。
T３	4	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外反隅丸形③—	口縁部破片	赤彩。３と同一。
T３	5	墳裾	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	8	浅い	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T３	6	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ハケ後一部ナデ②外屈角頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T３	7	周堀	—	—	—	赤色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	4	普通	①上部ハケ・下部ナデ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T３	8	周堀	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ後ナデ②—③—	肩部破片	朝顔形。
T３	9	周堀	—	低台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	7	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T３	10	周堀	—	低台形	小円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。
T３	11	周堀	—	台形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。
T３	12	墳裾	—	低台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	8	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透　孔	色　調	胎　　土	焼成	刷　毛		成形・整形の特徴	残存率	備　　考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T3	13	周堀	—	台形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩
T3	14	周堀	—	低台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	8	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T3	15	一括	—	台形	円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T3	16	墳裾	—	台形	円形指向	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T3	17	周堀	—	台形	円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T3	18	周堀	—	台形	円形指向	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	
T3	19	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T3	20	周堀	—	—	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T3	21	周堀	—	台形	円形	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T3	22	周堀	—	台形	小円形	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T3	23	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T3	24	周堀	—	台形	—	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T3	25	周堀	—	台形	—	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T3	26	周堀	底径：21.8	—	—	赤色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③○	底部1/3	赤彩。
T3	27	周堀	—	—	円形指向	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③×	底部破片	
T3	28	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③×	底部破片	
T4	1	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	4	普通	①ナデ②外反丸頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T４	2	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T４	3	周堀	—	—	—	赤色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T４	4	周堀	—	台形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T４	5	周堀	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	8	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T４	6	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T４	7	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T４	8	周堀	—	低台形	円形指向	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T４	9	周辺一括	—	高台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T４	10	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T４	11	周堀	—	台形	—	灰色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	良好	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T４	12	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③×	底部破片	
T４	13	周堀	—	—	—	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	6	浅い	①ナデ②—③×	底部破片	
T５	1	埴輪列	口径：31.5 底径：20.0 器高：52.5	台形・M字形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②外反角頭状③×	口縁部～底部3/4	４条突帯。赤彩。内面口縁部横ナデ。２段目と４段目にはそれぞれ角度をたがえて２個ずつ透かしを配す。口縁部内面には斜格子状の線刻。
T５	2	埴輪列	底径：23.9	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③○	胴部～底部1/3	４条突帯。赤彩。３段目と４段目にはそれぞれ角度をたがえて２個ずつ透かしを配す。
T５	3	埴輪列	底径：19.7	低台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	3	普通	①ナデ②—③×	胴部～底部1/2	４条突帯。赤彩。３段目と４段目にはそれぞれ角度をたがえて２個ずつ透かしを配す。
T５	4	埴輪列	底径：19.9	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	8	浅い	①ナデ②—③○	胴部～底部1/3	４条突帯。赤彩。２段目と４段目にはそれぞれ角度をたがえて２個ずつ透かしを配す。
T５	5	埴輪列	底径：21.2	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	4	浅い	①ナデ②—③×	胴部～底部1/3	

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透　孔	色　調	胎　　土	焼成	刷　毛		成形・整形の特徴	残存率	備　　考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T５	1	墳丘	口径：47.4	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ハケ②外反丸頭状③—	口縁部3/4	朝顔形。赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T５	2	墳丘	口径：53.0	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ハケ後部分的にナデ②外反角頭状③—	口縁部1/3	朝顔形。赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T５	3	墳丘	口径：55.4	三角形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①上部ハケ・下部ナデ②外反角頭状③—	口縁部1/5	朝顔形。赤彩。内外面口縁部横ナデ。突帯裏面横ナデ。４と同一か。
T５	4	墳丘	—	三角形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①上部ハケ・下部ナデ②外反角頭状③—	口縁部破片	朝顔形。赤彩。内外面口縁部横ナデ。突帯裏面横ナデ。。３と同一か。
T５	5	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	3	普通	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	朝顔形。赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T５	6	墳丘	—	不明	—	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ハケ②—③—	口縁部破片	朝顔形。赤彩。
T５	7	墳丘	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	口縁部破片	朝顔形。突帯接合部外面に斜位の刻み。突帯裏面横ナデ。
T５	8	墳丘	底径：17.8	三角形 台形	円形 半円形	赤色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	4	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③○	頸部～底部3/4	朝顔形。赤彩。肩部に斜格子状の線刻。
T５	9	墳丘	—	三角形・台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	8	浅い	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	頸部～肩部破片	朝顔形。赤彩。突帯裏面横ナデ。
T５	10	墳丘	—	三角形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	7	浅い	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	頸部破片	朝顔形。赤彩。肩部に斜位の線刻。
T５	11	墳丘	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	肩部破片	朝顔形。赤彩。12・13と同一。
T５	12	墳丘	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	肩部破片	朝顔形。赤彩。11・13と同一。
T５	13	墳丘	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	肩部破片	朝顔形。赤彩。11・12と同一。
T５	14	墳丘	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	肩部破片	朝顔形。赤彩。肩部に横ハケ。15・16と同一。
T５	15	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①上部ナデ・下部ハケ②—③—	肩部破片	朝顔形。赤彩。頸部付近横ハケ。14・16と同一。
T５	16	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	朝顔形。赤彩。横ハケ。14・15と同一。
T５	17	墳丘	—	—	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。縦ハケ後横ハケ。

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T5	18	墳丘	口径：32.8 底径：19.8 器高：54.5	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	8 3	浅い 普通	①上部ハケ・下部ナデ②外反隅丸形③—	口縁部～底部1/2	赤彩。口縁部外面にハケメによる再調整。突帯裏面横ナデ。
T5	19	墳丘	口径：33.6	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反角頭状③—	口縁部～胴部下半1/3	３条突帯。赤彩。
T5	20	墳丘	口径：28.2	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	9	浅い	①ハケ②外反隅丸形③—	口縁部4/5	赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T5	21	墳丘	口径：31.4	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	2	浅い	①ナデ②外反角頭状③—	口縁部1/4	赤彩。内外面口縁部横ナデ。22と同一。
T5	22	墳丘	口径：31.4	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	2	浅い	①ナデ②外反角頭状③—	口縁部1/4	赤彩。内外面口縁部横ナデ。内面横位の線刻。21と同一。
T5	23	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	6	普通	①ハケメ②外反隅丸形③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T5	24	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。25と同一。
T5	25	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ハケ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。24と同一。
T5	26	墳丘	—	—	—	白色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T5	27	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反角頭状③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T5	28	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。内面斜位の線刻。
T5	29	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②外反丸頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。口縁部中位に横位の線刻。
T5	30	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。内面斜位の線刻。
T5	31	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	3	普通	①ナデ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T5	32	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	8	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	口縁部破片	
T5	33	墳丘	—	台形	半円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	口縁部破片	赤彩。内面斜位の線刻。34と同一。
T5	34	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。33と同一。

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T 5	35	墳丘	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	口縁部破片	赤彩。
T 5	36	墳丘	—	低台形	半円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	7	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。
T 5	37	墳丘	—	台形	半円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。内面斜位の線刻。突帯裏面横ナデ
T 5	38	墳丘	—	台形	半円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T 5	39	墳丘	—	台形	—	白色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	不良	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	40	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。
T 5	41	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	不良	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T 5	42	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T 5	43	墳丘	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ
T 5	44	墳丘	—	低台形	半円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	45	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	46	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	47	墳丘	—	台形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	48	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	49	墳丘	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面に工具による連続押圧痕。
T 5	50	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T 5	51	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T 5	52	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T 5	53	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	上位突帯に布状の圧痕。54と同一。
T 5	54	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	53と同一。
T 5	55	墳丘	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	2	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	56	墳丘	—	台形	—	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。還元焔焼成。
T 5	57	墳丘	—	低台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	不良	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 5	58	墳丘	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	9	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。外面斜格子状の線刻。
T 5	59	墳丘	底径：21.0	不明	—	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	不良	6	浅い	①ナデ②—③○	底部1/4	
T 5	60	墳丘	底径：20.4	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	2	浅い	①ナデ②—③×	底部1/3	
T 5	61	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③○	底部破片	
T 5	62	墳丘	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③○	底部破片	突帯裏面横ナデ。
T 5	63	墳丘	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③×	底部破片	
T 5	64	墳丘	—	—	—	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③○	底部破片	
T 6	1	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ハケ②—③—	口縁部破片	朝顔形。赤彩。
T 6	2	周堀	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	9	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	頸部破片	朝顔形。
T 6	3	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	不良	4	普通	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T 6	4	周堀	—	—	小円形	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②外反角頭③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T6	5	周堀	—	—	—	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	4	普通	①ハケ②外反角頭状③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。還元焔焼成。
T6	6	周堀	—	—	小円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	2	浅い	①ナデ②外反角頭③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T6	7	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	2	浅い	①ハケ②外反隅丸形③—	口縁部破片	赤彩。内外面口縁部横ナデ。
T6	8	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	外面横ハケ。
T6	9	周堀	—	台形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	普通	①ハケ②—③—	胴部破片	赤彩。
T6	10	周堀	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	5	浅い	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。突帯裏面横ナデ。
T6	11	周堀	—	台形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T6	12	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T6	13	周堀	—	高台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ハケ後ナデ②—③—	胴部破片	
T6	14	周堀	—	高台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	15	周堀	—	—	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	2	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	16	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	5	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	17	周堀	—	低台形	円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	18	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	19	周堀	—	台形	円形指向	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。還元焔焼成。
T6	20	周堀	—	台形	円形指向	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	4	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	還元焔焼成。
T6	21	周堀	—	台形	—	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	5	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	還元焔焼成。

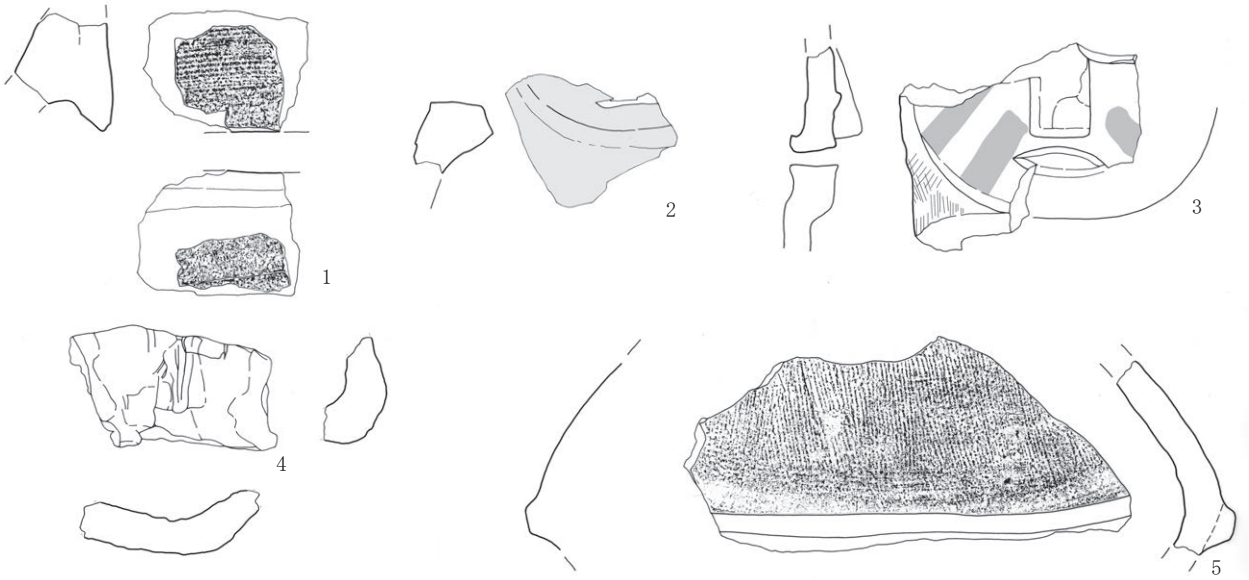
出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T6	22	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	23	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	24	周堀	底径：15.8	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③×	底部1/3	
T6	25	周堀	底径：21.4	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③○	底部1/3	
T6	26	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③×	底部破片	
T6	27	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③×	底部破片	
T6	28	周堀	—	台形	—	灰色	白色粒・黒色粒・小礫	良好	4	普通	①ナデ②—③○	底部破片	
T6	29	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	3	浅い	①ナデ②—③×	底部破片	
T6	30	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	3	浅い	①ナデ②—③○	底部破片	
T6	31	井戸	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T6	32	井戸	底径：17.2	台形	円形指向	赤色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③○	底部1/3	
T6	33	井戸	底径：23.4	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③○	底部1/3	
T6	34	井戸	—	台形	円形	赤色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③○	底部破片	
T6	35	井戸	—	台形	—	橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	3	普通	①ナデ②—③×	底部破片	
T6	36	井戸	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	7	浅い	①ナデ②—③×	底部破片	
T7	1	周堀	—	—	—	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ハケ後部分的ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	朝顔形。内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T7	2	周堀	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①上部ハケ・下部ナデ②—③—	口縁部破片	朝顔形。赤彩。

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T7	3	周堀	—	三角形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	8	普通	①ナデ②—③—	頸部破片	朝顔形。赤彩。
T7	4	周堀	口径：34.8	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	不良	4	普通	①上部ハケ・下部ナデ②外反隅丸形③—	口縁部1/3	内外面口縁部横ナデ。
T7	5	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	普通	①ハケ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T7	6	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。赤彩。
T7	7	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	8	普通	①ナデ②外屈隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T7	8	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②外反隅丸形③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。内面に斜位２条の線刻。
T7	9	周堀	—	—	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	3	普通	①ナデ②外反角頭③—	口縁部破片	内外面口縁部横ナデ。
T7	10	周堀	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T7	11	周堀	—	—	円形指向	赤色	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	外面横ハケ。
T7	12	周堀	—	台形	半円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T7	13	周堀	—	台形	小円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ハケ後部分的にナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T7	14	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T7	15	周堀	—	台形	半円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T7	16	周堀	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T7	17	周堀	—	台形	円形指向	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	6	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T7	18	周堀	—	台形	円形指向	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T7	19	周堀	—	台形	半円形	橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	

出土T	報告No.	出土位置	法量(cm)	突帯形状	透孔	色調	胎土	焼成	刷毛		成形・整形の特徴	残存率	備考
									本/cm	深さ	①内面整形②口唇部成形③底部調整		
T 7	20	周堀	—	台形	円形	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	3	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T 7	21	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	不良	5	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	赤彩。
T 7	22	周堀	—	台形	円形	にぶい黄褐色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	3	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 7	23	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 7	24	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	5	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 7	25	周堀	—	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	3	普通	①ナデ②—③—	胴部破片	突帯裏面横ナデ。
T 7	26	周堀	—	低台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・雲母・小礫	普通	5	浅い	①ナデ②—③—	胴部破片	
T 7	27	周堀	底径：29.2	台形	—	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	7	普通	①ナデ②—③×	底部1/3	
T 7	28	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・石英・小礫	普通	4	浅い	①ナデ②—③×	底部破片	
T 7	29	周堀	—	台形	円形指向	黄橙色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	6	浅い	①ナデ②—③○	底部破片	突帯裏面横ナデ。
T 7	30	周堀	—	台形	—	白色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	3	浅い	①ナデ②—③○	底部破片	
T 7	31	周堀	—	—	—	赤色	白色粒・黒色粒・小礫	普通	4	普通	①ナデ②—③○	底部破片	

⑵　形象埴輪

上述のとおり、今回の調査では２点の形象埴輪が出土している。１は後円部北側の周堀から出土した形象埴輪片で、器種は不明である。断面はＹ字状を呈し、一方向のみ端部が残る。３面のうち２面にハケが残る。２は後円部南側の周堀から出土した人物埴輪の顔面部破片である。下唇から下顎部にかけて残り、全面が赤彩される。３～５は後円部南側表採資料で、３は人物埴輪の顔面部である。眼孔部から下顎部が残り、下顎部には鼻から顎にかけて左右それぞれ２条の赤彩による刺青の表現が確認される。４は人物埴輪の上腕部の一部とみられる。５は人物埴輪の裳裾部の下端とみられ、全体的にハケが残る。人物埴輪はいずれも手慣れた作風との印象を受ける。



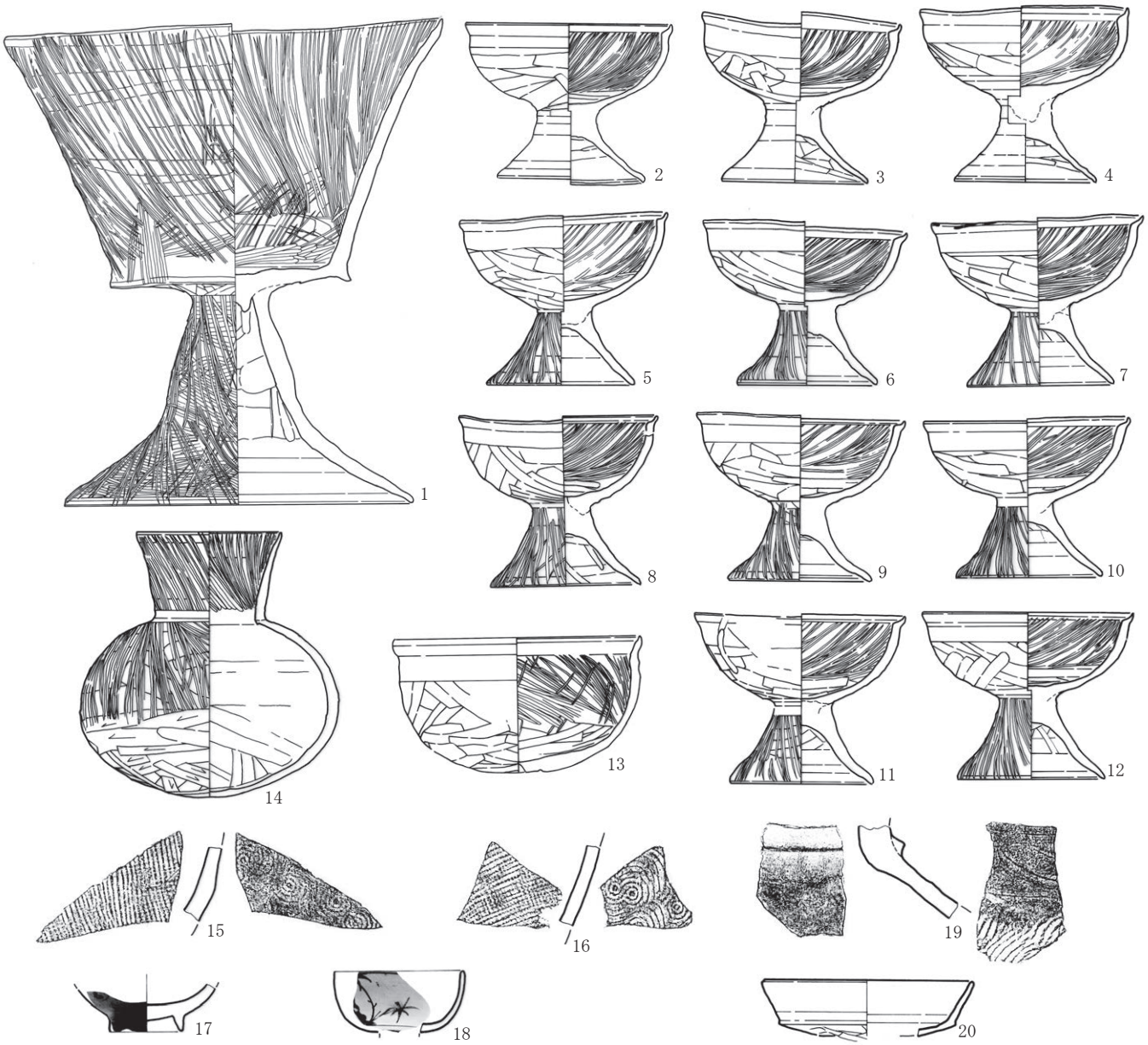
第40図　形象埴輪（S=１/３）

２　土器・陶磁器

１～14は第２トレンチの祭祀跡から出土した土師器で、14個体ほどの土器が出土している。大型高坏と直口壺は第３段葺石寄りの南側から出土し、その北側で高坏と埦がまとまって出土している。出土土器はいずれも精選された胎土で丁寧なつくりである。器種構成は、14点のうち12点が高坏と主体を占める。高坏は、大型のものが１点、坏に脚部を付けたものが11点ある。大型高坏は、「ハ」字状に広く開いた裾部から脚部中位ですぼまり、内傾しながら接合部へと至る。坏部は底面端部が突帯状に張り出し、体部はバケツ状に直線的に開く。坏部の内外面および脚部外面には、放射状のヘラミガキを施す。これ以外は、内斜口縁坏に脚部を取り付けた高坏である。脚部は「ハ」字状に短く開き、坏部は丸底状の底部から丸みをもって立ち上がる。口縁部は短く外反し、口縁部上面は受け口状を呈す。坏部内面には放射状のヘラミガキを施すが、脚部外面にヘラミガキを施すもの（５～12）と、施さないもの（２～４）がある。13は埦で、深い丸底状の底部から丸みをもって立ち上がる。口縁部は短く外反するが、あまり広く開かない。14は直口壺で、中位に最大径を持つ球状の胴部から、やや外反しつつ開く。口縁部および胴部上半にはミガキを施す。

15～20は本古墳築造以降の遺物である。15・16・19は須恵器の甕の破片である。同一個体とみられる15・16は後円部北側の周堀から出土し、外面は平行、内面は同心円形の叩きが残る。19は後円部南側の周堀から出土した甕の頸部で、突帯を巡らせ、胴部には外面平行、内面同心円形の叩きが残る。20は前方

部南側周堀から出土した坏で、覆土下層から出土している。17は磁器の底部で、後円部北側の周堀を切って東西方向に走る溝の上層から出土している。外面には山水絵の染付が施される。18は前方部西側の墳裾から出土した磁器で、崩落した葺石を集めた場所からの出土である。



第41図　土器・陶磁器（S＝1/4）

土器陶磁器観察表

No.	出土T	出土位置	種類	器種	法量（cm）	色調	焼成	胎　土	成形・整形の特徴	残存率	備　考
1	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：28.1 底径：21.5 器高：30.0	橙色	普通	白色粒・黒色粒・小礫	坏部内外面および脚部外面は丁寧なナデ後放射状のヘラミガキ。脚部内面上半はヘラナデ、下半は横ナデ。	完形	
2	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：12.8 底径：9.2 器高：10.0	橙色	普通	白色粒・黒色粒・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデ。	完形	口縁部外面にスス状の付着物。
3	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：12.4 底径：9.2 器高：10.6	橙色	普通	白色粒・黒色粒・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデ。	完形	口縁部～脚部内外面にスス状の付着物。
4	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：13.4 底径：8.8 器高：10.9	橙色	普通	白色粒・黒色粒・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデ。	完形	口縁部外面にスス状の付着物。
5	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：12.9 底径：9.2 器高：10.5	橙色	普通	白色粒・黒色粒・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	完形	口縁部内外面にスス状の付着物。
6	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：12.6 底径：8.8 器高：10.2	橙色	普通	白色粒・黒色粒・・石英・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	完形	脚部内面に工具の当たった痕。
7	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：13.1 底径：9.1 器高：10.5	橙色	普通	白色粒・黒色粒・石英・雲母・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	完形	口縁部～脚部内外面にスス状の付着物。
8	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：12.8 底径：9.3 器高：10.4	橙色	普通	白色粒・黒色粒・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	完形	坏部内外面にスス状の付着物。
9	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：13.0 底径：9.0 器高：10.4	橙色	普通	白色粒・黒色粒・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	完形	口縁部～脚部内外面にスス状の付着物。
10	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：12.8 底径：9.1 器高：9.9	橙色	普通	白色粒・黒色粒・・石英・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	完形	口縁部～脚部内外面にスス状の付着物。
11	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：13.2 底径：9.0 器高：10.5	橙色	普通	白色粒・黒色粒・・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	完形	坏部内外面にスス状の付着物。
12	T２	祭祀跡	土師器	高坏	口径：13.1 底径：9.2 器高：10.4	橙色	普通	白色粒・黒色粒・・石英・小礫	坏部内面はナデ後放射状のヘラミガキ。坏部外面上半は横ナデ、下半はヘラケズリ。脚部内外面は横ナデを施し、外面には放射状のヘラミガキ。	坏部・脚部3/4	坏部内外面にスス状の付着物。
13	T２	祭祀跡	土師器	埦	口径：15.4 器高：8.3	橙色	普通	白色粒・黒色粒・・小礫	口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラケズリ、体部内面は放射状のヘラミガキ。	口縁部～底部3/4	内外面にスス状の付着物。
14	T２	祭祀跡	土師器	壺	口径：9.0 器高：16.5	橙色	普通	白色粒・黒色粒・・小礫	口縁部内外面・体部上半は丁寧なナデ後ヘラミガキ、体部下半～底部はヘラケズリ。	完形	
15	T１	周堀	須恵器	甕	—	灰色	良好	白色粒・黒色粒・砂粒	外面平行、内面同心円形叩き。	胴部破片	２と同一か。
16	T１	周堀	須恵器	甕	—	灰色	良好	白色粒・黒色粒・砂粒	外面平行、内面同心円形叩き。	胴部破片	１と同一か。
17	T１	溝	磁器	碗	底径：4.6	灰白色	良好	—	山水絵の染付。	底部破片	周堀を切る溝から出土
18	T３	墳裾	磁器	碗	口径：8.0	灰白色	良好	—	山水絵の染付。	口縁部1/4	
19	T６	周堀	須恵器	甕	—	灰色	良好	白色粒・黒色粒・砂粒	頸部には断面三角形の突帯が巡る。胴部外面平行、内面同心円形叩き。	頸部破片	
20	T７	周堀	土師器	坏	口径：13.0	橙色	普通	白色粒・黒色粒・砂粒	口縁部内外面は横ナデ。体部下半はヘラケズリ。	口縁部1/5	

第３章　自然科学分析

平成29年度総社古墳群範囲内容確認調査テフラ分析業務報告書

（株）火山灰考古学研究所

１．はじめに

関東地方北西部に位置する前橋市とその周辺には、赤城、榛名、浅間など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中国地方や九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的特徴がテフラ・カタログ（町田・新井，1992，2003，2011など）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行ってテフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

総社古墳群の遠見山古墳の発掘調査では、古墳の内堀の覆土中に複数のテフラ層を認めることができた。そこで、地質調査を実施して土層の層序やテフラ層の層相の記載を行うとともに、高純度で分析用試料を採取し、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定）を行って、すでに年代が明らかにされている指標テフラとの同定を行うことになった。

２．調査地点の土層層序

調査分析の対象となった第１トレンチ東壁における内堀の覆土は、下位より、暗灰色泥層（層厚３㎝）、凝灰質灰色砂層（層厚11㎝）、黒灰褐色泥層（層厚0.4㎝）、成層したテフラ層（層厚12.2㎝）、黒泥層（層厚３㎝）、黄色細粒火山灰層（層厚1.7㎝）、黒泥層（層厚７㎝）、灰褐色泥層（層厚６㎝）、暗灰褐色砂質泥層（層厚15㎝）、褐色土ブロックを多く含む灰褐色砂質泥層（層厚18㎝）、黄灰色泥層（層厚14㎝）、黒泥層（層厚８㎝）、成層したテフラ層、暗灰褐色土（層厚0.3㎝）、青灰色砂質火山灰層（層厚１㎝）、砂混じり黒色土（層厚21㎝）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚50㎝）、褐色土ブロックに富む灰白色軽石混じり灰褐色土（層厚28㎝，軽石の最大径５㎜）、褐色土ブロック混じり灰色土（層厚９㎝）、灰色土（層厚25㎝）、盛土（層厚45㎝）からなる。

このうち、下位のテフラ層は、下位より桃褐色細粒火山灰層（層厚２㎝）、白色軽石混じりでかすかに成層した黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚６㎝，軽石の最大径13㎜）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.2㎝）、砂混じり灰色細粒火山灰層（層厚２㎝）からなる。一方、上位のテフラ層は、下部の灰褐色粗粒火山灰層（層厚11㎝）と上部の桃色細粒火山灰層からなる。

３．テフラ検出分析

⑴　分析試料と分析方法

第１トレンチ東壁の内堀覆土断面で認められた４層のテフラ層のうち、古墳構築の年代にもっとも関係する最下位の成層したテフラ層の由来を明らかにするために、主体部（白色軽石混じりでかすかに成層した黄灰色砂質細粒火山灰層）から採取した試料５を対象に、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析を行った。テフラ検出分析の方法は次のとおりである。

１）分析対象の試料から８ｇを秤量。
２）超音波洗浄装置により泥分を除去。
３）恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
４）実体顕微鏡下で観察。

⑵　分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。試料５には、スポンジ状に細かく発泡した白色軽石（最大径4.5㎜）が少量、またその細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラスが多く認められる。また、火山ガラスには、灰白色を呈するものも少し含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物には、角閃石や斜方輝石が認められる。

４．屈折率測定（火山ガラス）

⑴　測定試料と測定方法

次に、指標テフラとの同定精度を向上させることを目的として、試料５に含まれる火山ガラスの屈折率測定を行った。屈折率測定は、温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）による。屈折率測定の対象は、軽石粒子を粉砕後に、分析篩による篩別により得られた１/８-１/16㎜区画粒子のうちの火山ガラスである。

⑵　測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。この表には、関東地方北西部に分布している後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。試料５に含まれる火山ガラス（33粒子）の屈折率（ｎ）は、1.500-1.504である。

５．考　　察

テフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定の対象となった試料５が採取されたテフラ層は、層相、軽石や火山ガラスの岩相、火山ガラスの屈折率特性、さらに重鉱物の組み合わせなどから、６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992，2003）に同定される。このことから、遠見山古墳の層位は、Hr-FA より下位にあると考えられる。

その上位の黄色細粒火山灰層は、層位や層相から、６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992，2003）の最上部の火山灰層（Soda，1996）に同定される。

また、上位の成層したテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。さらに、そのすぐ上位の青灰色砂質細粒火山灰層は、層相から1128（大治３）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ（As-Kk，早田，1991，1996，2004）に同定される。

なお、今回の発掘調査では、Hr-FP と As-B の間に、褐色土ブロックを多く含む灰褐色砂質泥層を認めることができた。この堆積物に関しては、その層位から818（弘仁９）年地震（能登ほか，1991）に伴う墳丘部などの崩壊や地すべりに由来する可能性が指摘されよう。

６．ま と め

前橋市遠見山古墳において、地質調査とテフラ分析（テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定）を実施した。その結果、内堀の堆積物中に、下位より榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭）、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP，６世紀中葉）、浅間Ｂテフラ（As-B, 1108年）、浅間粕川テフラ（As-Kk, 1128年）の一次堆積層などを認めることができた。このことから、遠見山古墳の層位は、Hr-FA より下位にあると考えられる。

文　　献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11,p.254-269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53,p.41-52.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２」，東京大学出版会，p.138-149.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，

no.14，p.1-45.
壇原　徹（1993）温度変化型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法２」，p.149-158.
町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」．東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」．東京大学出版会，336p.
町田　洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第２刷）」．東京大学出版会，336p.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井　神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27,p.297-312.
早田　勉（1991）浅間火山の生い立ち．佐久考古通信，no.53，p.2-7.
早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，p.256-267.
早田　勉（2004）火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史－とくに平安時代の噴火について－．かみつけの里博物館編「1108－浅間火山－中世への胎動」，ｐ．45-56.
早田　勉（2014）渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析．渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」，p.197-211.
早田　勉（2016）浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group）の層序と前橋泥流堆積物の層位．岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会編「ナイフ形石器文化の発達期と変革期－浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」，p.6-14.
Soda,T.（1996）Explosive activities of Haruna Volcano and their impacts on human life in the ６th century A.D. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ.，no.31, p.37-52.

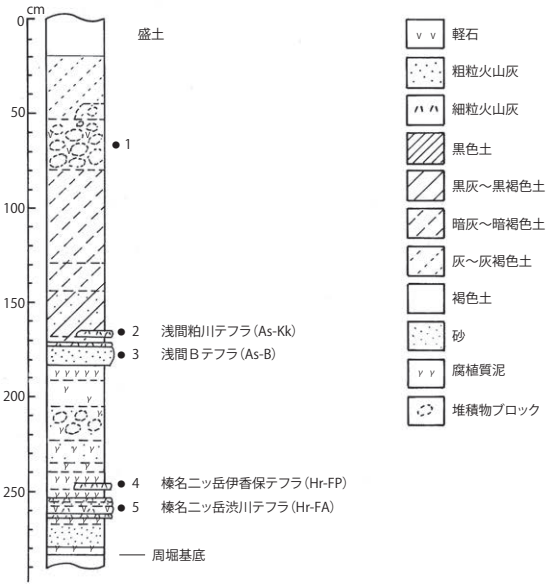


図１　第１トレンチ東壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位．数字：テフラ分析の試料番号．

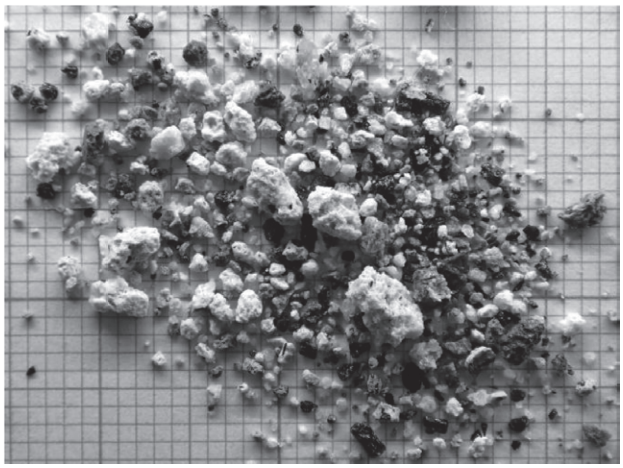


写真１　第１トレンチ東壁・試料５（落射光下）
最大径５mm 程度の白色軽石が含まれている。
背景は 1mm メッシュ．

表1　遠見山古墳におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
		量	色調	最大径	量	形態	色調	（不透明鉱物以外）
第1トレンチ東壁	5	*	白	4.5mm	***	pm（sp）	白＞灰白	am>opx

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*：少ない，（*）：非常に少ない．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．
opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石．

表2　屈折率測定結果

地点・テフラ		火山ガラス		文献
		屈折率（n）	測定数	
遠見山古墳・第1トレンチ東壁・試料1		1.500−1.504	33	本報告
関東平野北西部の後期更新世後半以降の代表的指標テフラ				
浅間A（As−A，1783年）		1.507−1.512		1）
浅間粕川（As−Kk，1108年）		未詳		2）
浅間B（As−B，1108年）		1.524−1.532		1）
榛名二ツ岳伊香保（Hr−FP，6世紀中葉）		1.501−1.504		1）
榛名二ツ岳渋川（Hr−FA，6世紀初頭）		1.500−1.502		1）
		1.498−1.505		3）
浅間C（As−C，3世紀後半）		1.514−1.520		1）
浅間D軽石（As−D，約4,500年前*1）		1.513−1.516		1）
鬼界アカホヤ（K−Ah，約7,300年前）		1.506−1.513		1）
浅間藤岡軽石（As−Fo，約8,200年前*1）		1.508−1.516		2），4）
浅間総社（As−Sj，約1.0～1.1万年前*1）		1.501−1.518		4）
浅間板鼻黄色（As−YP，約1.5～1.65万年前）		1.501−1.505		1）
浅間大窪沢2（As−Ok2，約2万年前）		1.502−1.504		1）
浅間大窪沢1（As−Ok1，約2万年前）		1.500−1.502		1）
浅間板鼻褐色（群）（As−BP Group，約2.4～2.9万年前）	上部：	1.515−1.520		1）
	中部：	1.508−1.511		1）
	下部：	1.505−1.515		1）
姶良Tn（AT，約3万年前）		1.499−1.500		1）
榛名箱田（Hr−HA，約3万年前*1）		未詳		2）
赤城鹿沼（Ag−KP，約4.5万年前以前）		1.504−1.508		1）
榛名八崎（Hr−HP，約5万年前）		1.505−1.508		1）
大山倉吉（DKP，約5.5万年前以前）		1.508−1.514		1）

*1：放射性炭素（^{14}C）年代．1）町田・新井（1992，2003，2011），2）早田（1996），3）早田（2014），4）早田（未公表）．
本報告・3）・5）温度変化型屈折率法（壇原，1993）．1）・2）・4）温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）．

第４章　成果と課題

第１節　墳丘形状および兆域の推定

今回の調査では、古墳の周囲や墳丘にトレンチを設定して調査を実施した。これまで、古墳の周辺での部分的な調査にとどまっていたが、今回の調査によって墳丘形状や兆域を推定するための情報を得ることができた。本項では、これまでの調査成果を含めて整理し、今後の適切な史跡保護の一助としたい。

１　基壇基底部について

Ｔ１、Ｔ６、Ｔ１～３（Ｈ３）、Ｔ１・２（Ｈ６）にて、後円部南北の周堀が検出されている。また、Ｔ２～４、Ｔ７、Ｔ４～７（Ｈ３）、Ｔ３～７（Ｈ６）にて前方部南北および西側の周堀が検出されている。

後円部基壇の基底部はＴ６で確認されている。また、Ｔ１は近世以降の溝に切られて基底部は確認できないが、この溝との境界付近の土層断面で上方に立ち上がっている様子が確認されていることから、この付近に基底部が想定される。これら以外のトレンチはプラン確認のみのため判然としないが、墳丘・周堀境の周堀側に基底部を持つことが推定される。Ｔ１（想定）およびＴ６の基底部を結び、Ｔ１・２（Ｈ３）やＴ２（Ｈ６）の周堀側をめぐる位置の円を基底部ラインと想定した。

前方部では、Ｔ２・３・７、Ｔ４（Ｈ３）で基底部が確認されている。また、Ｔ４、Ｔ７（Ｈ３）で周堀境が検出されており、その外側に基底部が来ると見られる。前方部南側はＴ７からＴ４（Ｈ３）を経て、墳丘コーナーのＴ７（Ｈ３）を結んだ位置を基底部のラインと想定した。また前方部西側はＴ３で基底部が確認されており、前方部南北のコーナーであるＴ４およびＴ７（Ｈ３）の外側を結んだ位置を基底部ラインとした。ただ、Ｔ２では、前方部南側の基底部ラインを想定中軸線で北側に折り返したラインよりも北側で基底部が検出されていて不整合である。

基壇斜面の傾斜角は、Ｔ２が23度、Ｔ４（Ｈ３）が25度、Ｔ３・Ｔ６・Ｔ７では30度強と、ばらつきが見られる。

２　周堀の外縁について

周堀外側の立ち上がりがは、Ｔ３、Ｔ５・８・９（Ｈ３）、Ｔ１・３・５・６（Ｈ６）にて確認できた。古墳南側はＴ４・５・８・９（Ｈ３）、北側はＴ１・３・５・６（Ｈ６）をそれぞれ結んだラインを想定し、西側はＴ３を通って南北の立ち上がりを結んだラインを想定した。Ｔ７はトレンチ南端でも周堀覆土が堆積しており、立ち上がりはさらに南側となる。また、Ｔ１・Ｔ２・Ｔ６は、調査時は周堀外縁と捉えていたが、他のトレンチとの比較から、トレンチ端部は周堀内にあるものと考えられる。古墳築造時の地表面は、３世紀末に噴出した As-C 軽石の上面に堆積した黒色土であったと想定される。ただ、この黒色土が確認できたのは墳丘盛土の下層の一部のみであり、今回調査を行った墳丘裾から周堀外縁にかけては、すでに大きく削平されており、黒色土層よりも下位の総社砂層が確認できる面を遺構確認面とした。このため、後世の削平深度が深い場所では、築造当初の立ち上がり位置よりも内側の位置を想定している可能性がある。

３　基壇テラス面について

Ｔ２およびＴ５で基壇テラス（墳丘第一段上面）を検出しているが、墳丘の裾が削平を受けているため、テラスの縁辺はいずれのトレンチでも確認できていない。Ｔ２の基壇テラス面は、北側で削平を受けているものの第２段葺石直下の位置で、As-C 軽石を含む黒色土の上面に墳丘盛土がなされている状況が確認されている。地山上面に構築された盛土であること、また築造に伴って施された葺石の直下に当たることから、この面は築造当時

のテラス面として差し支えないものと考える。この面の標高は125.6m付近であり、基壇斜面の上端部と近似した標高と想定した。基壇テラスの縁辺の位置は、基壇斜面の傾斜角度を延長し、推定テラス面の標高と接する場所を基壇斜面の上端と想定した。ただし、Ｔ２やＴ５ではテラス面が北に向かって若干傾斜している様子が確認されており、縁辺の位置がややずれる可能性がある。

４　基壇テラス上端部について

Ｔ２で検出された第３段葺石の根石レベルと、Ｔ５のくびれ部前方部側葺石の根石レベルは、ともに標高127.0m付近であり、同一面として施工されたものと考えられる。両トレンチの根石を結んだラインは、古墳の築造当時の状態をとどめているとみられ、古墳の形状復元の基準線とした。この葺石の立ち上がり上端が墳頂部と考えられるが、墳頂部は削平が進んでいて、今回の調査では築造当時の墳頂部の様相を把握するための手掛かりを得ることはできなかった。

５　前方部北側の構造について

上述のとおり、Ｔ２では基壇基底部の位置が、他のトレンチから想定される位置よりも外側にある。また、Ｔ２は基壇テラスの幅も広く、他の場所で基壇テラスの縁辺が想定される位置に低い葺石を施すなど、特殊な構造を持っている。このような構造を整合的に解釈するには、前方部北側に張り出しを設けていることを想定する必要がある。基壇斜面には基底部付近まで葺石が施されるなど丁寧なつくりとなっており、テラスの墳丘第二段寄りの場所では高坏を中心とした祭祀跡が置かれるなど、本古墳の中でも特殊な機能を持った場所と考えられる。これらのことから、前方部北側に造出部の設置が考えられる。そして、第２段葺石は造出部を区画するための特別な葺石の役割が想定されよう。まだ周囲を拡張した調査を行っていないため、あくまでも可能性の一つとして提示したい。

６　主体部について

後円部墳頂部で主体部の位置を把握するため、トレンチを設定して調査を行ったが、主体部の痕跡を確認することはできなかった。後円部の中央と想定したＴ８以外の、周辺の位置に主体部が置かれている可能性や、墳頂部がすでに大きく削平を受けて、主体部の痕跡まで消滅している可能性などが考えられる。今後トレンチを周囲に拡張した調査や、レーダー探査等が必要となろう。また、Ｔ２～Ｔ３の前方部墳頂部では、墳丘盛土に灰白色粘土を多用した箇所が確認された。水性堆積のローム質土を使用したものとみられるが、他のトレンチでは同様の粘土を盛土等に利用した場所は確認されておらずやや異質である。総社古墳群調査検討委員会の中では、主体部を覆うための粘土であった可能性も指摘されている。県内の同時期に築造された古墳には、前方部に埋葬施設を持つ事例は見当たらないが、今後前方部墳頂部でも地下レーダー探査等の追跡調査が必要であろう。

７　中堤・外堀について

今回の調査では、中堤や外堀といった周堀外側の施設を確認することはできなかった。ただ、平成３年度調査のＴ４・Ｔ５では、周堀南側で東西方向に走行する溝（第３号溝）が検出されている。溝覆土の下層にHr-FAの堆積があったとする観察所見が得られており、周堀内でHr-FAが堆積する本古墳と非常に近い時期の所産である。もし、この溝が本古墳に伴うものと考えた場合、古墳の外堀に当たり、周堀と第３号溝の間の平坦面は中堤に当たる可能性がある。もしもこの想定が正しければ、周堀として調査を行ってきた場所は内堀に当たる。現在この場所でのみ確認されているため、今後周辺の調査を継続して中堤や外堀の確認が必要である。

8　墳丘盛土の構築方法について

Ｔ３では、葺石の有無や墳丘の構築状況を確認するため、墳丘の断ち割り調査を行った。墳丘盛土はかく乱を受けておらず、築造当初の盛土と確認された。墳丘の構築は、当時の地表面と考えられる As-C 軽石を含む黒色土層上ではなく、総社砂層上面の漸移層相当の層位上面に構築されており、黒色土層は墳丘構築の整地作業の中で削平されているとみられる。

墳丘の構築は、まず前方部西側に盛土を土手状に積み上げ、その後内側（東側）に粘性の少ない砂質土を充填している。これは崩れやすい砂質土を盛土として構築するための工法であったとみられる。また、土手状の盛土も３～４段ほどに分けて積み上げ、黄褐色土、黒色土、暗褐色土を互層に積み上げる様子が確認された。西側が大きく削られているため判然としないが、断面三角形または半円形に積み上げたものと考えられる。

このような墳丘構築手法は、築造時期は異なるものの、伊勢崎市阿弥陀古墳（伊勢崎市教育委員会2010）にも見られるものであり、いわゆる「西日本的工法」（青木2009ほか）に類似する。本古墳で確認されたのは前方部の一部での確認にとどまるが、墳丘の構築を知ることができる事例が得られたことは重要である。

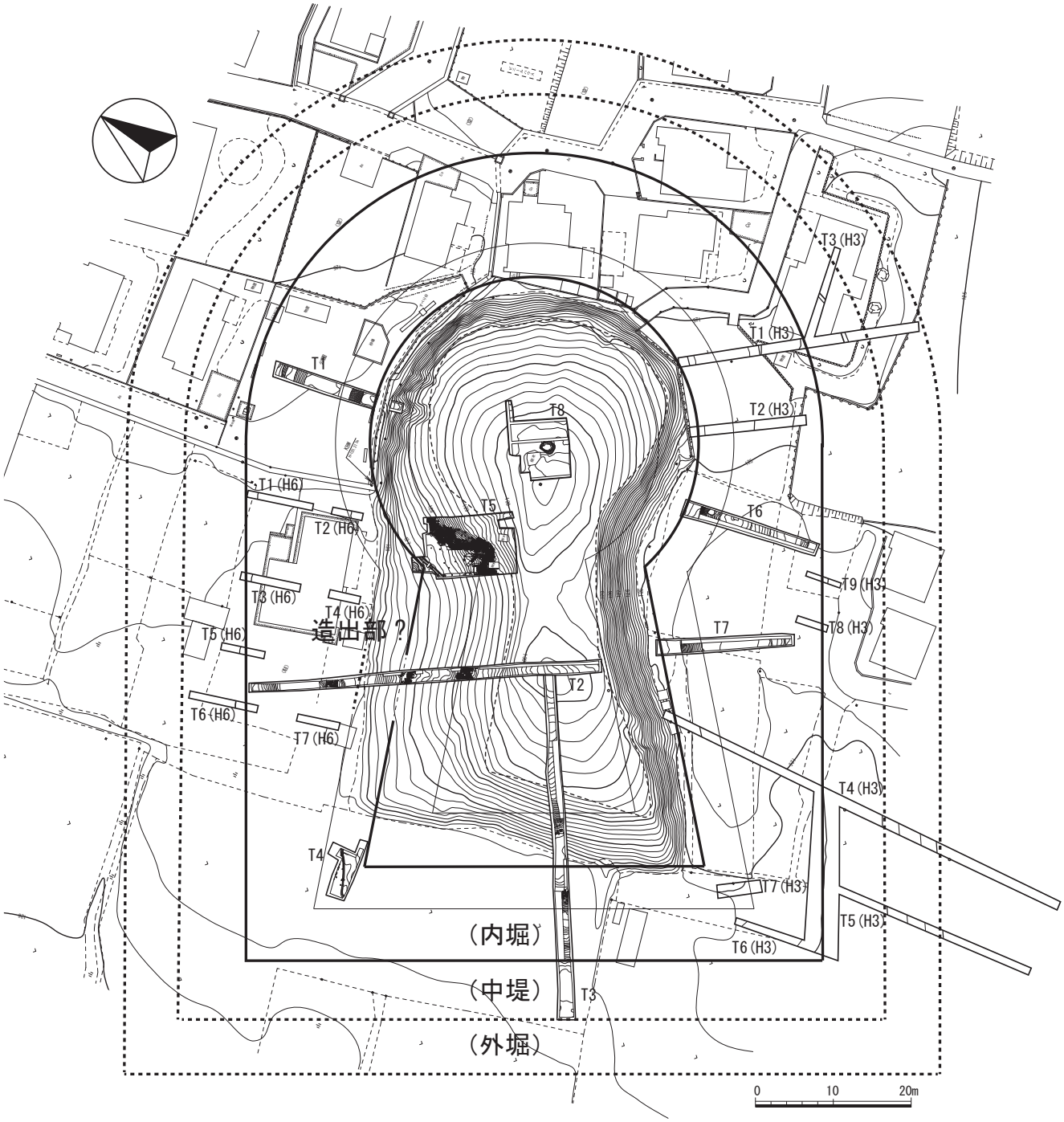
9　古墳の築造年代について

周堀の確認を目的として設定したトレンチの多くから、堀底面付近の層位で Hr-FA の堆積が確認された。自然科学分析による調査でも Hr-FA と同定され、古墳の築造年代を特定するための良好なデータを得ることができた。Hr-FA は、底面付近の黒色土の上面で検出されており、Hr-FA 堆積以前に古墳が築造されたことが確認された。火山灰の堆積状況と併せ、後述する円筒埴輪や出土土器の特徴、手慣れた作風の人物埴輪の存在などを勘案すると、５世紀第４四半期を中心とした時期の築造が考えられる。

10　ま と め

上記の検討から想定される墳丘規模としては、いずれも基壇基底部を起点として、墳丘長87.5m、後円部径52.5m、前方部幅58.0mを測る。また、内堀外端までの兆域主軸長106m、外堀が存在すると仮定した兆域主軸長は136mとなる。

本報告で提示した墳丘や兆域の規模、墳丘の形状や構造は、これまでの調査データをもとに推定したものであり、南側くびれ部やコーナー部などを中心とした調査や、造出部が想定される前方部北側、これまで調査を実施していない後円部東側の調査や中堤・外堀の確認など継続して行う必要がある。また、主体部の確認調査も必要となろう。ただ、今回の調査で大まかな古墳の範囲や墳丘形状は示すことができたと考える。今後継続して調査を進める中で、より正確な規模や形状の把握に努めたい。



第42図　遠見山古墳範囲推定図

第２節　遠見山古墳の葺石の石材組成について

遠見山古墳の調査では、基壇斜面や墳丘斜面で、遺存状態が良好な葺石を検出することができた。また、墳丘の崩落に伴う川原石が、埴輪片とともに大量に出土した。これらの礫は他所から持ち込まれたものであり、大規模な労働力を投入した結果もたらされたものである。今回の調査に伴って、基壇や墳丘に葺かれた葺石の石材組成調査を行った。石材鑑定は、本市教育委員会文化財保護課の阿久澤智和氏による。なお、史跡保護の観点から、石材の重量データは調査していない。また、礫の形状等の調査は行っていないが、亜円礫を主体としている。

石材鑑定は、第２トレンチ第２段葺石、第２トレンチ第３段葺石、第５トレンチくびれ部葺石、第６トレンチ基壇斜面葺石を対象とし、総点数は1,437個である。

鑑定の結果、石材組成は、安山岩が主体を占め、砂岩や閃緑岩、ひん岩などが組成し、礫岩や頁岩、蛇紋岩などが混じっていた。この組成傾向は、すべてのトレンチを通じて認めることができた。数量の多少や、少量含む石材の組成などにはばらつきが認められるが、調査個所の面積や葺石の遺存状態にも左右されると考えられ、概ね古墳全体でも同様な石材組成を持つものと推定される。このため、葺石の施工箇所による採集地の選択や石材の選択が行われたとは考えにくい。

続いて、異なる場所の石材組成との比較を行い、葺石石材の供給地を検討する。比較対象としたのは、群馬県立自然史博物館が実施した河川礫の調査成果である（三田・野村2008）。この調査では、利根川の９か所と、神流川の４か所から河川礫を採取し、形態や石材構成の分析を行っている。これらのうち、４か所の石材構成比較が報告されているが、今回は利根川の２か所（沼田市薄根町・前橋市岩神町）の石材組成データとの比較を行った。なお、報告では重量百分率での比較がなされているが、上述のとおり遠見山古墳では葺石の重量調査を行っていないため、報告書記載の石材をカウントして、数量比較を行った。

石材数量を比較すると、安山岩を主体とすることは３地点とも共通する。しかし、河川採取の２か所では凝灰岩が認められるものの、遠見山古墳では確認されていない。また、遠見山古墳では砂岩や閃緑岩、ひん岩の割合が高いものの、河川２か所では少量にとどまる。河川２か所の凝灰岩の数量を比較すると、上流部から下流部へとその数を減じており、河川の運搬作用の影響が想定される。ただ、河川での砂岩や閃緑岩、ひん岩の数量の少なさは判然としない。採集地点によるものだろうか。

しかしながら、安山岩を主体としながらも、礫岩や砂岩、頁岩といった堆積岩や、利根川水系上流部に岩体を持つ蛇紋岩が伴う組成は、利根川水系の組成と近似していると言える。仮に遠見山古墳の葺石石材を、榛名山水系の井野川や烏川からのみ石材を採取したとすれば、ほぼ安山岩のみが占めると考えられ、今回確認されたような石材組成を示すとは考えにくい。

これらのことから、現況河川から見た遠見山古墳の石材採集地は、その一つとして利根川を想定することができるだろう。古墳が築かれたころの利根川は広瀬川低地帯を流下していたと考えられ、直線距離にしても数 km にわたる石材の運搬が想定される。今後様々な河川での調査事例を増やすとともに、遠見山古墳の礫との重量や形状の比較調査を通して、古墳築造の実態に迫ることができると考えられる。

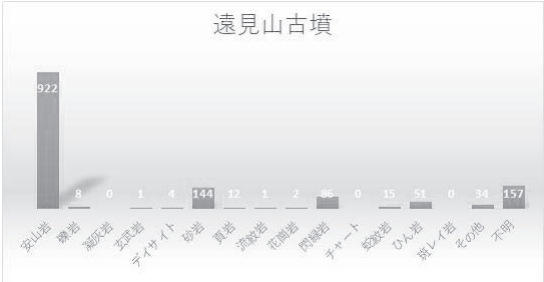
第１表　遠見山古墳の葺石の石材組成

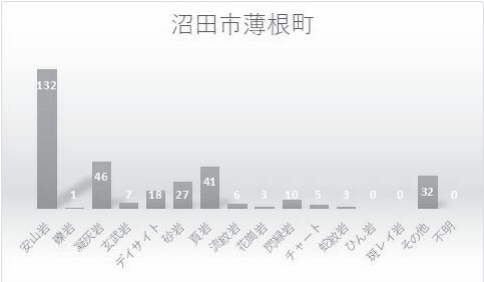
	安山岩	礫岩	凝灰岩	玄武岩	デイサイト	砂岩	頁岩	流紋岩	花崗岩	閃緑岩	チャート	蛇紋岩	ひん岩	斑レイ岩	その他	不明	合計
第2トレンチ第2段葺石	49	2	0	0	0	9	0	0	0	9	0	2	0	0	0	4	75
第2トレンチ第3段葺石	91	1	0	0	0	13	0	0	0	17	0	2	0	0	8	23	155
第5トレンチくびれ部	761	5	0	1	4	121	11	1	2	59	0	11	51	0	25	129	1181
第6トレンチ基壇斜面	21	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	26
遠見山古墳合計	922	8	0	1	4	144	12	1	2	86	0	15	51	0	34	157	1437

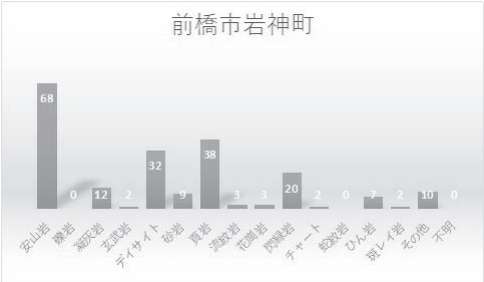
第２表　河川礫との石材組成の比較

（単位：個）

	安山岩	礫岩	凝灰岩	玄武岩	デイサイト	砂岩	頁岩	流紋岩	花崗岩	閃緑岩	チャート	蛇紋岩	ひん岩	斑レイ岩	その他	不明	合計
遠見山古墳	922	8	0	1	4	144	12	1	2	86	0	15	51	0	34	157	1437
沼田市薄根町	132	1	46	7	18	27	41	6	3	10	5	3	0	0	32	0	331
前橋市岩神町	68	0	12	2	32	9	38	3	3	20	2	0	7	2	10	0	208







第43図　石材組成の棒グラフ

図1　調査地概略図　1：みなかみ町大穴，2：みなかみ町真庭，3：沼田市薄根町，
4：渋川市赤城町津久田，5：渋川市中村，6：前橋市岩神町，
7：玉村町上福島，8：伊勢崎市長沼町，9：太田市徳川町，10：上野村楢原，
11：神流町生利，12：藤岡市鬼石町下三波川，13：藤岡市根岸

第44図　河川礫調査地点（三田・野村2008）

第 2 トレンチ第 2 段葺石

第 2 トレンチ第 3 段葺石

第 5 トレンチくびれ部葺石

第 6 トレンチ基壇立ち上がり葺石

第45図　遠見山古墳の葺石

第３節　出土遺物について

１　円筒埴輪

今回の調査では大量の円筒埴輪が出土した。周堀や基壇テラスでは墳丘から崩落した埴輪が出土し、第５トレンチでは埴輪列が検出され、埴輪樹立の様子を確認することができた。埴輪の観察からは、口端部や突帯の形状、整形工具などバラエティに富むことが判明した。ただ、底部から口縁部までの全形を知ることのできる個体はごくわずかであり、円筒埴輪全体の詳細な検討は難しい。本項では、第５トレンチ出土の遺存状態の良い資料を中心として、本古墳出土の円筒埴輪について簡単に触れたい。

まず普通円筒埴輪の条数で見ると、３条突帯と４条突帯の２種に大別することができる。①は突帯を３条持つ。底部から直線的に立ち上がり、口縁部付近で緩く外反して開く器形を呈する。口径32.8㎝、底径19.8㎝、器高54.5㎝を測る。突帯は断面台形を呈し、透かしは下部から数えて２段目と３段目に穿たれ、形状は円形である。各段には２個ずつ透かしを持つが、穿孔位置は段間で90度違え、第３段の透かしはやや大きい。口唇部形状は隅丸形を呈する。外面調整は縦ハケとし、４段目には赤彩を施す。内面は下部をナデ、上部をハケ調整とし、外面口縁部付近には内面調整に用いたハケによる再調整を行う。

②は突帯を４条持つ。底部から若干外傾しつつ立ち上がり、口縁部へと至る。口径31.5㎝、底径20.0㎝、器高52.5㎝を測る。突帯は断面台形を呈し、透かしは下から数えて２段目と４段目に穿つ。①と同様穿孔位置は段間で90度違える。透かしの形状は円形および半円形。口唇部形状は角頭状を呈する。外面調整は縦ハケとし、４段目と５段目には赤彩を施す。内面はナデのみで、輪積痕を明瞭に残し、口縁部付近には斜格子状の線刻を施す。５段目は、段の幅が他の段に比べて幅広い特徴がある。埴輪列出土埴輪のうち、③～⑤も４段目に透かしを持つことから、②と同様４条突帯の資料と考えられる。

朝顔形埴輪で全体を知りうる資料は出土していないが、⑦は底部～頸部の形状を確認できる良好な資料である。底部からやや外傾して立ち上がり、胴部中位にやや膨らみを持ち頸部ですぼまる。残存高は51.2㎝である。突帯は胴部に４条、頸部に１条巡らせ、断面形状は胴部が台形、頸部が三角形である。透かしは下から２段目と４段目に穿ち、下段はやや小さな円形、上段はやや大きめな楕円形を呈する。穿孔位置はやはり段間で角度を違える。外面調整はハケ、内面調整は胴部中位までの下部をナデ、上部をハケとする。色調は赤色を呈し、他の円筒埴輪とは大きく異なる印象を受ける。また、外面肩部には斜格子状の線刻を施す。⑧～⑩から花状部の様子を見ると、口縁部の開き方に違いが見られ、直線的に外傾して開き、口縁部付近で短く外反するもの（⑧）と、口縁部付近から大きく外反するものが見られる（⑨・⑩）。花状部中位に突帯を巡らせ、断面台形のものと三角形のものがある。外面調整は内外面ともハケである。

その他の資料も含めて円筒埴輪を概観すると、普通円筒埴輪の口径と底径は、それぞれ30㎝・20㎝内外の法量である。また、３条突帯も４条突帯も器高は50㎝ほどで、条数と器高の相関関係は認められない。焼成は、須恵質を呈するものや、粉をふくような焼成の甘いものも少量認められるが、比較的良好な焼成である（観察表では「普通」に区分）。黒斑を持つものは確認できなかった。色調は黄橙色が主体で、橙色や赤色のものが伴う。口縁部は内外面とも横ナデし、口唇部を丁寧に整えて、角頭または隅丸形を呈する。口縁部は外反するものが多く、外反の強さにはバラエティが見られる。赤彩を施す資料も多く確認され、口縁部付近の１～２段に赤彩を施す。突帯は断面台形を主体とし、低台形や高台形、不定形などがわずかにみられる。断面三角形のものは朝顔形埴輪の頸部および口縁部に限られる。透かしの形状は円形や半円形

のみで、方形指向の透かしは確認できなかった。円形透かしは正円形のものや横長の楕円形のものがある。口縁部付近に小円孔を施すものも見られる（第20図８等）。外面の調整はほとんどが縦ハケのみとし、横ハケを持つものも数点確認できるが、朝顔形埴輪の肩部の調整として横ハケを用いた資料も含む（第31図14等）。内面調整は、②のようにナデのみのものと、①のように下部をナデ、上部をハケとするものの二者が見られ、輪積痕を明瞭に残すものもある。ハケ原体は非常に細かく細密なものから粗いものまで見られ、外面調整と内面調整に用いる工具をそれぞれ違えるものもある。

円筒埴輪の条数や、普通円筒と朝顔形の相違による樹立箇所との相関関係は不明瞭ながら、埴輪列の埴輪が４条突帯が多く確認されていることから、基壇テラスの外縁には４条突帯の埴輪をメインに樹立されていたと推定される。また、基壇テラスに崩落した状態で３条突帯の円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土していることから、墳頂部にはこれらの円筒埴輪が樹立されていたと考えられる。

上述のとおり、本古墳出土円筒埴輪は非常にバラエティに富むものの、その特徴は下記にまとめられる。

①普通円筒埴輪は３条突帯と４条突帯が確認され、朝顔形埴輪も一定の数量伴う。
②普通円筒埴輪の条数と器高の相関関係は見られない。
③突帯は断面台形を主体とし、低台形や高台形を少量含む。
④透かしの形状は円形または半円形で、円形は横長楕円形を呈するものもある。
⑤横ハケを持つ埴輪も少量出土している。
⑥黒斑を持つ埴輪はなく、須恵質を呈するような埴輪を含むことから、窖窯焼成と考えられる。

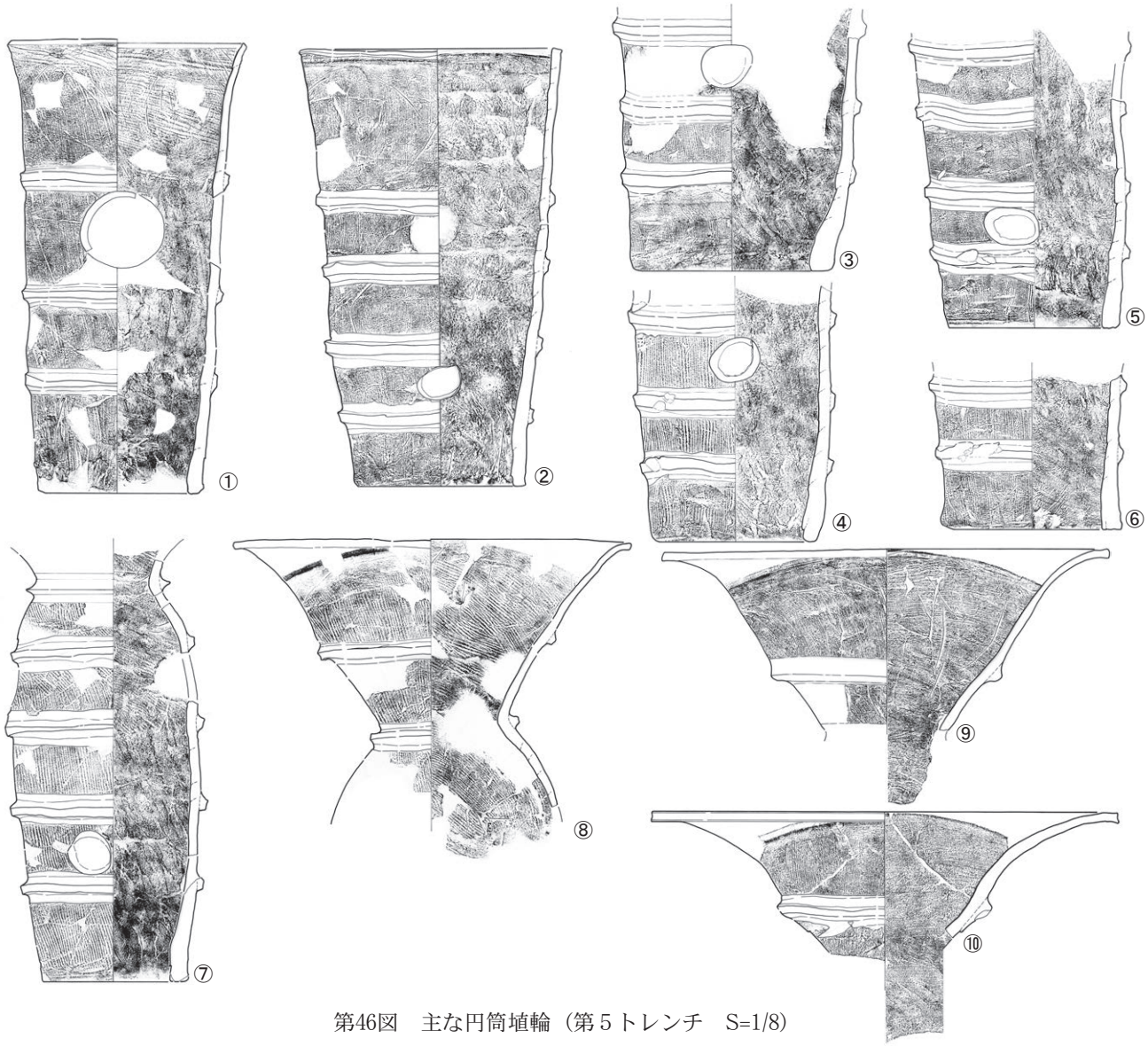
本古墳が築造された５世紀後半は、榛名山東南麓に大型古墳が相次いで造られ、井野川流域の保渡田古墳群には、３代にわたる大型前方後円墳が築かれた。保渡田古墳群出土の円筒埴輪は、法量や突帯の断面形状、整形手法などの型式学的に詳細な検討がなされており、３古墳および周辺遺跡の埴輪は、その技術的な特徴から段階的な変遷が明らかにされている（南雲・若狭1985、若狭2000、山田2009ほか）。本古墳の円筒埴輪と比較すると、法量や突帯などの形態上の特徴、整形手法に類似性が認められる。また、台形を主体とした突帯形状や円形・半円形の透かしを持ち、横ハケを持つ埴輪が少量出土していることから、やや古相を呈すると考えられる。そして、保渡田八幡塚古墳の段階で「条数による法量の序列化、規格化がみられる」（若狭2000）ことを勘案すると、３条突帯と４条突帯で法量に違いが認められない本古墳の円筒埴輪は、保渡田八幡塚古墳と同段階がやや先行する段階の資料とみることも可能だろう。今後の調査に伴う資料の増加と、出土埴輪の詳細な観察や他の古墳の埴輪との比較を通じて、本古墳の位置づけも明らかになっていくと考えられる。

２　形象埴輪

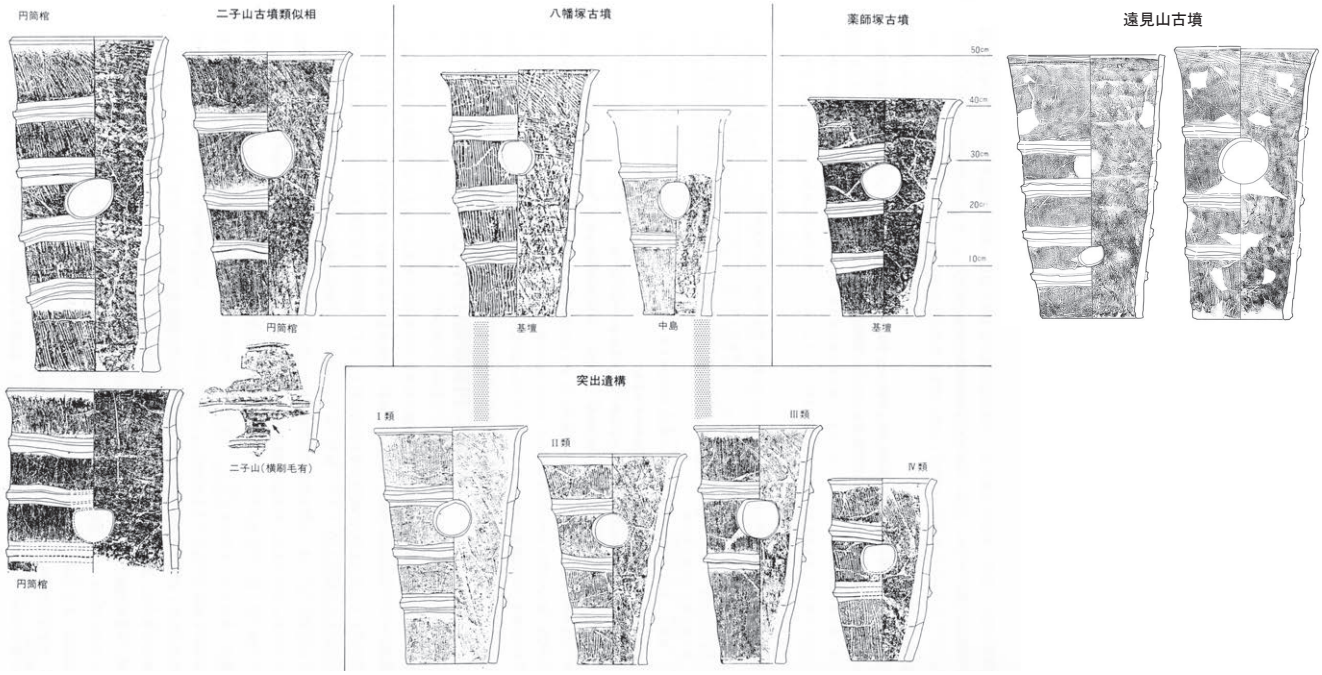
今回の調査では、形象埴輪の出土は、後円部北側と南側の周堀から、それぞれ１点ずつ出土し、後円部南側では人物像が出土している。白みがかった精選された胎土を用い、小型の造形、赤彩の使用など、県内初期の形象埴輪と共通している。また、後円部南側の畑で表採された人物像とも胎土やつくりが類似している。形象埴輪の出土状況を考えると、墳丘に形象埴輪が樹立されていたことは想定しにくく、中堤などの墳丘周辺に形象埴輪が樹立されていた状況が想定される。今後形象埴輪が据えられていた区画を確認するための調査が必要であろう。

３　祭祀跡

第２トレンチでは、前方部墳丘の基壇テラス上で、高坏を主体とした土器がまとまって出土している。トレンチ内の径1.5mほどの範囲に集中して分布し、遺物の分布はあまり



第46図　主な円筒埴輪（第５トレンチ　S=1/8）



第47図　保渡田古墳群出土埴輪との比較（若狭1990より転載、加筆）

周囲に広がらないものと考えられる。また、ほぼ同一レベルから出土しており、一括して据え置かれたものとみられることから、祭祀跡と認定した。14点ほど確認されているが、すべてほぼ完形の土師器で、須恵器や玉類、石製品、鉄製品などは含まない。出土土器は、高坏が12点と主体となり、埦や直口壺が１点ずつ伴う。

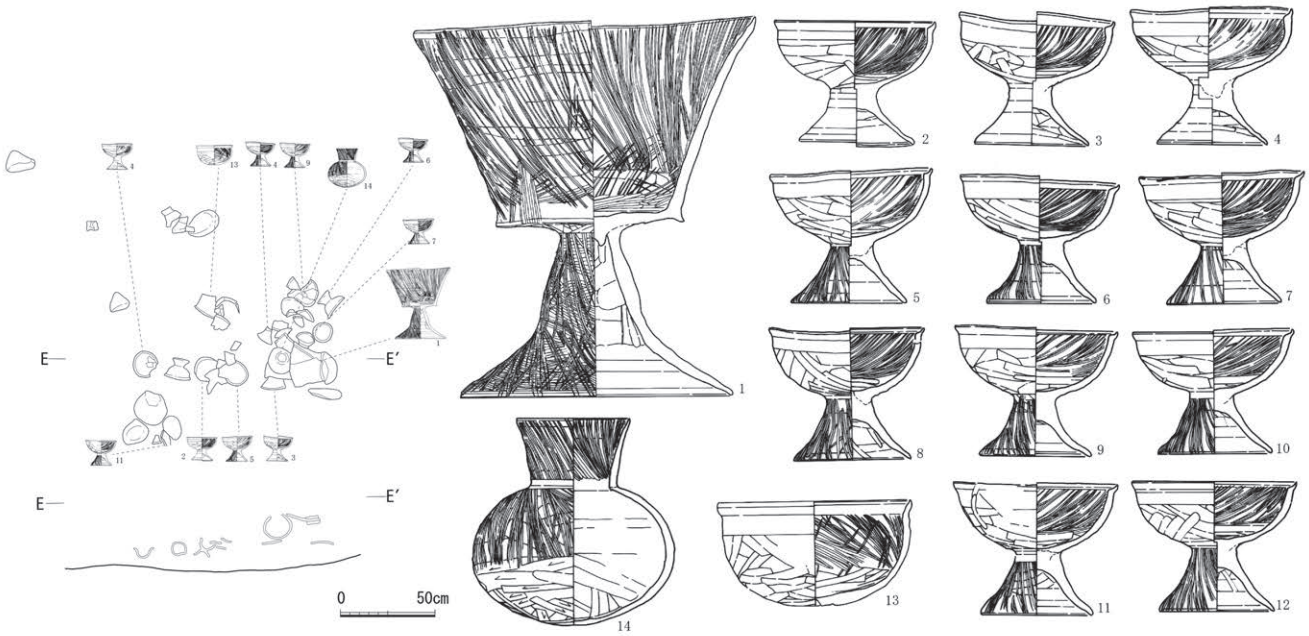
古墳時代中期～後期は、土器集積による祭祀が盛行し、元総社蒼海遺跡群（38）や下芝天神遺跡、金井東裏遺跡など様々な遺跡で検出されている。これらの祭祀遺構の器種構成は、坏を中心とし高坏や直口壺、壺、甕などが伴う。土器全体に占める坏の割合は、遺跡ごとにその比率は異なるが、60～70％を占める（杉山2019）。元総社蒼海遺跡群（38）では、174点の土器が出土しているが、その器種ごとの割合は、坏59.7％・埦1.7％・高坏10.3％・直口壺・甑・鉢が0.6％・甕24.1％・須恵器3.4％である（前橋市教育委員会2012）。土器集積による祭祀遺構とは、土器の出土量とともに、坏を主体とし、甕などを伴う祭祀遺構と、高坏を主体とする本古墳の祭祀跡とはその様相が大きく異なる。

本古墳の祭祀跡と類似したありかたを示すのは、保渡田八幡塚古墳東中島である（右島1988・群馬町教育委員会2000）。昭和４年の調査で、中島をめぐる円筒埴輪列の内側から合計70個体の土師器が出土しており、№１とされた地点では、高坏38点・坩１点・盌１点・坏２点が出土している。また、№２・３地点では坏11点・坩１点・盌１点・長頸坩２点が出土している。高坏を主体とする祭祀の様子は東中島の№１地点と共通している。ただ、東中島の中でも№２・３とは相違が見られる。また、同じく昭和４年調査の西中島では土師器が出土しておらず、中島でも機能の相違が想定されており（右島1988）、同じ中島の中にも何らかの相違がある可能性がある。

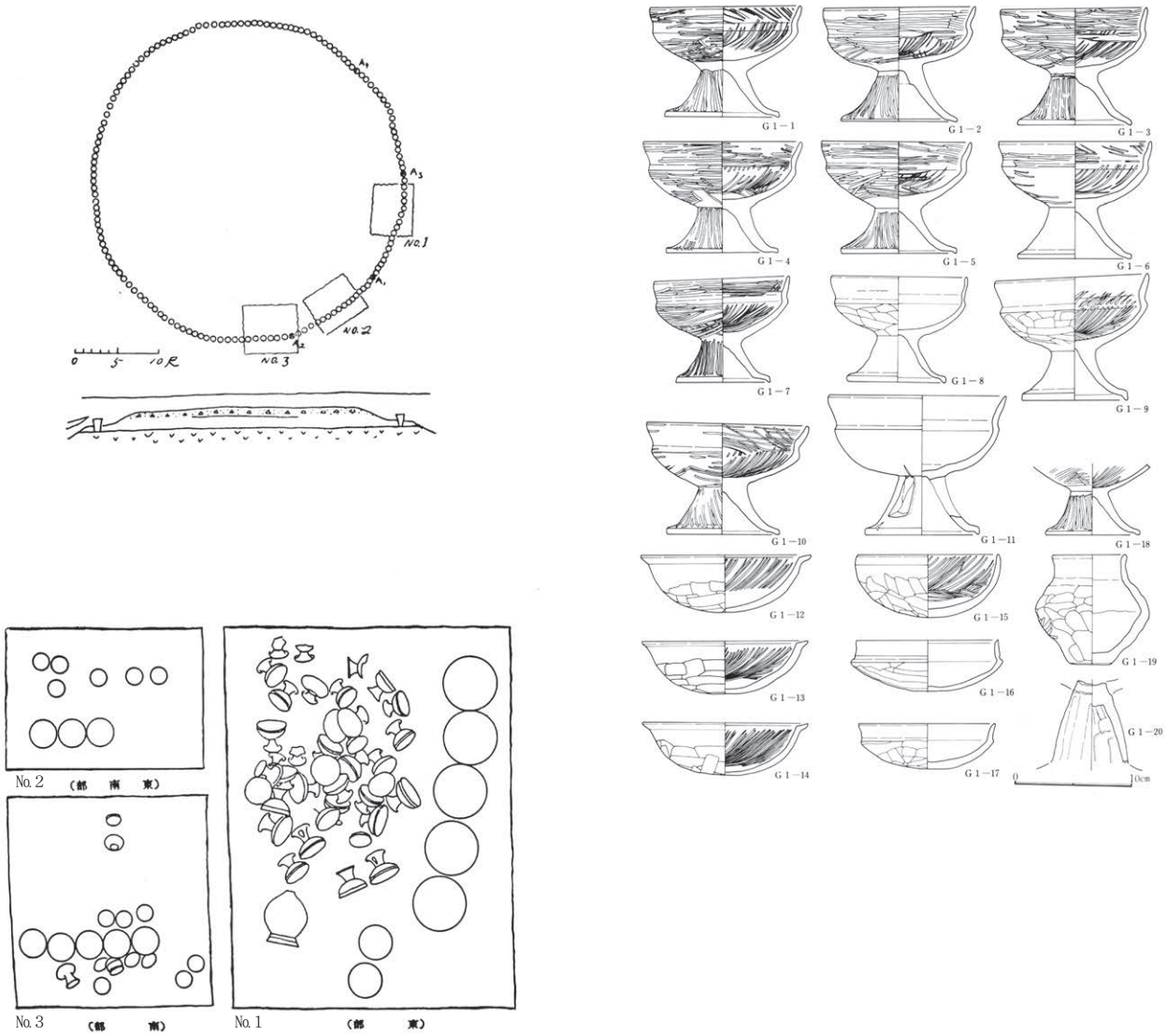
本古墳出土の大型高坏は、いわゆる「三ツ寺型高坏」である。三ツ寺型高坏は、居館址と想定される三ツ寺Ⅰ遺跡をはじめとして、大屋敷遺跡や元総社明神遺跡、下芝天神遺跡、八幡中原遺跡など榛名山東南麓を中心に分布する。また、出土遺構も居館址（三ツ寺Ⅰ遺跡等）や土器祭祀に伴う器物集中遺構（下芝天神遺跡等）のほか、住居址（大屋敷遺跡・八幡中原遺跡等）からも出土している。また大型高坏以外の高坏は、いわゆる内斜口縁坏に脚部を付けたものである。内斜口縁坏は、榛名山東南麓から赤城山南麓、北武蔵まで分布するが、その中心は高崎市の八幡台地を中心とした地域と考えられている（山本2018）。

出土量が少ないため、土器群の明確な年代的な位置づけは難しいが、高坏の坏部や埦が内斜口縁形に限られること、直口壺の胴部最大径が胴部中位に置かれ、ミガキ調整が胴部上半に限定されることから、５世紀後半～６世紀初頭に位置づけられる。また、高坏の坏部や埦が深く、高坏坏部の口縁部上面が受口状を呈し、坏部内面のヘラミガキも底面付近まで及ぶことを重視すれば、５世紀第４四半期の土器群とみてよいだろう。

本古墳の祭祀跡は、上述のとおり前方部で造出部が想定される位置の上方で検出されており、該期の古墳祭祀の様相を知る上で重要な検出事例である。また、周堀に堆積した火山灰や出土した埴輪の年代観とともに、古墳の築造時期を考えるうえでも重要である。そして、用いられた土器の器種構成や、型式学的な特徴から、榛名山東南麓の地域との関連が想定され、総社古墳群の成り立ちを考えるうえでも大きな意味を持つと言えよう。



第48図　遠見山古墳祭祀跡の遺物出土状況と出土土器（土器 S=1/6）



第49図　保渡田八幡塚古墳東中島の遺物出土状況と群馬県立歴史博物館所蔵資料（右島1988より転載）

第４節　蛇穴山古墳･宝塔山古墳の墳丘・周濠範囲について

第１項　蛇穴山古墳の墳丘･周濠範囲について

１　蛇穴山古墳の調査概要

蛇穴山古墳は旧総社小学校校庭に位置し、かつては周濠をめぐらせた大型の方墳であったが、周濠は次第に埋められて、北は旧総社小学校の校庭になり、西は旧総社幼稚園の敷地とされ、東には旧総社小学校プールが存在していた。石室も早くから開口され、弁財天が祀られていた。その奥壁には寛文年間に刻まれた蛇の図と銘があることから蛇穴山古墳と呼称されるようになった。

過去数回に及ぶ発掘調査によって、墳丘長44m、周濠を含めた全長は82mを測る。予想を遙かに上回る良好な保存状態であることも判明した。さらには予想していなかった中堤の存在と中堤内外に整美な葺石を確認できた。石室の天井と四周壁は、それぞれ一枚石を用いて平滑に加工するという卓越した加工技術は他に類をみない。山王廃寺にある塔心礎石材の加工方法と共通するものである。以上の様相から総社古墳群の終焉を飾るのにふさわしい古墳であることが判明した。

蛇穴山古墳の調査は、昭和50年に墳丘への６本のトレンチと石室調査が実施された。この６本のトレンチ調査で従来、円墳であった墳丘が方墳であることが判明した。さらに、Ｂ、Ｆトレンチには多段にわたる葺石が見られた。平成19年の調査は、北西部に６本のトレンチを入れた結果、中堤が検出された。中堤の内外には整美に積まれた葺石が見られた。翌、平成20年の調査では、撤去になったプール跡地の調査を行った結果、想定よりも保存が良かった。後日、判明したことであるが地形が西から東に傾斜を有するためと、周濠が深かったため工事の影響は少なかった。

２　蛇穴山古墳の調査区

Ａトレンチ…南側。石室主軸から延長したライン。全体的に近世の改変が著しい。Ｙ38ライン付近に葺石を検出。

Ｂトレンチ…南東墳丘。葺石の遺存状態が良好であった。原報告では下から第１段目と第２段目の葺石ととらえたが、段差幅が少ないため一括して第２段目としてとらえなおした。挿図では示してないが下部に第１段目葺石が存在する。

Ｃトレンチ…北側墳丘。墳丘の裾部に第１段目の葺石。周濠は近世の改変が著しい。中堤内側の葺石も破壊。

Ｄトレンチ…西側周濠内。墳丘から周濠に移行する部分。

Ｅトレンチ…墳丘北西隅。第１段目の葺石。葺石の残りは悪い。

Ｆトレンチ…墳丘南東隅。第１段目に葺石。上部に大型の扁平の円礫を配列。

１トレンチ…北側中央の中堤部。最初に外周溝を確認した調査区。中堤外側に葺石列。内側葺石列は破壊。

２トレンチ…北側西部の中堤部。中堤内外の葺石列はすでに破壊を受ける。

３トレンチ…北西隅の周濠。近世以降の掘削を受けた状況であった。

４トレンチ…西北の中堤部。中堤内側の葺石は良好な状態で検出。周濠のほとんどは近世の掘削を受ける。外周溝は検出されない。

５トレンチ…北側中堤部。外周溝は検出されない。

６トレンチ…後の20トレンチに継続された調査区。北西隅を検出。外周溝は検出されない。

７トレンチ…墳丘東側。かつてプールがあったにもかかわらず、周濠と墳丘を検出できた。検出された葺石は第１段目と第２段目。８トレンチも同様の葺石。

８トレンチ…墳丘東側の調査区。７トレンチと同様に第１段目と第２段目の葺石の検出。

９・10トレンチ…墳丘東北隅。一列の大型扁平円礫の配列。第１段目葺石の上面。上面に大型の扁平な円礫を配置するのはＢ、Ｆトレンチでも見られる。覆土中から多量の玉石が出土。

第３表　蛇穴山古墳と宝塔山古墳の調査経過

No.	蛇　穴　山　古　墳	宝　塔　山　古　墳
1		昭和43（1968）年３月４日～３月12日 石室と前庭部の検出。 石棺の八角形穴の蓋石出土。
2	昭和50（1975）年８月１日～８月16日 ＡからＦトレンチの調査 石室と前庭部実測・方墳と判明	
3		平成２（1989）年２月22日～３月13日 国立歴史民俗博物館による調査 墳丘測量と石室実測
4	平成19（2007）年10月29日～10月31日 １～６トレンチ。周濠北西部の調査 中堤の発見。中堤内外に葺石	
5	平成20（2008）年２月６日～２月16日 ７～13トレンチ東西の調査 プール跡地の調査	平成20（2008）年２月６日～２月16日 14～18トレンチ。北東周濠の確認。
6	平成21（2009）年６月８日～７月28日 総社町屋敷南Ⅰ遺跡 20～22トレンチ	平成21（2009）年６月８日～７月28日 総社町屋敷南Ⅰ遺跡 北東コーナーの調査
7		平成23（2011）年６月６日～６月14日 総社町屋敷南Ⅱ遺跡 北東部の調査
8	平成27（2015）年７月13日～７月23日 総社町屋敷南Ⅲ遺跡（資料館用地） 中世の溝跡	

11トレンチ…西側南の調査区。外周溝と中堤を検出。中堤の内外に葺石。周濠は近世の破壊を受ける。墳丘裾部がかろうじて残る。葺石用材と多量の玉石を検出。
12トレンチ…西側の調査区。中堤外側の葺石第１段目のみ検出。
13トレンチ…西側の調査区。中堤の内外から葺石列。外面は３段。内面は６段。
20トレンチ…中堤北西隅。３ｍ×３ｍの範囲を調査。コーナー部には大型川原石の側面を重ねて10段ほど積まれる。外周溝が検出できなかった。おそらく標高が高いため、掘削を受けて消滅したことも考えられる。このあたり一帯に外周溝の検出ができない。北西隅の４～６トレンチはいずれも外周溝の検出がない。近接する２トレンチも外周溝は浅く狭い。わたりとなったことも考えられるが、２トレンチの状況から地形に起因するものと考えたい。
21トレンチ…11トレンチの再調査区。11トレンチに同じ。
22トレンチ…北側の周濠部。外周溝と中堤部分。中堤の外側は葺石３段積を検出。

３　蛇穴山古墳の規模と範囲

以上の調査結果を踏まえると、蛇穴山古墳の外部は周濠、中堤、外周溝で構成される。これら外部施設は、北、東、西面で検出されていることから、全周していたことが考えられる。西側の外周溝、中堤ラインをもとに石室主軸で折り返して算出した墳丘長が44mであり、周濠での全長が82mである。墳丘高は従来からの５ｍと変化はない。方位は、N-13°-Eに振れる。

外周溝の上幅は平均３ｍ、最小2.8m～最大3.2m、深さは0.2～0.5mである。中堤の上幅は平均５ｍ、最小4.7m～最大5.2m、下幅6.1～6.4mである。中堤の両側には葺石が存

在する。葺石の用材は径0.2m～0.5m程度の扁平な川原石を平積みで用い、水平方向を意識しながら積んでいる。20トレンチのコーナー部の角には同じサイズの大型川原石を選び抜いて用いている。より角部分を意識した結果と思われる。

周濠の残りは埋め戻しなどにより極めて悪く、ほとんどの箇所で底面まで掘り抜かれるといった掘削を受けている。周濠の幅は平均11mであり、深さは1.1～1.9mであったと推定される。墳丘裾部から、葺石とともに多量の径５～10㎝程度の玉石が検出された。玉石の存在から墳丘基壇平坦面や葺石の裏込めに用いられたと考えられる。墳丘上部の葺石は多段構成の可能性も残しているは、今後の調査に俟ちたい。

今後も、墳丘形状の追究を目的とする継続調査を望みたい。従来の調査では、北西隅の解明が中心となった調査であった。北西隅と対角線となる反対側の南東隅の調査は形状、規模をより正確にするうえで必須である。機会を狙って望むところである。

第２項　宝塔山古墳の墳丘･周濠範囲について

１　宝塔山古墳の調査概要

墳丘長66mの宝塔山古墳は、墳丘長56mの愛宕山古墳、44mの蛇穴山古墳を遥かに凌ぐ規模を誇る。周濠を含めた大きさでは、102mという数値は東国の終末期を飾るにふさわしい大古墳といえる。本墳も早くから開口され、石棺内やその他の副葬品は不明となっている。ちなみに、平成24年６月に会津若松市のワシントンホテルで開催された『米山雲外先生を偲ぶ刀剣鑑賞会』では、切刃造刀の刃長57㎝、全長71㎝の両面研磨された宝塔山古墳出土という大刀が展示されていた。

古くは、江戸時代の寛政年間に記された山吹日記にも見えており、大正９年には福島武夫氏による石室実測図が作成されている。昭和に入って墳丘の測量が行われ、昭和31年１月にも内部構造の実測が実施されている。しかし、羨道入り口が埋没していたため昭和43年になって羨道部の発掘調査が行われ、昭和44年に石室前面部と前庭部の復元整備がおこなわれた。その概要については奈良文化財研究所刊行の整備事例集に紹介されている。

平成２年に国立歴史民俗博物館による墳丘と石室と石棺の測量・実測調査が実施された。平成20年、平成21年に北東部の周濠調査、平成23年には北東部周濠の発掘調査が実施された。

２　宝塔山古墳の調査区

14トレンチ…北東部の調査区。周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、1108年浅間火山から噴出したAs-B層が底面近くに厚く堆積する。墳丘近くまで調査区は及んでるが、墳丘近くの大部分が破壊を受けており、情報は得られなかった。

15トレンチ…北東部周濠の調査区。周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、As-B層が厚く堆積する。

17トレンチ…北東部の調査区。北側周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、As-B層が厚く堆積する。

18トレンチ…北東部の調査区。北側周濠の立ち上がりを確認。周濠内には、As-B層が厚く堆積する。なお、墳丘に近づくにつれ堆積層が墳丘に向かって立ち上がる状態が観察できた。

総社町屋敷南遺跡調査区…この調査区では北東隅を10m×10mの範囲で周濠の立ち上がり部分を検出し形状を観察した。さらに、コーナー部に２m×１mのテストピットを設定し、底面まで調査を行った。

総社町屋敷南Ⅱ遺跡調査区…北側周濠の調査区。広範囲に周濠部分の調査を行った。

３　宝塔山古墳の規模と範囲

周濠外側の立ち上がりを６ヶ所で確認できた。東側に３ヶ所、北方向に３ヶ所である。これによって北東隅は確定できるものとなった。さらに18トレンチの墳丘近くの土層が墳

丘に向かって緩く立ち上がることが観察できたことから墳丘が近いと判断できた。その状況から鑑みて周濠幅を18mと想定した。墳丘復元については、白石1990を全面的に援用して墳丘図を作成している。白石1990によれば従来２段築成とされていた墳丘について詳細な墳丘観察から３段築成として捉え直している。

以上の結果から宝塔山古墳の墳丘長は66mとなり、周濠を含めた規模は102mを測る。墳丘の高さは従来通り12mである。方位は、N-32°-E に振れる。蛇穴山古墳で認められた周濠外部の中堤や外周溝の存在は認められなかった。

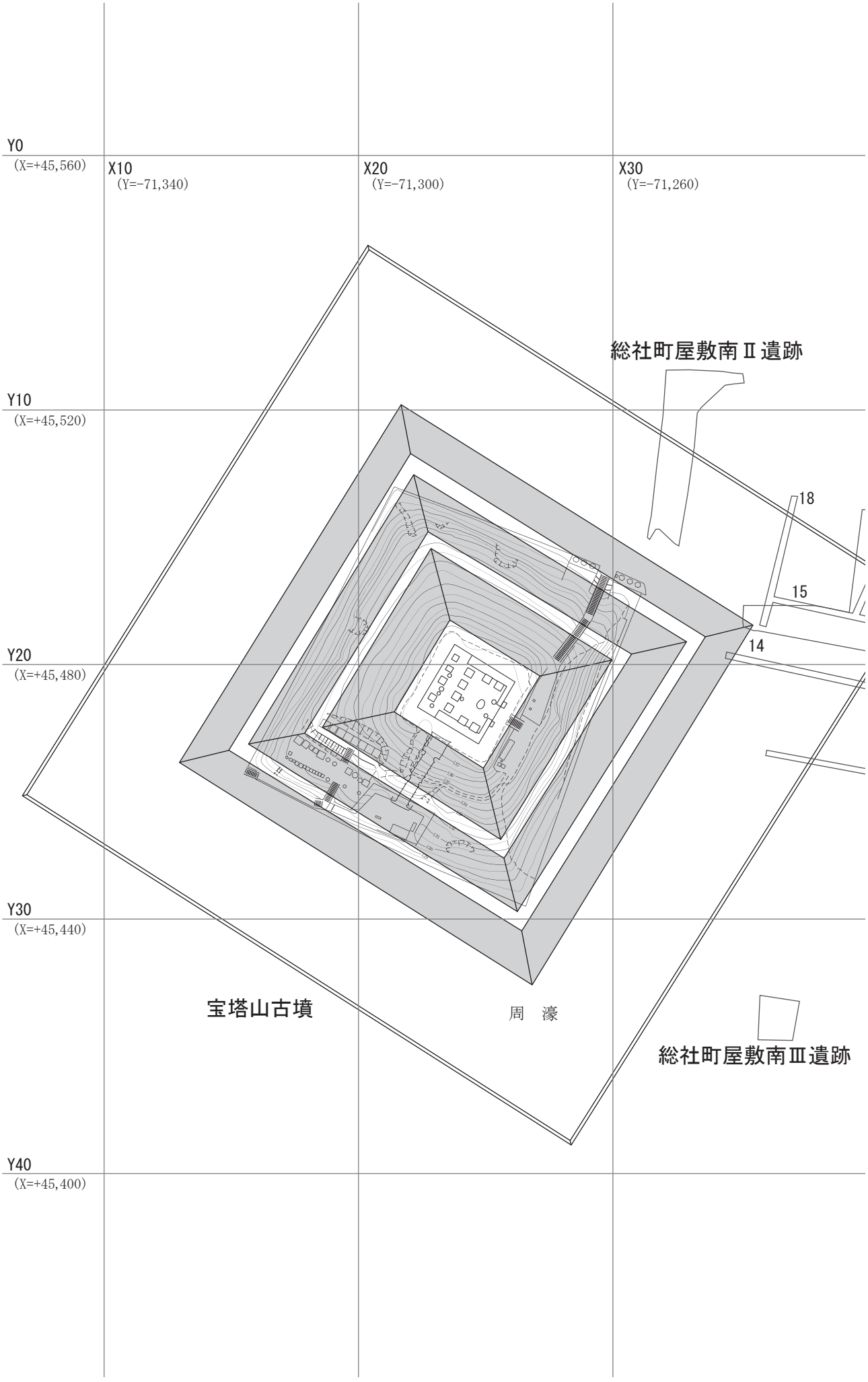
なお、いずれのトレンチにおいても周濠の深さは0.5～0.7mであり、底面近くに1108年浅間火山から噴出された As-B 層の純層が堆積する。底面近くから As-B 層が検出されることは、平安時代後期に至っても古墳が保守管理されていた状況が想定されよう。なお、今後、可能であれば北東隅と対角をなす南西隅について確認調査を望むところである。

４　おわりに

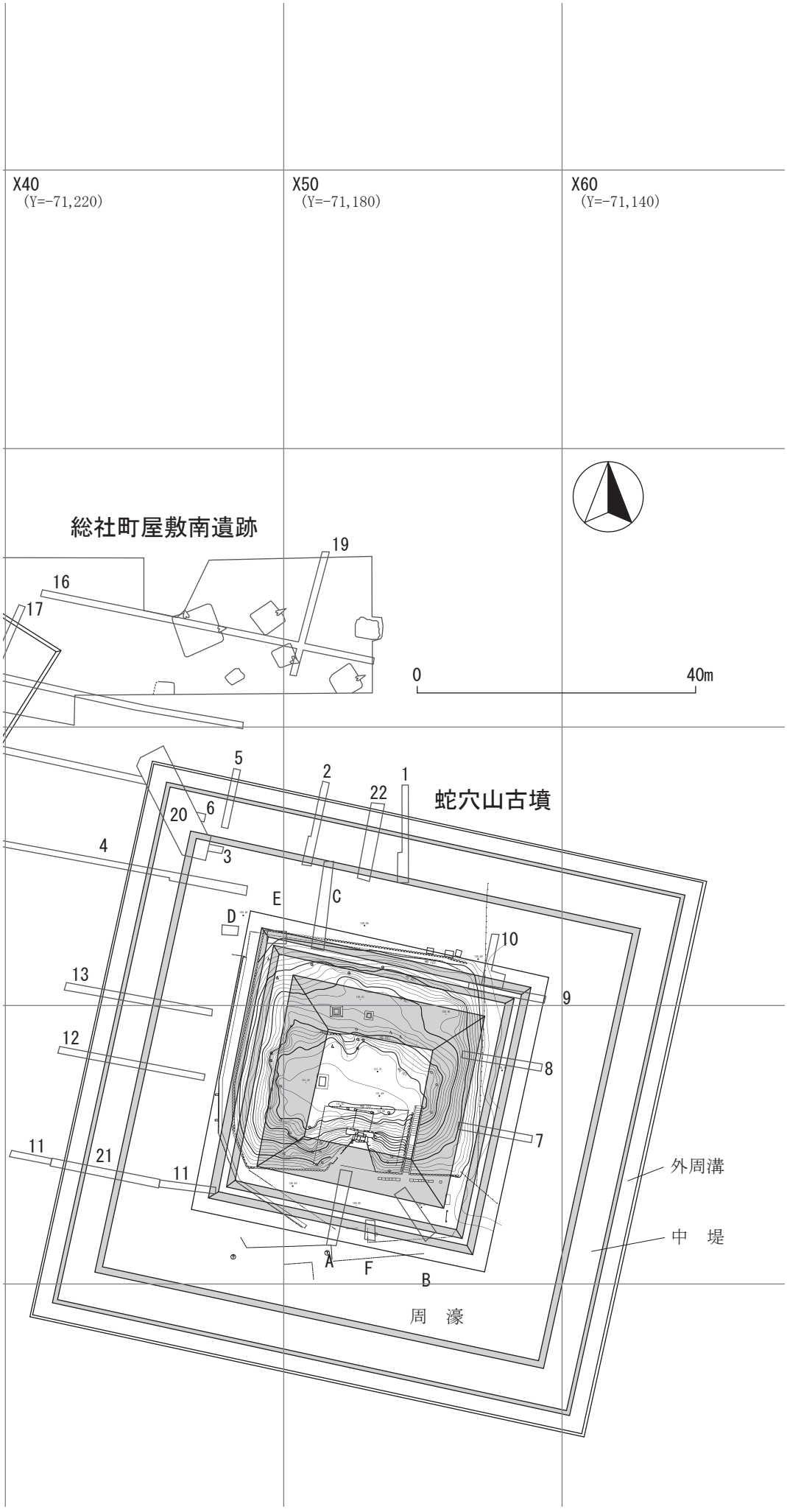
今回の調査によって宝塔山古墳と蛇穴山古墳はかなり接近して築造されたことが判明した。その距離は20mである。この距離は古墳造成にあたり、施工上の安全確保からも限界の距離といえる。ここまで近接して、古墳を築造できるということは２古墳の被葬者の深いつながりがあったことが想像に難くない。古墳文化から仏教文化やがて律令時代へ変革しようとする時期、上毛野地域一帯を掌握した大豪族としての地位が確立された時期である。その象徴として、漆喰塗りの精緻かつ技巧を凝らした石室や墳丘を飾る仕掛けが造出されたものと思われる。いわば国を掌握する威儀の装置として、２基の古墳が並列して造墓されたのではないか。

主軸方向の違いは時の社会的規範を反映したものといえる。すなわち宝塔山古墳の東に32°振れるのに対して、蛇穴山古墳が13°東の振れである。これは、山王廃寺や上野国府などの大型建物群の軸方向が７世紀中葉を境に真北への指向性が強まってくることと軌を一にする状況である。近接する地点に墳丘を築造するが、北への指向性という社会的規範は遵守した結果であったといえよう。

なお、これらの調査で蛇穴山古墳について７世紀の第４四半期、宝塔山古墳については７世紀中葉ないし第３四半期といった従来の編年基軸を修正すべき資料の検出は認められなかった事も付記しておきたい。



第50図　蛇穴山古墳と宝塔山古墳の墳丘・周濠の範囲図


X40
(Y=-71,220)
X50
(Y=-71,180)
X60
(Y=-71,140)
総社町屋敷南遺跡
19
16
17
0
40m
5
2
1
22
蛇穴山古墳
20
6
4
3
E
C
D
10
13
9
12
8
7
11
21
11
外周溝
中　堤
A
F
B
周　濠

参考文献

総社町　1956　「史蹟及び文化財」『総社町誌』
尾崎喜左雄　1966　『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
前橋市教育委員会　1968　『国指定史跡宝塔山古墳石室調査概報』
尾崎喜左雄　1971　「蛇穴山古墳」前橋市史第１巻
尾崎喜左雄　1971　「宝塔山古墳」前橋市史第１巻
前橋市教育委員会　1976　『史跡蛇穴山古墳調査概報』
川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-２日本考古学会
松本浩一　1981　「蛇穴山古墳」群馬県史資料編３原始古代３
石川正之介　1981　「宝塔山古墳」群馬県史資料編３原始古代
利根川章彦　1982　「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』５土曜考古学研究会
鈴木徳雄　1983　「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』７土曜考古学会
津金澤吉茂　1983　「古代上野国における石造技術についての一試論」『群馬県立歴史博物館紀要』群馬県立歴史博物館
右島和夫　1985　「前橋市総社古墳群の形成過程とその画期」『群馬県史研究』22群馬県史編さん委員会
南雲芳昭・若狭徹　1985　「保渡田三古墳の埴輪」『第６回三県シンポジウム　埴輪の変遷』北武蔵古代文化研究会
坂口　一　1987　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』４　群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県教育委員会　1988　『三ツ寺Ⅰ遺跡』
右島和夫　1988　「保渡田３古墳について」『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県教育委員会
右島和夫　1990　「古墳から見た五・六世紀の上野地域」『古代文化』47－２
群馬町教育委員会　1990　『保渡田Ⅶ遺跡』
若狭　徹　1990　「考察」『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会
白石太一郎　1990　『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館考古研究部
右島和夫　1992　「古墳から見た6,7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44国立歴史民俗博物館
前橋市教育委員会　1992　『平成３年度市内遺跡発掘調査報告書』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1993　『大屋敷遺跡Ⅰ』
右島和夫　1994　『東国古墳時代の研究』学生社
右島和夫　1995　「「上野型埴輪」の成立」『研究紀要』12群馬県埋蔵文化財調査事業団
右島和夫・徳江秀夫・南雲芳昭　1995　「上野」『全国古墳編年集成』雄山閣
若狭　徹　1995　「上野西部における５世紀後半の首長墓系列」『群馬考古学手帳』５群馬土器観会
原始古代部会　1995　「若宮八幡北古墳の埴輪」『高崎市史研究』４高崎市史編さん専門委員会
群馬県教育委員会　1995　『舞台遺跡』
群馬県教育委員会　1998　『下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡』
群馬町教育委員会　2000　『保渡田八幡塚古墳』
永井智教　1998　「口縁部に小穿孔を持つ円筒埴輪」『土曜考古』22　土曜考古学研究会
群馬県教育委員会　1999　『馬場東矢次Ⅱ遺跡・新川鏑木遺跡・井出二子山古墳・保渡田八幡塚古墳』
若狭　徹　2000　「保渡田八幡塚古墳および保渡田古墳群周辺の円筒埴輪」『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会
若狭　徹　2000　「保渡田八幡塚古墳の造営企画と首長墓系譜」『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会
前橋市教育委員会　2005　『大室古墳群』
前橋市教育委員会　2007　『年報』37
三田照芳・野村正弘　2008　「利根川・神流川の河川礫調査」『群馬県立自然史博物館自然史調査報告書』４群馬県立自然史博物館
前原　豊　2009　『東国大豪族の威勢・大室古墳群』新泉社
高崎市教育委員会　2009　『井出二子山古墳』
山田俊輔　2009　「井出二子山古墳の埴輪」『井出二子山古墳』高崎市教育委員会
若狭　徹　2009　「井出二子山古墳の規格」『井出二子山古墳』高崎市教育委員会
青木　敬　2009　「古墳の築造企画と構築技術」『季刊考古学』106雄山閣
前橋市教育委員会　2010　「総社町屋敷南遺跡」年報第39集
伊勢崎市教育委員会　2010　『阿弥陀古墳』
右島和夫　2010　「利根川中流域における６世紀後半の前方後円墳」『阿弥陀古墳』伊勢崎市教育委員会
前橋市教育委員会　2011　「蛇穴山古墳・宝塔山古墳試掘調査の概要」年報第40集
前橋市教育委員会　2011　『総社町屋敷南遺跡２』
右島和夫　2011　「古墳時代の毛野・上毛野・下毛野を考える」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
若狭　徹　2011　「中期の上毛野」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
前橋市教育委員会　2012　『元総社蒼海遺跡群（38）』
高崎市教育委員会　2013　『八幡中原遺跡４』
前橋市教育委員会　2015　『総社町向畑遺跡№１』
若狭　徹　2017　『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
右島和夫　2018　『群馬の古墳物語』〈上巻〉〈下巻〉上毛新聞社
山本良太　2018　「群馬県と埼玉県に分布する坏形土器」『大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録』４前橋市教育委員会
杉山秀宏　2019　「金井東裏遺跡の３号祭祀遺構の特徴について」『金井東裏遺跡』群馬県教育委員会

写　真　図　版

第１トレンチ完掘状況（北西より）

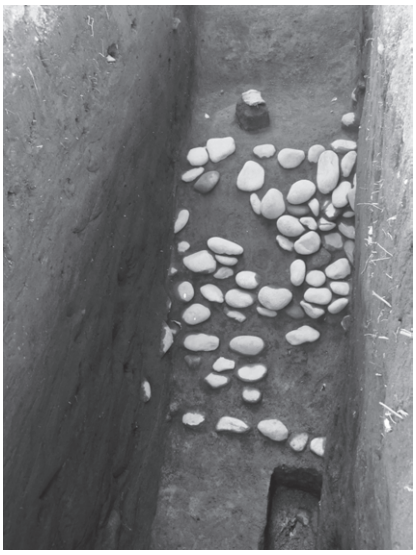
周堀墳丘側立ち上がり（T1）

周堀外側立ち上がり（T1）

墳丘土層堆積状況（T1）

周堀内遺物出土状況（T1）

周堀外側立ち上がり完掘状況（T2）



第１段葺石検出状況（T2）

基壇テラス遺物出土状況（T2）

祭祀跡遺物出土状況（T2）

第２・３段葺石検出状況（T2）

第２段葺石検出状況（T2）

第３段葺石検出状況（T2）

墳頂部白色粘土堆積状況（T2）

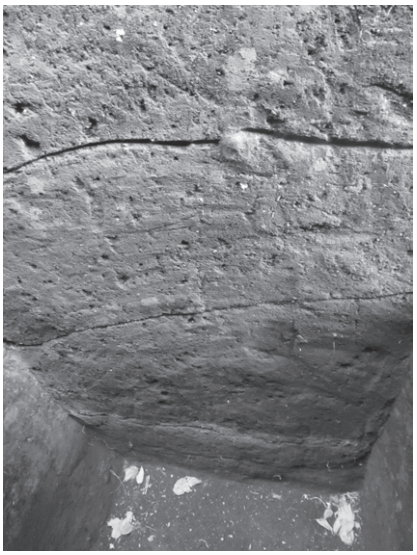
第３トレンチ完掘状況

周堀完掘状況（T3　東から）

周堀土層確認状況（T3）

墳丘断ち割り土層確認状況①(T3)

墳丘断ち割り土層確認状況②(T3)

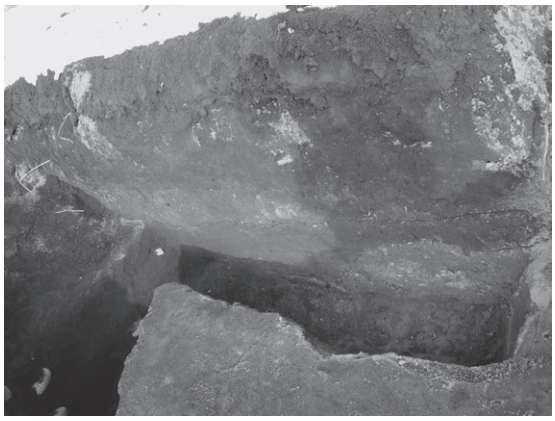


墳丘断ち割り土層確認状況③(T3)

遺構確認状況（T4）

周堀掘り下げ状況①（T4）

周堀掘り下げ状況②（T4）



土層確認状況（T4）

くびれ部葺石検出状況（T5）

東壁土層確認状況（T5）

中央ベルト土層確認状況（T5）

西壁土層確認状況①(T5)

西壁土層確認状況②(T5)

くびれ部サブトレ土層確認状況（T5）

埴輪列検出状況①(T5)

埴輪列検出状況②(T5)

くびれ部遺物出土状況①(T5)

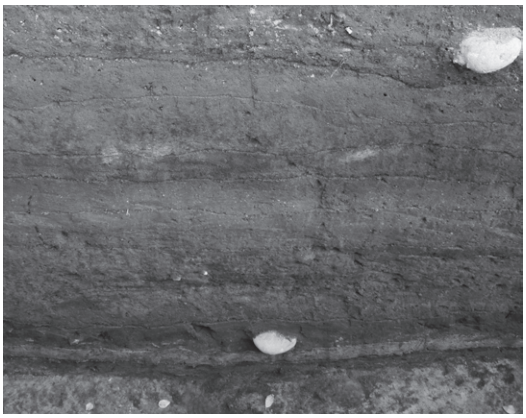
くびれ部遺物出土状況②(T5)

周堀完掘状況①(T6　南から)

周堀完掘状況②(T6　北から)

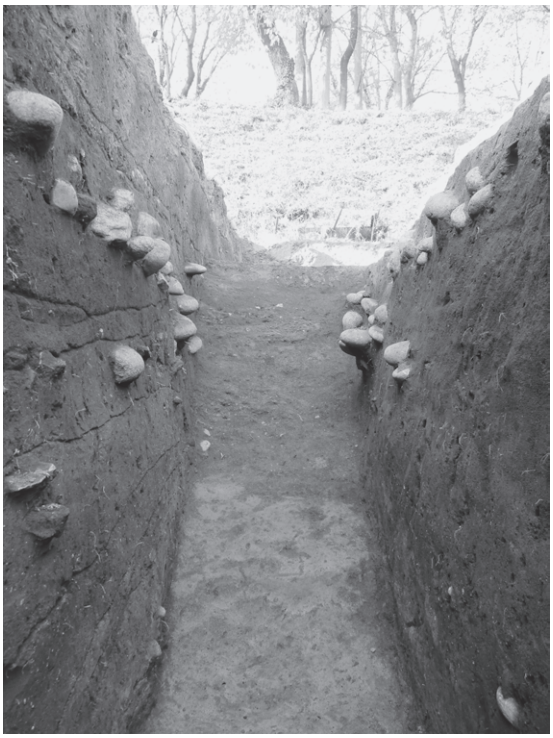
基壇斜面葺石 (T6)

井戸跡検出状況（T6）



周堀内土層堆積状況（T6）

周堀完掘状況（T7）



基壇立ち上がり確認状況（T7）

周堀土層確認状況①（T7）

周堀土層確認状況②（T7）

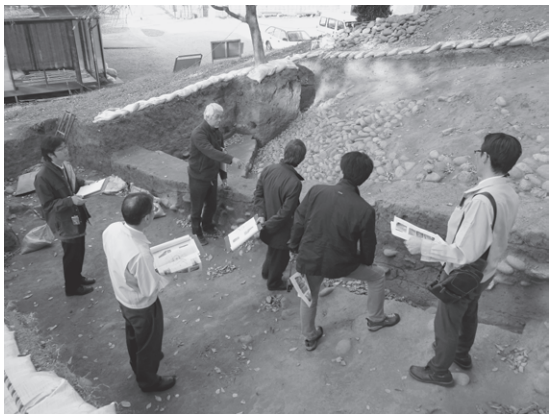
第８トレンチ完掘状況

土層確認状況①(T8)

土層確認状況②(T8)

第１号土坑完掘状況（T8）

総社古墳群調査検討委員会議（H30）

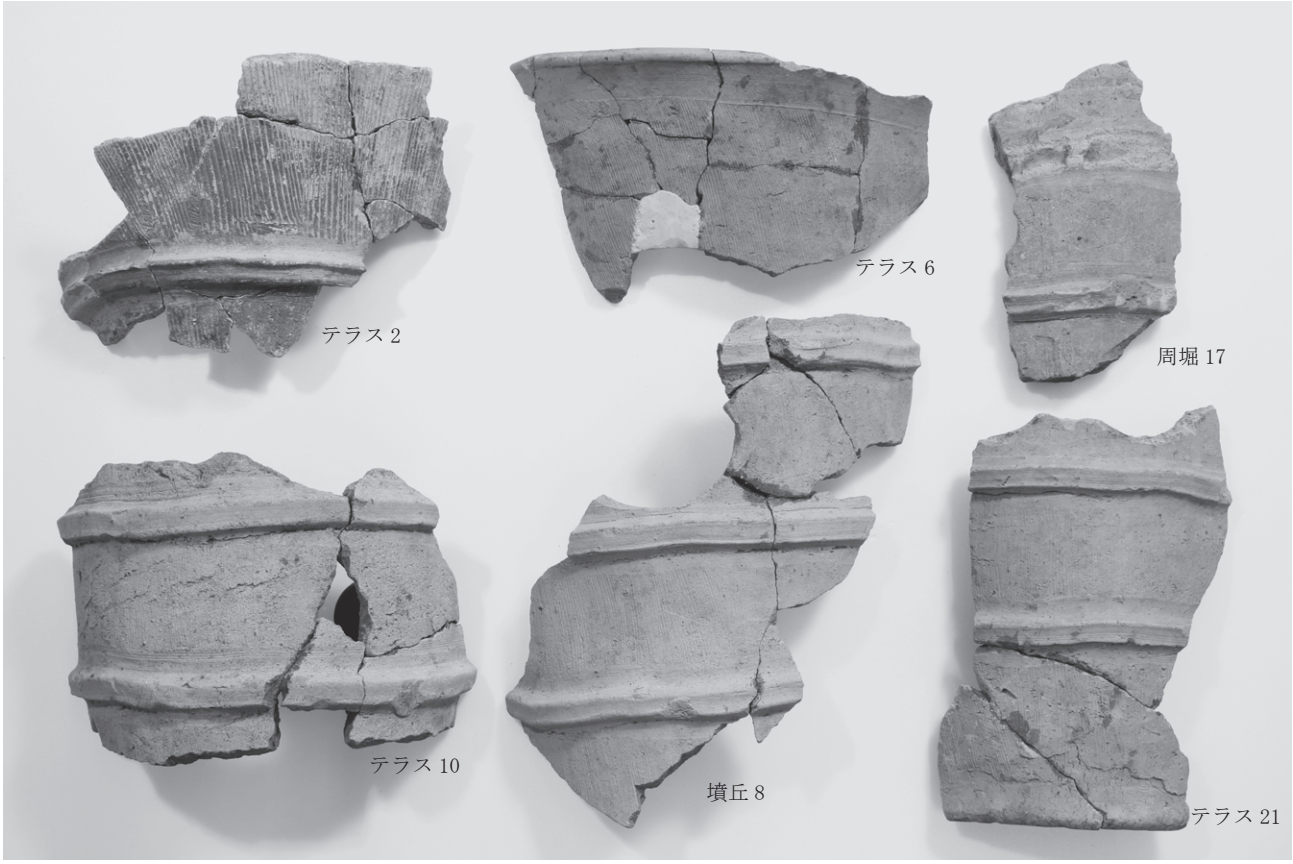


委員による現地指導の様子（H30）

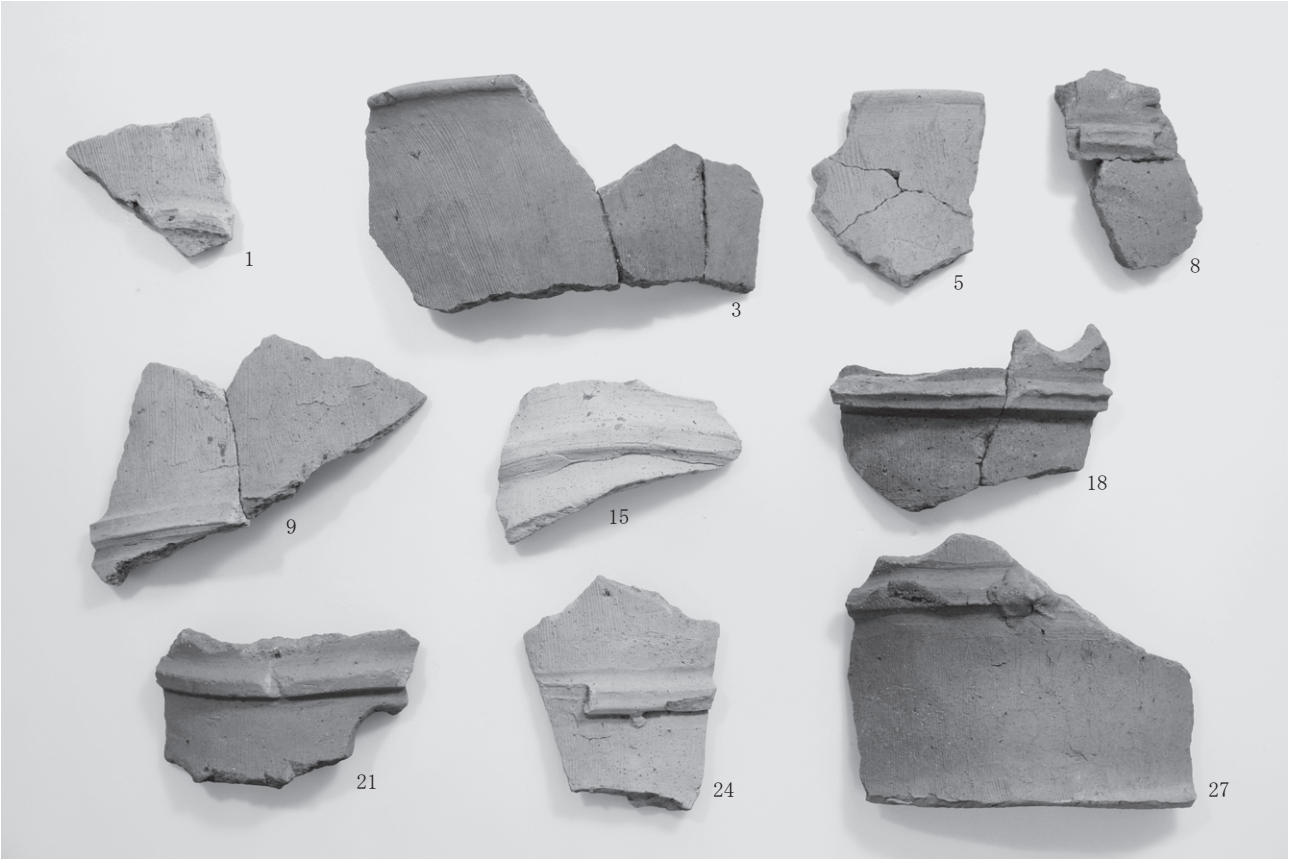
遠見山古墳出土形象埴輪

第１トレンチ出土埴輪

第２トレンチ祭祀跡出土土器



第 2 トレンチ出土埴輪



第 3 トレンチ出土埴輪

第 4 トレンチ出土埴輪

第 5 トレンチ出土埴輪①

第５トレンチ出土埴輪②

第５トレンチ出土埴輪③

第６トレンチ出土埴輪

第７トレンチ出土埴輪

総社古墳群範囲内容確認調査報告書Ⅰ
―遠見山古墳の調査―

印刷　令和２年３月12日
発行　令和２年３月16日

編集　前橋市教育委員会
発行　群馬県前橋市総社町三丁目11-4

印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67